
野良猫物語

斑

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

野良猫物語

【Nコード】

N4384C

【作者名】

斑

【あらすじ】

猫のような耳としっぽのはえた獣人のガレは、カリスと出会う。ガレは警戒したが、カリスはニンゲンだけれどガレを獣人と知っても嫌な顔をしない。それどころか、ガレにしっぽを触らせて、触らせてとせつついて……。<完結済み>

ガレとカリスと、ソラの物語 1（前書き）

年齢制限無し、350枚、童話風。

ちびっこさん歓迎、そのおかあちゃんも大歓迎よと、

優しく丁寧、難しくない言葉使いを目指して書いてました・・・。

ガレとカリスと、ソラの物語 1

ドジなんて、踏んでいないはずなのにずっとだった。

ガレは自分の後に付いてくる人影を気にして苛立っていた。

二人か三人だ。

裕福な街につきものの若くてガラの悪いちんぴらのような者たちで、たぶんただの物取りだと思った。小柄で一人でいる自分の持ち物を、隙を見つけて奪おうとしているだけ。

けれどその思うすぐそばから、不安はゆらゆらと沸き上がってガレを息苦しくすっぱりと覆い尽くしてしまうのだ。

苛々と唇を噛んでいた。

薄めのすつきりとした口元。少年らしい幼さと精悍さを両方合わせもった顔立ちがフードの陰にちらちら、と覗いていた。

表情は拭いきれない不安にこわばって、それは少年にとって恐怖と言えるほど強いものだと教えている。

ガレの足運びは、さきほどから早足から小走りへと変わっていた。そして人通りのある大通りから脇へ一歩逸れてからは、全力に走っていた。

建物と建物の間の太陽の明るい昼間でもほとんど日陰になる細い路地は湿って薄汚れて、お世辞にも歩んで楽しいとは言えない道だった。建ち並ぶ店の裏口からいらなくなつて放り出されたきりに置かれていような木箱や空き瓶が転がっている。

風雨に晒されるままのそれは急ぐガレの足下に、意地悪をしているような具合に。

でも、軽やかに道を走ってゆく小柄な少年・ガレにとって、こうしたこの街でもあまり変わらない物たちの見慣れた光景は、かえって安心感を感じさせるものだった。

薄暗い道。

けれどもそれはガレが普段、望んで踏み込むものだったから。

よくも悪くもそこには人が少ないのだから。

それはガレに気づいて追いかけてくる者が少ないということ。

ガレの窮地に気が付いて、逆に助けしてくれる者が出現する可能性も減ってしまうわけだけど今まで生きてきた中で、ガレは出会ったニンゲンに優しくしてもらったことはほとんどなかった。なら、そんなものは、すっぱりと当てになんかしないのだ、というのがガレの最近の気持ちだった。

走る。

走る。

全力で、現れた路地を最初は左に折れて、次はまた左。

交差した道を横切って次は右へ飛び込んでいた。

走ることに慣れるガレでも身体が熱くなり、マントの背中には大きく跳ねた拍子にころつと汗の玉が気持ち悪く転がり落ちて締めた腰の部分に溜まっている。

呼吸が上がって苦しくなっていた。

もうそろそろ、いいかもしれない。

追いかけてきていた者たちはやはりただの物取りで、勢いよく走り出したガレにあっさりと諦めたように姿もと気配もとつくになくなっていたから。

もう大丈夫、だろう。

安心していいのだ、と繰り返して自分に言い聞かせながら、後ろばかりを気にしていたので、ガレは再び曲がって飛び込んだ先にひっそりとあった気配をうまく感じ取れなかったのだ。

ぶつかる寸前に気が付いて、うわっ、と驚いて止まろうとしたが無理だった。

どん、とガレは相手にぶつかってしまった。

それでもなんとか、顔と顔をぶつけてしまうのだけは避けて、肩。

「あっ」

という相手の声を、一緒になってなだれ込んで地面に倒れる寸前、すぐ近くで聞いた気がした。

でも、それを聞いた上で。

自分がぶつかってしまったのは女の子だとガレは思った。

うわ、しまった・・・女は泣き虫だ、と後悔と軽い罪悪感を感じて・・・。

でも違ったのだ。

相手は同じ男で、背の高さも歳も同じぐらいの13、4歳ほどの少年でガレの憂鬱は少し晴れたのだけどー！。

女みたいな奴だった。

癖のある黒髪が頂で一つに束ねられるほどに長く伸びてしまっているガレとは反対の白っぽい、金色の髪をしていた。

肩に届くぐらいのサラサラの髪だ。

少し広めの通りで建物の隙間から差し込んだ太陽の光を浴びてきらきらと輝いていた。

日焼けしていない白い肌、灰青色の大きな瞳にそこだけ紅い優しい色の唇。

声では男か女か判断できなかったのだけれど、顔を見ても女だと思った相手は、ぶつかって痛いと言きだすのだろうかと思心びくびくしたガレの想像とも反対で、明るい声をあげていた。

「驚いた！」

大きな瞳は丸く見開かれてガレを見つめていた。

女だとガレに思わせた相手は出会い頭に肩をぶつけて押されるように後ろに尻餅を付いたのだが、突っ込んでいったガレはおでこだったろう。

とつさに手を着こうとしたがそこに押し倒した相手の頭があつて、一瞬のためらいでしたたかにガレは自分の額を地面に打ってしまうことになった。

目の前の星が跳んだような痛みを、呻きながら掌で撫でて散らせ

ているなかでガレの気持ちを逆なでするような楽しそうな声。

「ねえ、ねえ。すごいよ。すごい驚きだよ！きみ、すごい！！」
「はあ？」

高い声に耳にごく近いところで騒がれて、ガレは涙の滲んだ琥珀色の瞳を向けていた。

「・・・なんだよ・・・」

なにがすごいのか、そう言われてもガレにはまったくわからなかったのだから。

その響きには、褒めているかのような色があるから余計に不思議で無視できなかったのだ。

知らない誰かにそんな声をかけられたことなどガレは今までなかったのだから。

なんだか、くすぐったい。

向けられているのは、何かに驚いてはいるようだけれど明るく温かい眼差し、感情だった。

「・・・なんのこと、言っただよ、言えよ・・・」

ぶつきらぼうになった低い声に気を悪くした様子もなく、陽気な声が笑顔でガレにそれを教えていた。

「耳！」

自分の金色の髪の上に両手を運んで、真似するように五指を立ててみせる。

「黒い耳！すごい！！」

無邪気な声だったが言われて、はっと気が付いたガレは、次の瞬間弾かれるようにその場から飛び退いていた。

距離を空けて、額をぶつけて涙目の不機嫌さは一瞬で威嚇するように鋭いものに変わっていた。

頬を緊張させている。そして、めくり上がったガレの唇の下に長めの牙のように尖った歯が覗いていた。

背を丸めて、ぎっと睨み付ける。

まるで、ほんとうに怒った猫みたいと思わせたガレの様子だった

が、猫が苦手でないとも見える相手は、のほほんとした笑顔を崩さなかった。

「はじめまして、“猫”さん。僕の名前はカリス。ねえ、猫さんの名前は？」

瞬きもせずに激しく睨め付けるだけの相手に、カリスもようやく気が付いたようだ。

「あれ。・・・機嫌が悪いの？・・・ぶつかったから？・・・でもそれはきみが走ってきたからだし、・・・避けられなかった僕もそりゃあ、悪いだろうけど・・・」

じゃあ、謝るから。と神妙な顔になった。

「ごめんね、痛かった？大丈夫・・・じゃないみたい、おでこ、赤くなっちゃってるね・・・」

カリスが服に付いた砂をばたばたと払いながら立ち上がっていた。ガレは一步退いた。

そこはもう建物の壁で背中に硬く当たっていた。

走り去ればいいのだとわかっていたけれど、驚きすぎて足は動かなくなっていた。

マントのフードがぶつかった衝撃に脱げてしまったのだ。

被っていたものが背中に落ちてしまつて、見えないように隠していたものがあらわになった。

“僕はカリス”と名乗った少年が見つめていたのは、二つの大きな耳だった。

ガレの黒い頭に生える猫のような黒い耳。

「・・・“猫”さん？」

一言もしゃべらない相手にカリスも不安になってきて、小さく尋ねるような声になった。

「・・・“猫”、“猫”呼ぶな。・・・“猫”じゃねえよ。俺の名前は、ガレ、だ」

「わかった、ガレ。じゃあ、ガレって呼ぶよ。僕はカリスだよ！よろしくね！..」

強ばった表情のままのガレに、ふふつとカリスは笑っていた。

カリスはガレに手を伸ばしたら、ガレの手はさつとカリスの前から後ろに隠されてしまった。

「あ、握手、嫌いなのか？そう、わかった」

一人頷いた後、カリスは再びガレを見つめた。

「ところで、急いでいたみたいだけどどうかしたの？約束の用事とかあるなら急がないと・・・。旅行者みたいだね、この街、きっときみより僕は詳しいから案内してあげるよ」

また笑顔だった。

さあ行こうよ、と促されてどこかに連れて行かれそうになるのでガレは慌てて答えていた。

「・・・別に約束なんかねえよ・・・」

「あ、そうなんだ。よかった、暇なんだね、じゃあ僕と話そうよ！」あまり自然に屈託なく言われたガレは断る言葉が浮かばなかった。ただ呆然となって、ガレはカリスの楽しい表情を見つめて立ちつくしていたのだ。

「ガレ、どうかしたの？」

すると、不思議そうに首を傾げられてしまい、ガレは大きくゆっくりと息を吸いこんだ。

そして、ふううとゆっくり、全部を吐き出していた。

「なんでもねえよ」

普段の声が出せてガレは心の中で安堵していた。

もつとも声の最初は、少し震えてしまったけれど。

「ねえ、ガレ。しっぱ」

その後の、カリスの第一声はそれだった。

「しっぱもあるの？」

いいや、ととっさに言えなかったガレに、肯定と判断したカリスが、うふつと嬉しそうに微笑んで、思いを率直に口にした。

「見たいな。見たいなあ、もし嫌じゃなかったら見せて欲しいなあ。耳は黒いからしっぽも黒いのかな？黒いしっぽ、僕、見せて欲しいなあ」

ガレはむっつりと、さらに不機嫌になっていたけれどカリスは鈍感かのか、気にしないのだ。明るいうつらと立てるようにもう一度言って、大きな目を期待に輝かせて、ガレの返事を持っている。見せてと言われたしっぽ。

あたりには他に人の気配のない静かな路地だった。

もう見られてしまったので、慌ててフードを被り直すのも格好悪いと耳はそのままにしていた。

ガレの黒い髪の間からすると生えた猫のような黒い三角形の耳は、遠くに聞こえる物音に反応してぴくぴくつと動いている。

そんなガレの耳を面白そうにちらちらと気にしながら、カリスの灰青色の瞳はガレの琥珀色の目の奥を、そこにガレの気持ちが隠れているとばかりに覗き込む。

「しっぽ、駄目？嫌？」

手を伸ばせば相手にさわれるぐらいの距離だった。

だけど二人とも、相手を乱暴に突き飛ばすこともしないで静かに向かい合っていた。

カリスに軽く首を傾げてねだるように聞かれてガレは考えていた。嫌なのかと訊かれてあらためて考えてみると、すると別に嫌ではないと思ってしまった。

ガレのしっぽや耳は、嫌とか好きとかの話ではなく、見せてはいけないことのはずだった。だけど失敗を犯してしまったガレは、耳をすっかりと見られてしまった。

その上で、さらにしっぽは嫌なのかと聞かれているのも変なものだった。

ニンゲンに見られて、見つかったら珍しい生き物と捕まえられることになるかもしれないというガレの耳としっぽだ。

ニンゲンではない生き物・“獣人”の証であり、特徴だった。

しばらくガレと一緒に行動していた仲間たちは、それがニンゲンにバレて追われて逃げているうちに離ればなれになってしまい、今、ガレは一人になっていた。

獣人だと気が付けば追いかけてくるニンゲンのなかでも、特に危険なのはハンターという職種の者たちだった。

彼らは仕事として、ガレのようなニンゲン以外の種族を追う。追って捕まえて、売るのだ。

珍しい生き物は見せ物小屋の“看板”になったり、もっと裕福なニンゲンは個人で大金を払って所有し、家畜や愛玩動物のようにされるのだとガレは聞かされて育ってきた。

うまく逃げているから、ガレは今までそんな風に捕まって売られたことはなく知識に過ぎなかったけれど、武器を持った人相の悪い男達の集団に追いかけて必死に森を走ったことは何度も経験があったのだ。

ニンゲンと、ガレのような獣人は世界の創造の神話ではともに生まれた兄弟であり、仲の良い友であるのに、現実には全く違っていた。

歴史のなか仲が良く隣人として暮らしたという時期はあったけれど、長くは続かずその一時期以外は追うものと追われるもの、そして決まって追われるのは獣人の方だった。

ニンゲンのような外見のうえに獣のような、耳やしっぽがあると
いう獣人は、“猫”型、“犬”型、“蜥蜴”型と数種存在していた
けれどどの種族もただのニンゲンよりも腕力が優れていたり丈夫な
身体をしていて、とつくみあいの喧嘩をしたなら決して負けないは
ずだった。けれど、そうとはならないのだ。獣人は負けてしまう。

追われるのだ。圧倒的に数で負けてしまうから。

世界の主人公とでもいうように、増えて大きなグループを作り、
街や国を築いたニンゲンのなかで獣人の数はあまりに少ないためだ
った。

今や獣人は、数も少なく珍しい貴重な生き物になりつつある。

猫や犬よりも、頭脳が発達している。会話もできる。

数が少ない、このままではしばらくの間でいなくなってしまうかと、心配するニンゲンもいるけれど、彼らも獣人を見つけると保護という名目に捉えようとするなら一緒だった。

ガレは追われるのだ。

追われるからニンゲンを恐れて、捕まったりしないように警戒しながら強く生きてゆくしかないのだろう。

まずは、ニンゲンの振りをして。

耳やしっぽを見られないように、見られたらおしまいだから。

解決策としては、あとはもう噛みついてでもニンゲンを振り切つて逃げるしかないーーと思っていたところだったのに。

ガレはちらりとカリスを盗み見た。

カリスの態度はいろいろと想像していたものとも、経験してきた今までともどちらとも違うのだ。

襲いかからない。

嫌なにやにや笑いもないし、うわつと嫌そうな悲鳴もあげなかった。

興味を持つてガレに触ろうと手を伸ばしてきたけれど、それは握手をしようとしたと説明していた。ガレが拒否したあとは立っているだけで再び手を伸ばすことはない。ガレを捕まえようとも、また違う生き物で危ないと追い立てることもしないのだ。

ただ、信じられないような明るい笑顔で「ねえ、ガレ。しっぽ、しっぽ。見せて？」と繰り返している。

だから、ガレは少し困ってしまうのだ。

カリス。

とても変な奴だとガレは思った。

カリスはきれいな格好をしていた。

ニンゲンのなかでは裕福な貴族というランクなのだとガレははしやぐカリスを冷静に眺めて判断していた。

光沢のある青色の上着に、艶やかなブーツ。

胸のところには水色の大きなブローチが留めてあつて目立っていた。

大きな石のブローチはとても高価そうだと宝石に知識のないガレでも感じるものだった。

だから、もしかして。

こいつはもしかして馬鹿かもしれないと思い当たったのだ。

獣人じゃなくて、同じニンゲンであっても、外で子供が良いものをひけらかしているのは危険なことだろうに、そんな簡単なことも気が付かないのかお金持ちそうな格好で一人街を歩き回っている様子のカリス。

女みたいな可愛さの綺麗な優しい顔で、裕福で恵まれた育ちだけど中味はどうやら馬鹿なのだ。

なら、と考えたガレは、それほどカリスを警戒しなくてもいいのかもしれないというものに行き着いたのだ。

そう、こいつはきつと馬鹿なのだ。

だったら真剣になつてそんな奴から逃げ回っているのも、馬鹿みたいではないだろうか！

「しつぽ、しつぽ！」

ガレが答えないでいる、しつぽが見たいというカリスの訴えは飽きることなく続いている。

「・・・ああ、別にいいけどさ・・・」

ガレは渋々に言う、弾けるようにカリスだった。

「やったあ、ありがとう！」

よくわからないけれど、お礼を言われてガレは少し威張るようないい気分になつて鼻の頭を指で擦っていた。

「しつぽ、しつぽ！・・・そうだ、マント持とうか？」

すかさず入った申し出だったが、ガレは頷かなかった。

「・・・別にマント脱がなくなつて見えるじゃん」

「・・・そうだけど・・・マントない方がよく見えるかなあと思つてさ・・・」

ガレに却下されて少しがっかりとしたようだったが、カリスはめげなかった。すぐに立ち直って笑顔になった。

もつと持ち上げてよ、暗くて見えないよ、と細かく注文されてガレはむつとなりつつマントを胸のあたりまでたくし上げていた。

深い緑で、だけど少し草臥れた感じになっていてフード付きの外套、マントを請われて捲ってあらわれたガレの衣服は上も下も動きやすい簡素なデザインの黒だった。その腰のあたりを別の深い光沢の良い黒が紐ベルトのように巻かれてある。

まるでベルトそのものに見えたが、カリスはちゃんとそれがわかっていた。

艶のいい紐の丸い先っぽがときどき生き物のように動いている。その通り。それは生き物で、ガレの身体の一部のしっぽなのだ。

「へえ。そういうふうには普段は胴にくるって巻いてるの？」

「・・・下に降ろしていたら先っぽとか、見られるかもしれないじゃん」

膝あたりぐらいの丈のマントの下からしっぽが見えてしまったら危険だと不機嫌に説明したガレに、そうか、とすぐにカリスは屈託なく納得した。

「触ってもいい？」

「・・・はあ？」

ガレは隠すようにマントを持っていた指を開いて幕が下ろされ、遠慮のない要求にガレの声は素直にすこぶる尖っていたが、カリスはもつと素直になって尋ねていた。

「あ、やつぱり、嫌？引っぱったりしないよ、そつと触るだけだよ。ただ黒い毛皮がね、つやつやでとても気持ちよそうそうだなあと思っただから・・・耳でもいいけど、耳だともつと嫌かなっと思っ」

そこまで言っただと

「・・・でもやつぱり、こういうの駄目だよね・・・」

ずつと陽気だったカリスは雰囲気を変えて、急に沈んだ声になった。

「・・・僕になんか触られるの、きみも嫌だよねえ・・・」

「はあ？なんだよそれ。そんなこと誰も言っただよ。うかおまえにという前に、嫌だよ、そんな、触られるの。おまえだって、知らない奴に身体触られるの嫌だろが！」

「・・・うん。・・・たしかに、そうかもしれないけど・・・」

剥きになつて声を荒げたガレに言われてカリスも何かを感じ入つたようだった。

けれどそれで大人しく納得するかと思いきや、カリスはそうはならなかった。しばらく考えた末にさらにこう口を開いたのだ。

「友達だったら平気だよ。触ってもいいよ、僕なら」

ねえ、とガレに訊いていた。

「きみは？」

再び雲の切れ間から差し込んだ太陽の光のようににわかに明るい表情になつたカリスに、ガレはたじたとなっていた。

古くて薄汚れた路地の木箱は慣れていても、こんな風にころころと風に吹かれる木の葉のように表情を変えるものにあまり関わったことはなかったのだ。しかも相手は危険なニンゲンだというのに。

きみは、どうなのと、人懐っこい笑顔で聞かれてガレには、なんだかよくわからなくなっていた。

いや、少し想像したけれど勝手な思いつきを信じることはしてはならないことだった。あとでがっかりして動けなくなってしまうことになると思目だから、自分にはわからないことだと決めたのに。

親切なカリスは丁寧言葉に言葉を足してガレに聞き直した。

「きみも友達だったら平気だよね？」

疑問ではなく確認で、ガレの返事は困った末に怒つたような声になつて

「・・・おまえ、友達でもなんでもないじゃん！」

「そうだよねえ、さつき会ったばかりだものねえ・・・」

しみりと言ったあとで、うふふつと笑ったのだ。

「じゃあ、もつと時間が経って友達になつたらしつぽ触らせてね！」

絶対、こいつは馬鹿だとガレは思った。

友達になどなれると思ってているのだろうか？

と、訊いてやったのだ。ガレは腹が立ったから。そうしたら

「どうして、なれないの？・・・きみは僕のことをやっぱり、嫌いな・・・？」

酷く悲しげになって言った。

「そ、そんなことじゃなくて」

嫌いとかではないはずだった。

しっぽが自分には生えていて、おまえには生えていなからというもつと重要なことが問題なのに、ガレが出会ったカリスは馬鹿だから手に負えなかった。

苦手だと思った。

わけがわからない。どうやって考えていたらいいのかわからないのだ。

答えられずにいるとカリスはとても強い声音でガレに聞いたのだ。

「好き？嫌い、どっち？」

「・・・別に、嫌いじゃない・・・」

考える余裕はなく圧されるようにガレは口に出していた。

大きな瞳にひたつと見据えられてかなり切実に聞かれている気がしたから。

痛いほどの真剣な表情になったカリスの目は、突然別人に入れ替わったように強くて、だけどとても寂しい色にガレには見えてしまったから。

嫌いだ、と言い切る理由だってまだ出会ったばかりでありはしないのだから。

するとカリスは。

やはりそうだった。ふと過ぎった嫌なガレの想像通り。

「良かったあ！じゃ、そのうち友達になったら約束ね、しっぽ触らせてね！」

黒いつやつやしっぽ、約束、約束！！と歌うように続いて、ガレ

を無頓着な笑顔で追いつめるのだ。

「・・・そのうちな・・・友達になつたらなっ」

歳は同じぐらいだけど、女の子みたいな顔をして自分よりも背が低い相手なのに情けなく負けてしまっているような気になって腹立たしいガレの声は、とてもぶっきらぼうだった。

ガレは歩き出していた。

急いで向かわなくてはいけない約束はなかったけれど、じっとしている居たたまれない気分になってくるからだ。

落ち着かない。

向けられる期待に溢れる明るく大きなカリスの瞳。

話題が見つからなくて少し黙っているけれど、一番彼の言いたいことはガレにはもうわかつているのだ。『しつぽ、触らしてね』だ。友達になつたらと約束して、約束をちゃんと守るつもりなのだろう。

カリスは無理矢理触ろうとも、触らせてよとももう言わなかった。だけど、立ち去らない。

ガレの後を追って付いてくる。

とことことしばらく歩いて、角がやってきた。

曲がったガレは、走り出していた。

さっきとは違ってそれほど嫌な気持ちにはなっていなかったけれどカリスが気になって、普段ではいられない、巻いてしまおうと思つたのだ。

だれど相手はやはり、さっきとは違っていた。街のごろつきではなく、カリスという裕福そうなきれいな格好をした女の子みたいな顔立ちの奴であり、結果だつてさっきと同じとは簡単にはいかなかったのだ。

しばらく走り回ったけど、上手くカリスを置き去りにできなかった。立ち止まって大きく肩で息を吐くガレの少し後ろで、こちらは

もつと苦しそうにぜいぜいと呼吸して、カリスはしゃべることもままならないという様子だった。

今、もう一度走ったら。

ちらと考えたけれど、とても意地悪な気がしてガレはやめたのだ。自分よりも小さいカリスがこれだけ走って付いてきたことに驚いていたし、ただの変な奴だけではないのだと知った。根性があると評価してもいい。

ガレは少しカリスを見直していた。

「・・・おまえ、変な奴だな」

「・・・そう、かな・・・。僕にとつては、ガレの方が変だよ、なんでこんな走るのか・・・もう、疲れたよ・・・」

はあ、はあと荒い呼吸の間に、呆れたような文句混じりの言葉が紡がれた。そうしているうちに次第に呼吸も整っていったカリスは、最後には前屈みになっていた身体をぴんと伸ばして、にこつと汗ばんで髪を額の縁にへばりつかせている顔を綻ばせた。

「走るのが好きなガレでも、これだけ走ればもう十分だね。じゃあ今度はゆっくり歩こう！」

「・・・少しだけ、な。いいよ、おまえに付き合ってやる」

深緑色のフードを目深に被って、しっぽはきちつと腰に巻いているのだろ。昼の光のなかで少々暑苦しい旅人の格好のガレの横を軽装の、青色の品の良い上着の一見で街を行き交う人々のなかでも上流の部類の人間だと知れるカリスは、相手に意地になって走るのも疲れたのでゆったりと歩いていた。

少し進むうちに細い道は大きな通りにぶつかってなくなってしまった。

仕方なく多くのニンゲンや馬車が行き交う通りを歩んでいた。

ニンゲンがいっぱい場所は嫌いだったが、一緒に一人ガレと歩いているからなのだろうか。不思議なことにこのときはあまり怖いとは思わなくなっていた。

カリスを。

ガレはちらりと横目で見ていた。

カリスは前を見ていたが、視線に気が付いたようにガレを見て、にこりとまた笑う。

「なに？」

「別に・・・」

「あ、走りすぎて疲れたの？ならどつかで休んでもいいよ」

「ち、違うよっ」

それはおまえの方だろう、と気色ばんで言うと、カリスはけろりとして、僕は平気だよ、と言う。

「だけど、ガレが疲れたのなら一緒に休憩するよ。我慢しないでいいよ、言ってよ」

本気でガレを心配しているのか、やせ我慢なのか。でもとにかく自分より小さい女の子のような、しかも身体の作りが弱いニンゲンに案じられているなどガレは、やっぱり落ち着かなかった。

走ることよりも、こうしてカリスと一緒にいることが調子を狂わされてしまい遙かに疲れるとガレは思った。

だから、それがふううと大きな溜息になったのだ。

「おまえってさ、何、考えてんのよ」

黙々と並んで歩いていることに慣れ、また飽きてきたガレはしばらくしてカリスに低く尋ねていた。

「どういうこと？」

カリスはガレの言葉に不思議そうな顔をした。

「だから、言いたいこと」

「しっぽ触りたい！」

「・・・それじゃない、それはもう聞いたよ。友達になったらって決めたじゃん」

ガレの意見はなく、ただカリスが勝手にだったがそう決まった。「じゃあ、なに？」

カリスが、わからないと歩きながらガレを見て首を傾げた。

「だから・・・俺も見て耳としっぱが違っていて気持ち悪いとか、俺の方が力あるし、爪も尖っているだろ、怖いとか、思わねえのか？」

ちらりとカリスはガレの手元を見ていた。

ガレはカリスのために少しマントの間から指先を覗かせていた。耳としっぱほどではないけれど違いのある、猫のように爪が出たり引込んだりする“猫”型の獣人のガレの手だった。

「爪は格好いいけど、掌とか腕とか普通なんだね。しっぱや耳のように毛皮になっていない。面白いね。お腹とかは？」

ふさふさしているの、と聞かれたら答えは、違う、だったけれど、それはもうすでにガレが持つて行こうとしている方向とは話はすでに逸れていつてしまっている。

しかし、答えないでいると余計に変な方向に、たとえば、脱いで見せてよなどと言い出されそうなのでガレはしぶしぶ答えることにした。

「お腹も背中もおまえと一緒にだよ。毛は生えていないよ。耳としっぱだけだ。・・・なんでとか聞くなよ、俺だってそんなこと知らないんだ！」

「ふうん、そうなんだ」

新しい知識を仕入れることを喜びにする勤勉な学生のように頷いたカリスだったけれど、そういうしているなかで最初の大きな感動を思い出してしまったようだ。

「ねえねえ！やっぱりさ。すごいよね」

カリスの声はまた楽しげに弾みだしてゆく。

「僕、本当にね、きみみたいに歳の近い“猫”さんに会うのはじめてだったんだよね！」

華やいだカリスの声に、慣れないガレはうるさそうに顔を顰めている。

「ああ、ねえ。きみの兄弟とか、お父さんとかお母さんとかみんな

黒いしつぽ生えてるの？・・・すごなあ、みんなでしつぽ！！」

確信で、はつきりとカリスは変な奴なのだ。

ガレにはいまいち理解できない妙な感嘆がいつまでずっと続きそうで嫌になってガレはカリスを遮るように口を開いていた。

「何がすごいのか。・・・俺にはまったくわかんないけどね」

わざと冷たい声を出していた。

すごいと言われて悪い気分はしなかったけれど、何度も言われているとひねくれている性格のガレはへそが曲がるのだ。

「ああ、そうだよ、おまえの言うように家族、みんなしつぽ生えていたよ」

ありつたけの毒を言葉に塗り込める。

「だけどしつぽ生えていなくて俺たちのことすごいと思うおまえらみたいな奴にとっ捕まって、どっか連れて行かれちゃったよ」

このあたりからガレの八つ当たりだった。

忘れられない悲しい出来事、カリスが悪いわけではなかったけれど腹が立ってきて心に湧き起こった黒いモヤモヤを目の前の子供で弱そうなカリスにぶつけたのだ。

「今頃、すごいしつぽとか、言われながら首輪付けられたり家畜扱いされてんだろうな」

突き放すようにガレは冷たい笑みをフードの陰からカリスに送った。

すると、カリスはぴたつと立ち止まっていた。

「・・・ひどいよ・・・そんなこと、言うなんて・・・」

数歩進んで振り返ったガレの琥珀の目の前で、灰青の瞳がさらに大きく見開かれて、次いで悲しげに揺れた。

「・・・僕はさ、そんなこと、ちつともしたいと思わないよ・・・」

「お・・・い、なんだよ・・・」

ガレはびっくりしていた。

「事実言っただけじゃん。・・・泣、くなよっ、おまえ男だろ！」
事実だった。

今まで、ガレにはこんな風に失敗して正体がばれてしまったあとばかりきまって、必死になって逃げなくてはならなかったのだから。

「・・・おいって。おまえがそんなふう泣いたらさ、俺がなんかおまえのこと、俺の方がおまえ、苛めてるみたいじゃなかよ！」

「事実じゃないもの。そんな風に僕はしないよっ！」

大きな目に涙を滲ませて女の子のように泣き出してしまったカリスに、ガレはひどく焦って慌ててはならなかった。

「・・・じゃあ、言い直すよ！おまえは例外・・・かもしれなくて、おまえ以外の奴は、そういうことをするっ！」

「・・・うん。僕は例外だよ。それだったら、いい・・・」

カリスはガレの言葉を聞いて満足そうに鼻をすすり上げながら頷いた。

良かったと思ったが、その次の瞬間、ガレは自分が完璧カリスのペーすに巻き込まれてしまっているのだと気が付いて、うつつと呻きたい気分だった。

ガレの方も泣きなくなっただけだった。

けれど、こういう相手に動揺させられることは、動揺でもいろいろなものがあり、これは力一杯、物を蹴りつけたくなるような嫌なものではないと感じていた。

少し、面白いと思ったのだ。

カリスと一緒にいて、こういうのを楽しんでいるのだろうか。

湧きあがった一筋の甘さをガレはそつと噛みしめていた。

笑顔で、優しげな奴だと思っていたけど、感情の起伏が激しい。そしてつかみ所もなく、まるでカリスこそが猫みたいだとガレは思っていた。

ニンゲンだけど、猫。

きれいな毛並みで大人しげに見えても、機嫌が悪いと爪を向いて

バリツと赤い筋を刻んでくれる小さくても獣、猫だ。街の路地でも、家々の屋根ではリボン付きを見かける。街で暮らす生き物だった。もっと大きな二本足で歩く黒い“猫”のガレはというともう街での用事は済ませていた。

「食べ物を買いに市場にきたの？」

「違う。食べ物なら少し前に、捕まえたマダラ鳥で燻製、作ってる。パンも前の町で買ったものが残ってるし。・・・情報だよ」

「情報、なにの？」

興味津々と耳を傾けるカリスをちらりと見ながら、ガレは続けた。

「・・・仲間の。この街に立ち寄っている奴、いるかなあと思って・・・」

こんな内容をニンゲンのカリスに話してしまっていたのだろうかという不安があつて、悩み悩みだった。

「へえ、“猫”さんが集まってくる“猫”さん基地があるんだね！」

「そんなようなもん・・・」

「それってどこ？」

「はあ。なんでそんな秘密、おまえにしゃべらないといけないわけ」

「まあ、そうだけど。でもそこに行ったら、“猫”さんにいっぱい会えるんだなあと思ったから・・・」

叱られて静かになったカリスに、今度はガレは質問の番だった。

「おまえ、そういうの好きなのはわかったけどさ、変な奴だな。なんでそんな好きなんだよ、仲間でもないのに」

少し怪しんだのだ。

だけど、獣人の血の独特の匂いは薄まっているものでも大抵気が付くものだが、カリスには少しも臭わなかった。

ならカリスは、混じりけのないニンゲンなわけで、同族意識的な感情があるとは考えられない。

すると、やはりただの興味だろうか。

小鳥を見ると胸の奥が震えて切なくなり放っておけずに近づかず

にいられないガレのような気持ちかと思ってみると、水を差されたように楽しい気分が薄らいでいった。

カリスはお金持ちの生まれだった。

なら、ハンターに売られる獣人をほんと大金を払って購入するあたりの人種なのだ。

そういう目でガレを見ていて、自分も欲しいとでも考えているのだろうかという疑問が浮かんだ。

どんどん憂鬱になっていくガレの横でカリスも、しばらく黙って歩いてはいたけれど、少し明るさが陰った真面目な響きのする声だった。

「・・・仲間になれないかなあ・・・。僕はしっぱ生えていないから、無理かなあ・・・」

「なんだよ、それ」

驚きすぎてガレは呆れてしまう。

「おまえ、ニンゲンなのに獣人の仲間になりたいわけ？馬鹿じゃねえの」

ガレの方に目を戻して不思議そうに首を傾げられた。

「ニンゲンの方が生きやすいじゃん。なんでわざわざ、獣人の仲間になりたいなんて思うんだか！」

「駄目だから」

低い声で薄く笑いながらカリスは、はっきりと答えた。

「僕は駄目だから。嫌われてるから」

「・・・誰に、だよ・・・」

予想も付かない展開にただ、ガレは尋ねるだけだった。
するとカリスは紅い唇を尖らせて

「みんなに！」

「みんなって・・・」

「僕の家族」

漠然としたものから、一気にわかりやすい単位に絞られてガレは息を呑んだ。

「・・・家族に嫌われてるって・・・それ、おまえがなんか悪戯したんだろ」

「こんな話つまらないね、やめよう!」

つまらないから、おわり!

カリスはぱつと明るく宣言すると、その通りに話は終えられてしまったのだ。

ガレは気になってもっと詳しく聞こうとしたが、もう終わりの一辺倒にあしらわれてしまい、為す術がなかった。

「それより、しっぽの話をしようよ!」

「しっぽの話なんて俺はもっとつまらない」

というガレの言い分はすっぱりと無視されて、話題はまたガレのしっぽになってしまった。

「ねえ。しっぽ触らしてくれるって約束だけどね。友達ってどのくらいの時間が経ったらなれるのだと思う?」

「はあ。友達って時間であるもんかよ」

「違うけど。でも目安はあったほうがわかりやすいよ」

ガレにとって、カリスは滅茶苦茶な性格をしていると思っていたが、間違っではないのかも感じるのだ。

時間ではないけど、目に見えない友達というものになったかならないか、判断ができないような気がするからやはり、時間という目安はあってもいい。

「一日話をしていたら?じゃ、三日?もっとで一月ぐらいしたら友達?」

友達というのも、実はガレにはよくわからないものだったが、カリスの言っている友達とはわかりやすいだろう。なぜなら、友達になっただけしっぽを触らせる、ということであり、しっぽを触らせてもいいというガレの気持ちの頃合いが友達になったということになるのだから。

つまりカリスは、いつになったらしっぽを触らせてくれるのかと聞いているのだ。

カリスが言った一ヶ月なんていうのは気が遠くなるような時間だった。あり得なくて想像が付かないだろう。

一日だと、もうしばらくして夕方になるころには、触らせる触らせるとせつつかれそうだと思った。

だから。

「三日」

これも十分現実味のない時間のはずだった。

三日も自分がこのカリスと一緒にいるなどとは変な夢を見ているようなものだからだ。だからとても適当だった。

「三日ぐらいじゃないか？」

「そう。三日か。わかった」

神妙に頷いたカリスにガレは、少し不思議なものを感じたが深くは考えなかった。

またカリスもその内容について深く考えているなどとはまったく思わなかったから。

だけど、夕方。

ガレは知ることになる。

三日と言ったガレの言葉で、カリスは思い切ってしまったのかもしれないと。

自分の言葉のせいじゃないかと後悔することになるのだから。

賑やかな市の通りの脇に並んだ屋台を覗いて歩いていた。

いろいろな物がごちゃごちゃと一緒に売られている。

異国の物、珍しい食べ物をはじめ、変な汚い壺の破片のようなガレには価値がわからないもの、物でも生きている小動物が入っているのだらう籠もいくつも並んでがさがさ音を立てていた。

特に変で珍しい物として、ときどき獣人なども鎖で繋がれて目玉商品として並ぶこともあるので一口に面白い場所とはいい切れないけれど、ガレはこうした市場が好きだった。

ガレが罾を仕掛けたり矢を使ったりして得た肉の食べきれない余分を買い取ってくれ、尾羽や角や、薬草もお金にしてくれるのはくだけた空気のこういう場所だった。

街中で大きなお店を構える商売人では、いろいろと勿体ぶった言い方をし、なかにはガレの素性も探るような質問をしてくる。なかなかすんなり買ってくれないことが多いのだ。

フードが目深に被っているガレとカリスが二人、人混みに流されないようにお互いを気にしながら屋台や露店の品物を見て回っていたときだった。

地面に広げられた布の上に並べてある、緑色や赤色や、青色が混じっている石は宝石の原石だと知れたが、よく似た石なら今までに見つけたことがあるなあ、などと考えていたガレの袖がぎゅっと引っぱられた。

ニンゲンのカリスが今日は一緒にいるから、自分もニンゲンになっているような安心した気分になっていたガレがはっと緊張したが、他でもない。それはカリスの手だった。

「なんだよ」

「逃げよう」

「はあ？」

カリスの表情は強ばっていた。笑顔が消え硬い顔つきになって小声でガレに訴えていた。

「逃げなくちゃいけない、捕まっちゃうから」

「なんで」

耳もしっぱも隠しているのにと息を呑んだガレに、カリスは首を横に振っていた。

「違うよ、僕が」

誰に、と聞く暇はガレには与えられなかった。

カリスにかしつと手首を掴まれてぐいと引っぱられていた。

そのままカリスは走り出してしまふ。

ガレも引きずられるように一緒に走らなくてはならなかった。

「なんで、誰にだよっ」

「ほら、あの人たち」

そつと視線が送られた方向を走りながら振り返って見たガレには、人の波の間、まわりとは衣服の雰囲気が違う者が見え隠れした。

暗い色の服の男は確かに追いかけてきていると思った。

腰に細い剣を下げているような男だ。

着ているものは地味で、カリスほど地味で高級そうでなかったけれどデザインも雰囲気も共通して同じ世界に暮らしている者だと思つた。

カリスが言うとおり、カリスを追いかけてくるようだった。

カリスが言つたように、『嫌われている』から？

「おまえ、なんか悪いことしたのか？」

ガレに聞かれたカリスに一瞬の間が空いた。

「僕は、してないよ。何もしてない、してないけどきつと僕は丸ごと悪いんだ！」

叩きつけるような強い響きで、驚いたガレは

「そんなことっ」

ないだろうと言おうとしたのだが、遮られてしまった。

「だったら、ガレも悪いことしたのっ？」

怒つたような目がガレに向けられて、ずっと追われてきたガレは悪いことをしてそのせいで追いかけているのかと切り替えされたガレは答えられなかった。

答えない代わりに、引っぱられていた腕を一端放して、改めて握り直していた。

二人ともが走りやすいようにだ。

ガレの方がカリスより背が高かった。

走ることだって、爪先の狭いブーツを履いているようなカリスより慣れて得意だった。

ガレは走り出していた。本気だ。

逃げるために、自分より走る速度が遅いカリスを引っぱって敵か

ら逃げ切るために。

二人して逃げ延びるためだ！

走って走って、走ってばかりだと思った。

人の間をすり抜けて、太い道から細い道、目立たない道も選んで飛び込んで、行きとまってしまったので塀を乗り越えた。

身軽なガレが塀の上にまず飛び乗って、カリスを引きずり上げるのだ。

昼にも走っていたけど、夕方の今度は二人だった。

出会ったカリスと二人。

太陽が西に傾きかけて空が茜色に染まりはじめたころ、ようやく二人は立ち止まっていた。

汗ばんだ身体を夕方の涼しい風が冷やして行く。

太陽が沈んで、夜がやってくる。

一日が終わる時間だった。

そして、二人の逃亡劇も終わろうとしていた。

街のはずれに出てしまっていた。

大きな石造りの古びた門を潜ってしまえば、街の外だった。

ガレにとって街や国の門は幾度と無く潜って出て行く通過点に過ぎなかったが、カリスにはそうとは言えないことをわかっていた。

一緒に逃げてきたけれど、そのまま一緒に潜り出てしまうことはできないだろう。

空が寂しい夕暮れを迎える世界を精一杯華やかな色に包もうとしていた。

明日もいい天気になるな。

ガレは金色のなかに飛んで行く一羽の黒い鳥の影をぼんやりと目にしながら思った。

「家、どこだよ。家の前まで送っていつてやる」

「ガレ？」

「おまえの家。だいぶん来ちゃったから、一人で帰るの危ないだろっ、だから 送り届けてやるって言ってるの！」

喧嘩をしているような声になってしまい、ガレは腹立たしげに自分に向かつて舌打ちをしていた。

なぜ、こんなに苛立っているのか。

カリスとこれでお別れだとなって、寂しいなどという感傷に囚われているせいだと気づいてしまうと、余計にいろいろな気持ちが湧き起こってきてさらに気分が悪くなってくる。

そういうガレの気持ちなど、カリスは一切悟ることはないらしい。ただ不思議そうな顔をして自分を見つめてくるのだから。

やっぱり、鈍くて馬鹿なのだ。だから、さっさと別れてしまった方がいいのだ！

乱暴に結論付けたガレが、カリスをカリスの家の前まで運んでいてさっさと終わりにしようと離れていた手を再び掴もうとした。

しかし、カリスはさせなかった。

寸前に、びよこんと跳びはねるように動いてそのまま駆けだしてしまう。

ガレが思っていた方向と逆だった。

カリスの家があるだろう街の中央ではなく、門へ。街の外に向かつて。

ガレがまた一人になって潜るはずだった外へと続く門。

「・・・おいっ、おまえ・・・」

「せっかく走ったのに、なにしてるの、ぐずぐずしていると追いつかれちゃうよ？」

「でも、おまえ・・・家」

「捕まったら、家に連れ戻されちゃう。やっと逃げ出してきたのに」
「おまえ・・・家出なのか・・・？」

カリスの淡々とした態度に、ガレの方は呆然としていた。

「なんかやらかして、親に怒られて家出。・・・って、そうゆうやつなのかよっ！」

みんなに嫌われているなど大げさなことを言っていたがこういう単純なこと、真剣になって損したとガレは思ったのだ。

でも、すぐにあっさりと否定がされた。

「違うよ。怒られていない。怒らないよ、あの人達、誰も僕のこと怒らないんだ。ずっと嘘をついて僕のことをだましてきたのを知った僕は怒って、父上の書斎の人形を床に叩きつけて壊してしまったけれど、怒らなかった。もっといろいろ壊そうとしたら、自分の部屋に連れて行かれて鍵を掛けられたけど」

「・・・なんだよ、それ」

「毎日、いろいろな人が入れ替わりに僕のところに行って、つまらないことをしゃべってくるから、僕は窓からこっそり逃げてきたの」

そして。

「もう僕、あそこには戻らない」

カリスはつんと鼻をあげて、可愛い顔に意地を漲らせていた。
「はあ!？」

ガレの口癖の言葉だったが、これが今日一日のなかで一番大きな声になった。

ガレの驚きもまだ冷めないなかだ。

「僕もいつしよに行つていい?」

笑顔のカリスが言う。

「ガレに付いていてもいい?ガレは好きなところに行けばいい。僕は特にどこかに行きたいってことないから。ガレにくっついて行く」

何気ない明日の遊びの予定話のように軽い口調でカリスはガレに頼み込んでいたが、ガレはことに重大性を感じていてすぐには返事ができなかった。

「・・・駄目?」

「駄目っていうか、そんなのおかしいよ・・・」

「おかしくないよ」

「おかしい。黙って、おまえ、家を出てもう家族に会わないつもりかよ」

「・・・ほんととは向こうも、僕に会いたくないんだよ。だけど、いなくなっても捨てるわけにいかないでしょ？」

聞き分けの悪いガレを、年長者が諭すように小首が傾げながら。

「本や服は捨ててもいいけど、子供は駄目だからあの人は僕を置いておきな。捨てたら罪になるもの」

同じように邪魔になっても生き物だから同じにしてはならないのだから。

「両方が嫌なのに、仕方なくて一緒にいるってそっちのほうがおかしいでしょ。だから、僕が自分で家を出たの。でもね」

それまでもとても冷静だったのに、少し寂しそうな目になっていた。「ガレが、やっぱり僕は嫌だと言うなら無理にお願いとは言わないから大丈夫。そうしたら僕は、ガレみたいに一人旅するだけだからだつてもともと最初はそのつもりだったんだもの」

「本気なのか？」

「変なの。本気で走って逃げていたじゃない」

大きな門を背に立っていたカリスが、ふふつと笑った後、ガレをその場に残したままくるりと踵を返してしまう。

夜の気配が深まってきて、街の出入り口の人数はまばらになっていた。

不穏な侵入者から街を守るという役割の制服の男が門の飾りのように立っている。二人の子供にちらりと目を向けたがそれだけだった。

カリスは。

堅牢な石造りに四角く切り取られ空間のなかに踏みだして行った。「待てよっ」

ガレは慌てて後ろ姿を追いかけていた。

「待てったら！」

追いついて、どんどん走っていかうとする相手の腕を捕まえていた。

不思議そうにカリスはガレを振り向いていた。

もうそこは外だった。

地平に広がる草原、その間に古い石畳が続く道。

反対側の遠くの林の果てから、野犬の鳴く声が聞こえていた。

「暗くなるんだぞ！」

わかつているのかと、ガレは怒鳴りつけていた。

「街の外は真っ暗で、星の明かりしかなくなるんだぞ。走ってばかりいたら転ぶ。転んで怪我したって、ニンゲンのおまえじゃあ満足に見えないだろうが」

「ガレは見える？」

ああ、と頷いた。ニンゲンの機能より獣人のガレの方が発達しているのだから。

ガレは夜も昼も、いや夜の方がニンゲンがいなくて気分が楽で好きなくらいだった。

「じゃあ、僕の足下も見て、つまずきそうだったら教えてよ」

「でも、走り回られていたら言っても間に合わないだろ」

「うん、わかった」

どこかずれた会話を交わしたあと、しばらく二人は無言で歩いていた。

真っ暗になる前に、ガレはマントの下の鞆から小さなランプを取り出して火打ち石で火を灯していた。自分にはあまり必要のないものだったが、古道具屋で売れるかなと拾っていたものだったが、役に立っていた。

カリスに持たせて、黙々と歩いていた。

何を話していいのか、聞きたいことがあつたけど聞いてもいいのかわからなかったからだ。

カリスも黙っていたから、月が天边に上がる頃まで、道沿いにゆ

つくりと。

幸運なのか、不運なんかそれも謎だったが、二人は街へと急ぐ馬車や旅の家族とすれ違ったがガレとカリスの歩みを妨げようとするものは現れなかった。

ガレとカリスと、ソラの物語 2

さすがにガレも疲れて足が重くなってきた、道から少し逸れた空き地に焚き火を熾していた。

雑木林も近く、枯れ枝もすぐに集まってすぐに赤々と炎は揺れはじめた。

暖かい炎を挟んで、ガレとカリスは向かい合って座っていた。

旅人がよく野宿に使う場所らしく、燃された焚き火の跡や、座りやすい椅子として用意されたのだろう太い丸太も転がっていてすぐに落ち着くことができたのだ。

夏を迎えようとしている季節は野宿も辛くはなくなっていた。

満天の星空が屋根のように広がっている木々の枝の合間から二人の少年を見下ろしていた。

誰もいない夜のなか、ガレは街のなかではかぶり続けていたフードを背中に落としていた。

黒い猫のような耳が二つ。ガレの黒い髪の間から生えてときどきぴくりぴくりと本物の猫のように動かされていた。

耳を見つめていたあと、カリスの視線は下に降りてきた。

地面の上だった。

たぐなったマントの間から、期待通りのものが顔を出してゆるりゆるりと動いている。黒色のガレのしっぽだった。

じつとカリスが見ているとしっぽはさつと布の下に引っ込んで消えてしまった。

ガレが自分の視線を感じて隠してしまったのだとカリスもすぐに気が付いて未練っぽい声で言った。

「しっぽ・・・」

「食べるか？」

ガレは鞆の中から燻製肉を取りだして、半分をカリスに差し出していた。

「ありがとう」

受け取ったカリスは今まで食べたことのないような焦げ色の固まりを、躊躇いなくすぐに口に運んで嚙っていた。

お腹など空いていないと思っていたけれど一口嚙むと、急に空腹感に襲われて硬い肉を思い切り頬張っていた。

「おまえさ・・・家出はいいけどさ。食べ物も何も持っていないだろ。馬鹿じゃねえか？」

お皿もフォークもないガレの食事を、きれいな格好のカリスが食べるかどうか半信半疑だったガレが、結果に一つ息を吐いて、自分も口のなかに入れた。

「俺が食い物持っていなかったらどうしたんだよ。食うもんなくて腹減りじゃん」

「ガレに会わなかったら、買い物に行っていたよ。だけど、ガレに会ってすっかり忘れちゃったよ」

咀嚼の間から灰青色の瞳が、さらっとただの事実のように言い訳をしていた。

「驚いて、忘れちゃっていた・・・街を出てから思い出した」

それからごそごそと上着のポケットに手をつ突っ込んで、はいとガレに伸ばされた。

「これ売ってね、買い物しようと思っていたのだけど買わずにすんじゃない。ガレに食べ物貰う代わりにガレにあげる」

掌に載せられたものはぴかぴかのコインかと思っただ、もっと高そうなものだった。

「指輪！うわ、でかい石！！」

「あげる。だからまた明日も、僕にも食べ物ちょうだいね」

「おまえ、これさ、すげえ高いんじゃない？これを盗んだから追いかけられたんじゃないの？」

「違うよ」

疑わしそくに言うと、窃盗には無実のカリスが少し嫌そうな顔になっていた。

脳天気になにこしている奴でも、こういうことには潔癖なのだと知った。

「これはずつと僕が持っていたものだもん。僕のものだもの」

「大きさ合わないじゃん。嘘言うなよ、指にぶかぶかだろ、こんなん」

「お母さんのなの。お母さんもお母さんに貰ったものなの。それを僕が貰ったの！」

「それを俺に渡しちゃっていいのかよ？」

「いいの。僕はそれ好きじゃないから」

「でもそれこそ、そういうのおまえが誰かにやっちゃったらお母ちゃんに怒られるぞ」

すると、しばらく黙り込んでから「怒らないよ」と小さく言った。「だっていないもの」

「おまえの母ちゃん、死んだのか？」

「こんな話、つまらない！つまらない！！それよりか、明日の話をしようよ」

癪癪を起こしたように鋭く言ったあと、ころつと雰囲気を変えられてしまつて、またになにここと笑うカリスに変わっていた。

「ガレはどこに向かつて歩いていくの？」

苦手だなあと、ガレは感じていた。

そうして笑顔向けられしまうと、それ以上に聞けなくなつてしまふのだから。

そして、その女の子のような優しい笑顔が少し怖いのだと思つた。よくわからないけれど、カリスは最初の予想とは違って馬鹿じゃないのかもしれないとガレは思つたのだ。

「別に行く当てなんて、無いけどさ・・・」

「ないけど、どこへ？」

どこと、繰り返して聞かれてガレは口を割っていた。

「・・・“樂園”」

「樂園？」

「“楽園”。・・・俺たちの世界。ニンゲンがいなくて、俺たち獣人が楽しく安心して暮らしてゆけるという秘密の場所・・・」

「西の園・・・獣人が生まれた神話の“揺りかご”？」

世界の東の園では人間が生まれたのだ。弱い人間のために新たに作られた揺りかごと、西の古い大きな揺りかごを比べたときどちらが快適かという議論が、ニンゲンと獣人の最初の仲違いの原因と物語はいう。

でも神話の場所が、世界に本当に存在するなどと思ってはいなかったのでカリスが驚きを隠せなかった。

「知らなかった。あるんだ、本当に！そこをガレは目指して旅をしているんだね」

「あるかどうか、知らないよ。・・・だけど、安心して俺たちが暮らせるのはニンゲンがいなくってそこだけなんだよ」

憂鬱な心地になってガレは説明を付け加えていた。

そんないい旅をしているなんて誤解されているのは、酷く虚しいと思ったからだ。だったらただ彷徨っているのだと同情の方がまだマシだという気がした。

しかして、カリスは。

そつと、「そうなのか」と言っただけだった。

ぱちぱちと焚き火の炎が楽しげに踊っている。

「じゃあ。そこに着いちゃったとき、僕は入れないんだね・・・」

「はあ？」

「だって、そこは獣人の揺りかごだから、僕はそこまでガレと一緒にくつついていちゃけないんだよね・・・」

聞いているとこれは現実的な話なのか非現実なのか、ガレには判断が付かなかった。

カリスは、馬鹿なのか頭がいいのか、とぼけているのか本気で言っているのかガレにはとても難しかった。

「あ。じゃあ、僕は揺りかごの少し外に暮らすよ。で、僕には入れないからガレが出て、ときどき僕に会いに来る。それでいいね！」

にっこりとカリスはガレに微笑みかけていた。

「・・・そうだな。それだと、問題はないよな・・・」

現実にはそんな夢のような場所が存在するのか、存在するとして無事に自分に行き着けるかがそれ以前の大きな問題として横たわっているわけだけだ。

カリスによると、それは問題ではないらしい。その後のことで、でもその解決策も無事、カリスは自分で見つけたようだ。

行き着いてしまうまで自分たちは一緒にいて、カリスが入れない場所に着いた後は、入り口あたりにカリスは留まっときどきに会う、ということになるという。

「信じられない話だ・・・」

「・・・なにが？」

自分たちがこのさきそんな風に、一緒にいるという話だ。

「・・・大丈夫。信じていいよ、駄目だつて言われたら僕、ちゃんと守る、・・・ガレ達の樂園には入らないから」

カリスがこんなだから、ガレには言葉もない。

目を見張るガレのまえで、ゆらゆらとカリスの身体は今にも倒れて行きそうに揺れだしていた。

「寝るんだつたら、草の上で寝ころんで寝ろよ。・・・こけたら怪我するぞ」

「・・・うんわかった・・・」

目も半分閉じられたままで、もぞもぞと伝って這うようにお尻をのせていた丸太から降りると、ごろりと力尽きて倒れるように横になっっていた。

すぐに規則正しい寝息が聞こえた。

ガレでも今日は走ってばかりの日だと思っただけだから。

平気そうな顔をしていたけど、カリスはとても疲れていたのだろ
う。

話はまだ途中だったけど、中途半端に終わられてしまっていた。
でも一つだけは言えることがあるかもしれない。

明日の朝、自分はこのカリスと一緒にいるということ。

ガレの意志や同じ子供でしかないカリスの思いなど、もつと強いものと向かい合ったときどう吹き飛ばされるかわからないけれど、少なくともカリスはガレというつもりでいるのだ。

一瞬迷ったけれど、ガレはマントを脱いでいた。

隠れていたしっぽに夜風が当たって涼しくなった。

あたりには大きな生き物の気配はなかった。しっぽを狙っている一番身近なニンゲンも眠ってしまったているのだから、平気だろう。そして脱いだマントをガレはカリスの身体の上に広げてやった。

ガレはほとんど眠れずに朝を迎えていた。

マントを脱いでいたので寒かったのかもしれない。

朝日が上がって辺りが明るくなって、取り戻したマントを身につけたガレは眠りこけているカリスに声をかけていた。

「・・・おい。もう太陽は昇ってるぞ・・・」

んんっ・・・と寝ぼけた後で、ぱちつと長い睫が開いて、フードもすっぽり被っているガレを認めて驚いた顔になった。

「おはよ、ひどいよ、置いてかないでよっ!」

「・・・だからこうして置いてってないじゃん」

飛び起きて髪を掌で撫でつけているカリスに、向こうに小川が流れて顔が洗えるとガレは教えていた。

カリスの準備が整うと、今度は干した甘い果物を囓りながら歩き始めていた。

行く先は、昨晚カリスに話したとおり西の揺りかごだった。

どこにあるか、知らないけれど、西だろう。

西に向かうのだ。

とにかく向かう。

ぐずぐずしていると追っ手がやってきてしまう気がしたからだ。オリドの街から。

カリスが出てきた街からの追ってが追いかけてくる。

追いかけて、取り戻していつてしまいかもしれないと思った。

そうして無理矢理ガレから持って行ってしまうと、また自分は一
人になってしまう。

渡さないと、ガレは思った。

何を。

カリスをだ。

・・・どうして？

浮かんだ自問にすぐに自答も浮かんでいた。

ああ、それはカリスがいれば、隠れ蓑になるから。

もしもの時に一緒にいたらカリスの陰に隠れることができるから。
カリスを盾にできる。そういうことなのだ。

お金持ちそうで、女みtainな顔をしていて、みんな二人がいたら
ガレではなくカリス方に注目するだろうから。

カリスはいろいろ役に立ちそうだから！

夜の間一人考えていて、ガレの中に生まれた疑問は朝にはすっか
りと解決できていた。

あとは、カリスを急かしてさっさと歩いて行くだけだった。

「行くぞ」

「うん。今日も晴れていて良かったね。雨降ってたら濡れちゃうん
だものね」

ガレの打算をわかってているのか、なにもわかっていないのか。も
しかしてわかったうえでどうでもいいと無視なのか。

カリスは朝日のように明るかった。

「西に行くんだね。このまままっすぐに歩いていると明後日にはフ
アームルの街につくかなあ」

「ファームルには行かない。その手前で逸れてアシの村を通り抜け
て行くつもり」

「南寄りになっちゃうよ」

「アシから山道を通って一気にサザントーイに入ろうと思っている

んだ。そっちの方が人の通りが少ないだろうし、いざとなったら山に逃げ込むことができるし」

サザントーイとはファームルの果てに広がる大きな街だった。

「山の中つて走りにくくつて大変じゃない？」

「だからいいんじゃないか」

「・・・そっか」

頷いたカリスは納得したようだった。

二人は歩き出していった。

穏やかに晴れた眩しい光の中で、すっぽりと頭から深緑のフードを被っているガレと、田舎道には浮いているきれいな青色の上着と爪先の細いブーツに宝石のブローチといったカリスが並んで進んで行く。

野良仕事に向かう農夫の馬車や旅馬車が二人とすれ違って行き、三台目以降の馬車がやって来たときには、カリスが首を傾げているうちに気が付くガレの指示で街道脇の木立や藪の陰に隠れてやり過ぎようになった。

「用心はしすぎることはないし」

「うん、そうだね。休憩にもなるし僕は賛成だよ」

緊張した面持ちのガレに、カリスは笑って応じていた。

耳を澄まして、馬車や人の気配に警戒していた。

一人でいるときより遙かに気を配りながらガレは歩んでいた。

ガレ一人の運命じゃない。カリスと二人分の責任がガレの肩にずしりと乗っかっていた。

カリスを守らなくちゃいけない。

ガレにそんな理由などないのに生まれたときから決められていたことのような気分になっていた。

自分は絶対カリスを守りきつていかないと駄目なのだ。

あとはもう無い。

二度とこんなチャンスは巡ってこないかもしれないのだから。
「ふう、ちよつと疲れたかも」

次第に立ち止まる事が頻繁になってきているカリスの暢気さに苛立ちながらガレは必死になってカリスをなだめて急かして歩かせていた。

「お腹が空いた、お腹がぺこぺこ。もう今日は無理、食べないと動けない！」

ガレの予定としてはもう少し先まで進んでから野宿にするつもりだったけれど、太陽が傾きだしたところには、すっかりカリスは座り込んでしまつて駄々っ子のように空腹を訴えるのでガレは仕方なく折れたのだ。

道から焚き火の明かりが見えない窪地を選んで枯れ枝を集めて早めの準備をしているなかで、ガレの気持ちを知らないカリスは半分食べた乾し肉を握りしめたまま眠り込んでいた。

本当はカリスの家出のことなどもっと詳しく知りたかったのだけれど、カリスは目も覚まさず朝まで眠り続けていた。

翌朝は日の出頃には大きな雨粒が、一つも星が輝かなかった空から落ちはじめた。

眠っているカリスを起こすと引きずるように近くの木の根本に移動していた。

寝起きの悪いカリスが足下にぺたんと腰を下ろして目を閉じた頃にはすっかり世界は灰色で本降りの兆しだった。

他に方法はなく空を睨んで雨が止むのを待っているガレの横で、たっぷり眠ったあと、むくりと頭をもたげたカリスだった。

「ぜんぜん起きないから死んじゃったのかもって思った」

ずっと眠っていたカリスに面白くないガレが嫌みっぽく言うと思わぬ反撃がやってきた。

「違うよ！変なこと言わないでよっ。いびきかいていたでしょ！！」唇を尖らせて、叫いてほんとに女みたいな奴と思わせるカリスに、「いびきはいいていなかったよ・・・」

激しく眉を吊り上げられる前で、ガレは剣幕に圧されるように否定しなくてはならなかった。

「おまえってよくわかんねえ・・・」

「ガレが変なことを言うからだよ。死ぬとか、そういう言葉は気安く言ってはいけないんだよ。ほんとになっちゃうんだよ、知らないの？」

「言わなくなつて現実になるときはなるよ・・・」

一瞬考えて、ガレはそう言う。「それは、そうだけど・・・」と、不服そうに頬を膨らませた後、うん、と一つ頷いてからカリスはきっぱりと言った。

「僕はそういうの好きじゃないから言っちゃ駄目なの！」

じつと睨まれるからガレはたじたと逃げ腰だ。

「・・・わかったよ・・・言わないようにするよ」

「うん、ならいい、許してあげる！」

目を覚ましたカリスと、どしゃ降りの雨の音を聞きながらの会話はこれだった。

ガレはやっぱり、自分はいろいろカリスに負けているような気分になって、ちよつと癪にさわった。でも正面からぴたと見られて言われると強く出られない。でもそれもそれほど悪くないのかもとも感じてしまっているけれど。

気を取り直して朝ご飯を二人で嚙っていた。鞆から取り出した乾燥した食べ物だった。

雨は降り続いたので動くことはできずに二人は木の根本で雨を避け肩を寄せ合うように座って時間を過ごしていた。

カリスはすぐに再びうつらうつらと眠りだして、しばらくするとこつん、と不安定に揺れていた頭がガレの肩に当たっていた。

押し返すのも大人げないのかなと迷っているうちに、ずるずるとカリスの身体が傾いてきて、ガレはすっかりクッションがわりにになっていた。

ガレは少し考えて、まあいいか、と思った。

肌寒い天気だったのだが、カリスの身体がもたれかかっているところは温かったからだ。

昼近くになって、雨はいったん上がっていた。

またすぐ降り出すだろうという黒い雲が空を占めていたが、雨は一応やんだので少しでも移動しようとガレは考えた。

二人になって食料の減りは二倍になっていたから、補充もしなくてはならなかった。そのためにはアシの村に早く着きたいと思っていたのだ。

よく眠った後で足取りも軽くなったカリスと、ぬかるんだ道を走っていったがまもなくして雨はまた降りはじめってしまった。

「うきやあ、冷たいっ」

青色の上着を脱いで頭から被ったカリスが薄い胴衣を通して背中を濡らされて甲高い悲鳴をあげた。

「冷たい、どうするのガレ！体温で乾くまでずっと走って行くの？」

雨の中を、乾くまで。

ふざけた顔もせずに、こいつはそういうことを言う奴だとガレもわかってきていた。

ただし、本当にまじめなのかどうかはまだわからない。

「どっちでもいいけど。おまえの好きなようにしていいよ」

走り続けるには雨は激しすぎるから、どこかで雨宿りを。時間はまだ早く晴れているなら太陽は西に傾くかけたばかりの時刻だったろうが、日が照らない今日は暗かった。そのまま静かに野宿に入ろうと考えていた。

「うわあ。靴の中も水浸しだよ。気持ち悪い、じゃぶじゃぶいっている！」

カリスは歓声のように明るく騒いでいたが、走る勢いがふと弱まって、立ち止まってしまった。

雑木林の奥に向かって腕が伸ばされていた。

「あそこは！？」

濡れて灰色に見える木々の間にぼんやりと明かりが見えた。

近づく和一軒の農家だった。

古くて小さな母屋の横に、同じようにみすばらしい納屋が立っていた。

入り口の扉は半開きになっていて、家畜はおらず藁や農具が暗がりに積まれていた。

「ここがいいよ」

母屋の中を窓からこっそりと覗いてみたガレは、小さなおばあさんが暖炉のまえの揺り椅子に座って編み物をしている様子を確認していた。

閑散とした部屋の物の無さにも、老婆の一人暮らしなのだと判断がされた。

「ああ、ここで宿を借りることにしよう」

無断だったが、家主にとって、今夜取り立てて用のない場所を少し眠るために借り受けるだけで悪さをするつもりはないのだから。

だから、わざわざ断わりにゆかなくてもいいのだとカリスも納得した。

雨が降り続けている。

鍵が掛けられておらず元々扉も半開きだった納屋に忍び込むと濡れた服を脱いで、二人は積まれた藁の山のなかに潜り込んだ。

暗くなってきたのでランプに明かりを灯して、残っていた乾し果物と肉の薫製を半分ずつ、藁から頭だけを出して分け合って夕ご飯だった。

食べ終えてもひもじさが残っていたが、二人とも口に出さずに藁布団のなかでうとうととなっていたときだった。

ガレは、不覚だと飛び起きたが遅かった。

「あれまあ。なにか様子が変だなあと思ったら。狸の仔よりもずっと大きい子どもが二人もおるでないか！」

大きな明かりに照らされて眩しくて、ガレは慌てて腕を翳しただらう。

年を取った女主人が皺の奥に落ちくぼんだ小さな眼を、このとき

ばかりは大仰に見開いて戸口に立って二人を見ていた。

「ごめんなさい、おばあさん。僕たち、黙って納屋を借りていました」

脱いでいた肌着を慌てて身につけてある程度の身支度を整えたカリスが、丁寧に頭を下げて謝っていた。

ランプと反対の手にはパン生地を捏ねる棍棒を握ってやってきた老婆の前に立って、その一歩後ろにガレがいた。

上着までは着る時間がなかったカリスと違って、そちらはマントのフードまで目深に被っていた。

自分より背の小さいカリスの陰に隠れるように背を丸めて俯いて立つガレの緊張をカリスは感じ取っていたから、庇うようにもう一歩前に出た。

「ごめんなさい。でも明日の朝まで、雨がやむまで休ませてもらうとしただけで、物を盗んだり壊したりするつもりはなかったのです」

カリスにはよくはわからなかった。

カリス自身はもし自分の屋敷の庭に、ガレのようなしつぽの生えた者が迷い込んでいたら、大歓迎で嬉しいと思うのだ。

追い出したり、捕まえたり、大声を出すこともしないと思うけれど、ガレは怯えてしまっている。

この小さなおばあさんに。

気づいたとき、横のカリスの反応がぼんやりとあれほど悪くなかったら、納屋の奥の窓に飛びついて外に逃げ出してゆく勢いだったのだ。けれど状況をすぐには飲み込めなかったカリスがいたから、ガレも動けず立ちつくすことになってしまった。

「ごめんなさい、おばあさん。すぐに出て行くので許してください」

「なんでこんなところにおる。坊たちは家はどこだ、家出か？」

「え？」

「揃って家出してきたのか、兄弟なのか？」

「兄弟じゃないです・・・」

カリスは答えていた。

嘘をついてもすぐにばれてしまう。着ている物の雰囲気の違いすぎるだろうから。

「友達です・・・僕も友達と一緒にいこうと、家出しました・・・」

「・・・馬鹿たれだな。今ごろ親御たちは心配しとるに」

ももごとと歯数が少し減っている口元を動かして、低く怒ったような声で老婆はこぼしていた。

「こつち、来い」

カリスは驚いて、後ろのガレのマントの端っこを掴んでいた。だっと走り出してカリス一人、置いてゆかれないようにだった。

「後ろの大きい子もはよ、来い。濡れたままでこんなところにいるのは気持ち悪いだろう、向こうに暖炉もあるし、芋だけじゃがスープもある。食べるといい」

どうしたらいいのかわからないカリスが、ガレを窺っていた。

「ほらさつさとしろ」

「・・・はい」

カリスが二人分の返事をしていた。

ガレのマントの端を握りながら、カリスはガレと老婆の後ろに従って、母屋に入っていた。

捕まったわけではない。

よばよばの老婆で、少し強く突き飛ばせばやつつけることができる。

無視してカリスを引っぱって去ることだってできただろう。

だけど、そうしなかったのはカリスに出会っていたからかもしれない。

もしかして、また逃げなくてもいいのかもしれないと、ちらっとガレは考えてしまったから。

「ガレは頭に禿があつて、それを気にしてるの」

勝手にすごいことをカリスは言っているとガレは思ったが、口に出さずに与えられたスープを黙々と口に運んでいた。

「禿ができてから、性格暗くなっちゃってあまりしゃべらなくなつたけれど、本当はとても優しいから僕は好き」

笑顔で説明するカリスの話をすっかり信用したのか、老婆はふうんと頷いたあとちらつとガレに目を向けた。

「禿なんて気にすることないのに。死んだ爺さんも禿とつたが平気だつたぞ」

ニンゲンの老婆と目があつてガレはびくつと背筋を伸ばした。

「まあ、仕方ないか。子供だからな、思い悩んでもな……。でもくよくよすると余計に禿げると言うぞ？ 若いでそのうち生えてくるからあまり気にしんことだ」

うんうん、と必死に頷いて自分に向けられた話題をやり過ごそうとしているガレだ。

鞆から取り出した布でガレは耳の生えた頭をくるむように巻いて隠していた。

しつぽはお尻まで長い上着の下に入れて、マントは脱いでいた。

乾いた衣服を貸し与えられて、食卓に湯気が立つ温かいスープとパンを並べると鷹揚に、席に着けと命じた老婆の名はオールドだと聞かされ、二人もそれぞれ名前を名乗っていた。

「うふん、二人はガレ坊の故郷に向かつて旅をしているってことか。子供だけでか、あまり感心はしないがなあ……」

言えない本当を隠して適度の嘘が入り交じる説明は、勿論カリスが、すらすらと口にしたものだ。

まだまだ緊張に凝り固まっているガレは満足に言葉が見つからなかったが、横にいるカリスがガレの分もうまくオールドと話をしていた。

カリスにとっては三日ぶりの温かいご飯だった。

ガレにとつては、何日ぶりかなんて数えられなかった。仲間と生き別れになって一人になってからはじめてだった。屋台で狩った獲物を持ってお金を持ち合わせていても、街の食堂に一人入って食べようとは思わなかった。そんなふうに一人テーブルに座って運ばれて、どんと置かれていった料理をニンゲンのなかで一人きりで食べても味はきつとわからないだろうから。

だけど、今は少し状況は変わっているのだ。

ガレの横にはガレのしっぽを知っているカリスがいて、お金はあまり持っていないからと言ってもスープを出してくれたオードルだけのこぢんまりとした空間だった。

「うまいか、禿の坊。お代わりが欲しかったらまだあるぞ」

嘘なので、むごい呼ばれ方でもガレは腹は立たなかった。

「おいしいです。・・・でももうおなかいっぱいです」

「嘘つくな。まだ入る顔しとる」

はなっからガレの言葉など聞くつもりはなかったのだろうか。

さっさとお皿にお代わりが入れられてガレのまえに戻っていた。

惜しげもなくなみなみとした汁のなかに芋が少しだけ沈んでいるというスープだった。

「・・・ありがと、ございます」

ガレの様子を隣で見ていたカリスがうふつと嬉しそうに笑っていた。

「坊も食べるな？」

「はい、いただきます」

そして、オードルが後ろを向いている間に、そつとガレを肘に小突いていた。

「僕、芋だけのスープではじめて食べるけど、こんなに美味しいって知らなかったよ」

高級そうな格好をしているカリスだったから、芋だけのような質素な料理は食べたここがないのだろうなあと思ったものだが、美味

しいのは本当だった。

「ああ、とても美味しい」

食事のあとは、もう寝る時間だなど、オードルはベッドを用意して二人を押し込んでいた。

無理矢理で強行な態度だったから、しばらくしてガレはこっそり扉を開けて様子を窺ってみたが、鍵を掛けられて閉じこめられていることもなくオードルは暖炉の脇のソファーを寝床にして眠ってしまったことを知った。

安心してベッドに戻ったガレは一つ息を吐いた。

狭い寝室に一つのベッドだった。

ふかふかとは言えなかったが、布団に掛布で屋根付きの夜だった。嬉しいね。今日は背中痛くないね」

ランプの明かりのなかでカリスは楽しそうにしていたがガレは聞いて反対に口の端を歪ませなくてはならなかった。

「おまえ、そんな背中痛かったのかよ？」

「あ。そういうわけじゃないけどね。でもこっちのほうが土よりも軟らかいわけだし。ガレもこっちのほうが嬉しくない、きつとぐっすり眠れて明日はいっぱい歩けるよ」

誤魔化しているような笑顔だとちらつとガレは思ったが、追求はせずに別のことを口にしていた。

「あのばあさん・・・嵐で庭に倒れた木を邪魔そうに言っていたよな」

食事をしながらガレの禿の他に話題にあがったいくつかの話のなかの一つだった。

「うん。通路にどんとあるから通りにくいって。腰が痛いし、一人では動かせられないんだって言ってたね」

「その目的があつたから、俺たちに優しくしたのか？」

「さあ。わかんないけど、でもスーパ僕たちの分新しく材料追加して作っていたよ。温かくてとても美味しかったね」

「なにが言いたいんだよ」

「べつに、なんにもだよ」

爺さんのお古だという大きなシャツを夜着に借りて着ている二人は、古くて、少し動くとミシミシ音がするけど広さだけは少年二人十分休める大きなベッドでごろごろと転がって話をしていた。

「だって、僕はガレにくつついてゆくだけだもん！」

「おまえ、ひ弱だもんな」

カリスのふわふわと漂うような、のらりくらり交わすような言い方にガレは腹を立て言うと、カリスはぱつと頭を上げて上を向いて寝そべっていたガレを見下ろした。

怒ったのかとガレは思ったが、そういうわけでもなかったようだ。

「うん。僕はひ弱だよねえ」。だから、倒れた木をどかす作業、ガレが一人でやってね」

「はあ？んなこと誰がやるって決めたんだよ！」

「ガレ」

「言っていないだろっ！」

「ん。ならいいけど、僕は出発までゆっくり寝てるからね！」と笑顔で言った。

やはりカリスは怒ったのかもしれないとガレは思った。

「おやすみ、ガレ」

さつさと背中を向けると掛布を被るほどに引っ張り上げてしまう。

「・・・おやすみ・・・」

本気で、出発まで一人眠っているつもりなのだろうかとかガレは心配になってきていた。

ニンゲンでその上さらに自分より小さいカリスにはたいした力など望めないだろう。だから自分がやるしかないのだろうなあと思っていたけれど、カリスは部屋のベッドでうとうととしていてガレが一人働くのは、たとえば手伝わなくてもそばに立っているとは全然気分が違うってものだろう。

しばらく考えて、ひ弱だと悪く言ったことを謝ろうかと思って、カリスの顔を覗いたけれど、ガレは断念だった。

カリスは女の子のような長い睫を閉じてもう眠ってしまったから。

かわりにガレは腕を伸ばして枕元のランプの明かりを消した。カリスはへそを曲げてしまって、本当に手伝わないつもりだろうか。

悩ましく、眠れないかもしれないと思ったのもつかの間、ガレの意識も穏やかな眠りの世界に吸い込まれていった。

ベッドの布団のなかで目を覚まして、一瞬驚いたが、隣にはカリスが眠っていた。

自分を取り巻いている状況を思い出して、頭の禿を布で隠してしっぽも上着の下に入れたガレは次第に憂鬱になってきていた。

薄いカーテンの窓の外空は昨日の色が嘘のようにきれいに晴れた空が広がっていたが、視線を下に落としたときそれを思い出してしまった。

約束でも命令されたわけでもなかったけれど、ガレにとって決定事項になっていた。

宿と食事のお礼としてオードルおばあさんのために、倒れた木を邪魔ではないところに移動させるのだ。

ガレはまた、自分が八つ当たりにかリスのことをひ弱だと言ったこともしっかりと思い出して、だから暗い気分だった。

自分一人でやるのだろうか。

たぶん、がさがさやっていたら、オードルが気が付いて見に来るかもしれない。そのとき普通にしゃべられるか自信がなくて嫌なのだ。

小さく声をかけてみたが、起きる様子はない。

カリスは元々、朝が弱い質で目覚めが悪いのだから、普通でも簡単には起きやしないだろう。

もう一回、もう少し大きな声で「カリス、朝だぞ」と繰り返して

みたが、結果は同じだった。

ぶすつと頬に空気を溜めたガレが、マントを着ようかと迷ったがやめた。

マントを着ていると目を覚ましたカリスが、また慌てるかもしれないと考えたからマントはベッドのそばに置いたまま窓から外に出ていた。

雨降りのおとで濡れて朝日にきらきらと光る庭だった。

石を並べて作られた垣根の扉に繋がる一本の通路の真ん中で横たわる秋の嵐に倒されたという大きな枯れ木にはガレもなるほど、邪魔だと思った。

ご飯をもらったので。

ベッドも使わせてもらったから。

しぶしぶだった。

ガレはまず軽く腕で抱えて集められる枝を集めて庭の縁運んでいた。

昨日の雨の中で折られたのだろうまだ新しい枝だった。どうせきれいにしてもまわりには木が多いので、また嵐がやってきたらこんな風になるにきまっている、とぶつぶつ言いながら、枝を外に放り出して戻っていったガレは。

いつのまにかその大木の近く、しゃがみ込んでガレを見上げているカリスの姿を目にしてとっさに言葉はなかった。

「・・・おまえ」

「なに？」

「・・・んなところに座っていないで手伝えよ」

「ひ弱だもん」

一晩経つてもカリスもしっかりと覚えていて根に持っているのだ。むっとなったガレに構わず、カリスも怒ったような表情で続けた。

「それにガレ、僕を起こさなかったもん。一人でやりたいんでしょ」
「お、起こしたぞっ！声掛けただけぞっちが起きなかったんじゃない」

か！」

「違うよ」

「違わない！おまえ、寝ぼすけ、ぜんぜん起きないじゃんかっ」

「・・・違うよ、そんなことはないよ？」

カリスもガレの剣幕に怯んだようで、首を傾げていたが

「ひ弱な手伝い、いる？」

「いる・・・」

「じゃあ、謝る？」

「・・・わかったよ、謝ればいいんだろ、ひ弱って言うてー」

「べつに謝らなくていいよ！」

にこつと笑顔になったカリスが、よつこらしよと、老人のようなかけ声を口にしながら立ち上がった。

「だって、謝られても僕、ひ弱だもん。軽いしか持てないもん！重いのは全部、ガレが持ってたね」

青い上着の袖をまくったカリスが足下に落ちていた枝を拾い上げた。

最初に石や木の枝を取り除いて、そうしているうちに斧が納屋にあると姿を現したオールドが教えて、二人で大きすぎる倒木を解体していった。

抱えられるほどに割った木をすべて庭の隅まで運び終わったガレと、カリスにオールドが声をかけた。

「二人ともありがとな。助かったよ、もうこれで大跨ぎしたり、夕方つまづくこともなくなった。二人のおかげだなあ。さあ、ご飯だ。禿の坊はわしらじゃ無理だと思った大きな木の固まりを引っぱってくれた。お腹もどんと空いたろう、たんとお食べよ」

オールドにとって禿の坊の働きは感動が深かったようで、禿の坊、とガレは繰り返し褒められた。

「ほんと禿じゃないのにね・・・」

これには、禿だと説明したカリスは罪悪感があるため小さく誰にともない不平をこぼしたが、当のガレは平気だった。

「べつに、俺、禿てると思われてても平気だし」

「・・・そう。でも、僕はなんか、いやかも・・・」

あんまり物事を感じていなさそうなカリスでも禿は嫌いなのかと、発見したガレは笑顔だった。

自分が笑っていて、カリスがふてくされた表情。こんなことは出会ってからこつち、珍しかった。

そうと気が付いてさらにガレは、心が楽しくなっていたのだ。

でもその楽しさは長くは続かなかった。

井出で汗をかいた額を拭って、汚れた手を洗ったあとミルクとパンと焼いた薄いハムの朝食を食べ終わったぐらいの間までしか保たなかったのだ。

ガラガラと馬車が家に近づいて遠ざかってゆくと思われたとき、急に音が止まり、変わって馬車が引き返してきたことを感じていた。オードルと楽しそうに話をしていたカリスはどうかは知らなかったけど、ガレは気が付いて密かに背中の中うぶ毛を逆立てていたのだ。オードル老夫人にはだいたい慣れて、いくらか話もできるほどに緊張を解けるようになっていたけれど、すべてのニンゲンにそうはいかなかった。

知らないニンゲンが扉を叩いて、オードルの返事を待たずに開けて入ってきたのだから。

大柄の、鍬の似合いそうな農夫の中年の男だった。髭の顎、太い腕。

腰には野良仕事に使うのだろう鉈を提げていた。

男にとって普段の他意のない仕事の格好だったがガレは腰を浮かすほど警戒をしていた。

顔が引きつっているのが自分でもわかったが、どうにもできなくて早く去ってくれるように祈るように俯くだけだった。

男が入り口に近い椅子に座っていたガレの横に立っていた。

ガレのもう一方のほうの腕に安心させるようにカリスの手が触れていた。

「おはよう、ばあさん。今、仕事にゆく途中だったんだがな、驚いて寄ったところだよ」

質素な部屋に似合わない大声が壁にぶつかって跳ね返って殴られているような気持ちになつてガレは身体を竦めていただろう。

「おれも、ついつい、頼まれていたんだが先延ばしにしちまって悪いとは思っていたんだが」

がはがはつと笑つて頭を掻いたあと

「庭の倒木だ。それが今日見たら、きれいに片づけられていてどうしたんだと驚いたんだよ」

「おまえも、忙しいからな。気にしておらんよ。気長に待っているつもりだったんだが、そうしたらこの坊たちがな、朝一番にやつてくれたんだ」

オードルは皺の深い小さな顔に親しみのこもった笑顔を刻んで説明していた。

男は近所にする者で、オードルとは気心の知れた関係のようだった。

自分たちに男の視線が向けられているのを感じてガレの腕は小刻みに震えだしていたが、ガレの様子に注意が向くまえにカリスだった。

「おはようございます。僕たち泊めていただいて、もうこれでお暇するのですけれどお礼と思つて」

「ちっこいおまえたち小僧が二人であの木をどかせたのか？」

「小さく切つて三人で運んだから」

「それにしても、断ち割るだけでも大変だったろうに」

感心した響きだった。

男の胸あたりの身長でしかない少年が二人で、よくやったものだと感嘆の色を浮かべつつでも、信じられないなあと納得できない目もしていた。

だから。

おばあさんは説明したのだと、カリスは思っている。

カリスも驚いて言葉を失うことになったのだけれど、オードルおばあさんは普通の態度で、いやそれ以上に素敵なことを打ち明けるような笑顔、意地悪ではなかったのだろうと。

でも結果は最悪なものだった。

「こっちの坊はな、耳が生えている者だから、力がうんと強くてな。細っこいのに楽々と木を担いで運んでくれたんだ」

言葉がすべて終わるまえにガレは椅子を蹴って立ち上がっていた。立ち上がったガレの腕を男は別人のような怒っているような笑っている奇妙な顔に変わった男の太い腕が掴み取っていた。

ガレは獣人のニンゲンよりも強い膂力で男を激しく振り払って、男は背中から壁に吹っ飛んでうめき声を上げていた。

「あつ、あ、やめて。この子たちを苛めないで、いい子だよ」

穏やかな朝食の光景を一変させた老婆が悲鳴をあげて、おろおろと男の元に寄っていった。

「この野郎、やりやがったなっ・・・ばあさんどいてな。ばあさんの取り分は半分だ。借金に取られてしまった爺さんの土地をこれを取り戻せるぞ！」

立ち上がった男の言葉をオードルは繰り返していた。

「爺さんの土地・・・」

「そうだ、取り戻したいんだろう、じいさんに顔向けできないって。こんな幸運二度と来ないぞ、ばあさん！」

「・・・爺さん・・・」

オードルが男をなんとか止めようとしていた手が離されたのをカリスは視界の端で見た。

ガレは寝室に荷物とマントを取りに走ってそして、男はすばしっこいガレではなくカリスの方を先に捕まえようとした。

こちらを押さえることで、ガレを捕獲しやすいと考えたのだ。

大男が両腕を広げてカリスに迫ってゆく。

「・・・どうか、落ち着いて・・・うわあ、嫌だあ！」

手が伸ばされてじりじりと後退していたカリスの後ろは壁でもう逃げ場所はなくなった。

「嫌だ、こういうのはっ、離して、離してよ！」

身を擦って暴れたが、がっちりと大きな男にカリスの抵抗など痛くもないようだった。

が、ガレの体当たりを喰らって男は再び壁に肩をぶつけることになったが、寸前にうまくカリスが腕から逃げ出した。

「ガレ」

カリスはガレに手を伸ばした。

ガレはカリスの腕を掴み取っていた。そしてそのまま二人で戸口に向かった。

転がっている椅子を飛び越えて、暴れた振動でテーブルから床に落ちた皿が幾枚も割れていた。

そのなかでオードルは落ちくぼんだ瞳に悲しげな光を湛えて立ちつくしてこちらを見ていた。

「・・・おばあさん・・・」

一瞬振り返って何か言おうと、なじろうと口を開いたはずだが、ガレには言いたいことがわからなくなってしまうていた。

つんと鼻の奥が熱くなった。

ガレはカリスの手を引いて前を向いて走りだしていた。走って走って村を出て山の中までずっと休むことなく。

何度か木の根や石に足を取られて転びそうになりながら走り続けて、ずっと手を引っぱられていたカリスの心臓が爆発する寸前に、ようやくガレは立ち止まっていた。

ガレはそのまま木の根本に蹲ってしまった。

「ガレ・・・」

カリスは考えてようやく見つけた言葉だった。

カリスはそつと名前を呼んだ。他に良い言葉は見つからなかったから。

でもいったん声を出したあとは大丈夫だった。

「ああ、もう、追いかけてきていないみたい。追いかけてもガレ、足早いから追いつかないね。あ、でも僕と一緒にいて足引っぱつているか……。ガレ一人ならもつと山ほど走れたのに、僕がふらふらになっていたから駄目だねえ、もっと走れるようにならないと・・」

「一人でも走れないよっ！」

ガレは噛みつくように叫んで、カリスは歌うような一人しゃべりの口を閉ざしたのだ。

「足が震えて走れない、がたがたいてとまらない！手も震えてるっ、こんなのもう嫌だ！」

ずつと感情をフードの下の耳のように感情もじつと押し殺しているようなガレの絶叫だった。

やはりこうなってしまったのだ。

これではいつもと同じだった。

耳がバレたらお終い、獣人と知られたガレには居場所がないのだ。珍しい生き物としてただの獣とのように追われてしまう。お母さんとばらばらになって、おじさんはガレを岩陰に隠した後、ハンターの前に跳びだしていつて、しばらくして誰もいなくなったとき、ガレは這いだしておじさんが走った道とは反対に広がる林へと逃げたのだ。

それきり、お母さんもおじさんの消息も知れなかった。

「嫌だよ」

こんなの、もう嫌だと、言っても無駄とわかっていてもガレは止められなかった。

「こんなの、もう嫌だっ！どうして、おばあさん、優しくったのにっ！俺も普通にしてたのに、あのヒト、やっぱり裏切った！俺の耳をあの男にバラして、俺を売るつもりで最初からいたんだ、きつと

「!!」

「ガレ・・・」

琥珀の瞳からはぼとぼと大粒の涙がこぼれていく。でもガレは拭うことせず叫んでいた。

「なんで、俺は普通にいたいだけだよ、どうして捕まえられて殴られないといけないわけ、檻に入れられて売られなくちゃならないんだよっ!!」

しゃくりあげながらガレは訴えていた。

「俺は悪いことしてないんだ、ただしつぽと耳が生えてるってぐらいなのに、どうして仲良くできないんだろっつ、なんで殴るんだろっつ、武器を持って自分の子供だと殴らないのに俺だと殴るんだっつ、ニンゲンは俺たちのこと嫌いなんだ!・・・ほんとはおまえだっつ・・・」

そこでガレの声は震えて消えていた。

「ねえ、ガレ・・・僕のことは勝手に決めないでよ・・・。僕はガレが好きだよ。確かに殴る人もいるけど、だけどみんなじゃない。ガレのこと好きだっつて人、ちゃんというよ」

痛みしそうに、でも怒ったようにカリスは蹲っているガレの横に膝をついて腰の鞆を示したのだ。開けてもいいかと丁寧にガレに断つてからガレの鞆の蓋を開けた。

中からカリスが取り出した物は、数枚の古びたコインと布にくるまれたパンやゆで卵などの食べ物、そして古い帽子だった。

どれもガレが入れた覚えがない物を見せられて、驚いて涙は止まっていた。

「オールドおばあさんがね。ガレが仕事しているときに僕にくれたの。最近物忘れが多いから、うっかりと出かけのときに忘れるといけないからっつて。もらって僕はガレの鞆に入れて置いたの」

まったく知らなかったことでガレは目を見張ったが

「・・・でもあのばあさんは、結局裏切ったんだ!」

悔しそうに悲しそうにガレの顔は再び歪んでいた。

「・・・それは、僕は少し違うと思うんだ。オードルさん、昨日の夜でも食事が終わったに、食事はもう食べたかって、何度も何度も聞いていたでしょ。お歳だから忘れちゃうんだね。だから、あの時もすっかり、ガレの耳のことを話したらどうなるかってことを忘れちゃっていただけたと思うの」

黙って話に耳を傾けているガレはズズッと鼻をすすり上げた。

「オードルさん、きつと最初からガレのこと気が付いていたんだよ。けどと言わなかった。それで、ほら」

ガレにカリスは帽子を差し出していた。

「これから旅するのに、マントでは暑いだろうし、布だと落ちるといけないからこれを使えって言うていたんだよ。でもすっかり忘れちゃって・・・。ああ、ほら、ガレの力持ちを嬉しそうに自慢するように言うていたと思わなかった？」

優しい笑みを浮かべるカリスが、ガレの涙に濡れた手の甲の上にそつと帽子を置いていた。

黒狐のような動物の毛で作られた帽子は大事にされていたとわかる品だった。

大事にしてあつたおじいさんの物。おそらく“禿”を隠すためにとガレに贈られた帽子だ。

それをガレにと。

「ね、ガレ」

カリスはそつと両腕を伸ばしてガレを抱きしめていた。

「ガレのこと好きな人は隠れていてなかなか見つからないかもしれないけど、ちゃんというよ。だって、もうここに一人いる。一人いるなら何人もいるよ、絶対ね」

ぎゅつと腕に力を込めていた。

「でもやつぱりいても現れないの意味はなくて、寂しいよね。ねえ、ガレ。僕はね、一緒だよ。一緒に“楽園”に行こうよ、早く。そこに行けばもうガレは悲しくならなくてもよくなる。そこに行こう！」
さあ、とガレを抱きしめていた腕を解いたカリスは立ち上がった。

「行こう！」

今度はカリスだった。

涙でぐちゃぐちゃになっているガレに手を差し出していた。

ガレは、光に集まる羽虫のようにふらりとその自分より小さな白い手に手を重ねていた。

カリスは、ガレの手を掴むと引っぱり立たせてもう一度。

「行こう！ガレ」

ガレが見とれた明るく太陽のような力強さを感じた笑顔だった。

ガレの手をしっかりと握ってカリスは駆けだした。

ガレとカリスと、ソラの物語 3

「ごめんね・・・ガレ。少し休んだらまた走れるようになると思うんだけど・・・」

「いいよ。べつに。俺の方が絶対体力あるんだし」

ニンゲンと獣人ではしつぽや耳があるだけでなく、基礎的な身体
の作りが違うのだ。だから、ガレには走れなくなったカリスを背負
って山道を駆け上がることであってそれほど苦ではなかった。

行こう、と威勢良くガレの手を取って走り出したカリスだったが
どれほど走らないうちに、ガレよりも息が上がり足がもつれだし
た。

「情けないよね・・・転んで走れなくなっちゃうなんて・・・」

カリスはガレの背中に掴まりながらぶつぶつ言っていたが、もう
ガレはあまり聞いていなかった。

気にしなくたっていいからと、最初は丁寧にいちいち答えていたけ
れどカリスは納得しない。気にしていることが好きなのだ。だった
らずっと言っていればいいやと思ったのだ。

ガレの背中に掛かる重みと、体温。

そして優しいカリスの声。

内容はずつとぼやきだっただけ、聞いていて嫌ではなかったから
ガレはカリスの自由にさせていた。

「ねえ、ガレ。やっぱり、獣人って凄いね。こんな風にいつぱい走
ることが出来るなんて羨ましいよ」

「走れなくても普通に暮らせて行けるおまえたちニンゲンの方が、
俺には羨ましいけど、そういうものなのかねえ」

「うん。そういうものだよ。もうそろそろ降りるよ。足の痛みも少
なくなってきたし」

だからべつに気にすることないって・・・と言いながらも、カリスは降りると騒ぐのでガレはしゃがんで背中から地面に降ろしてや

った。

すると足を着いて、最初こそぐらりとふらついてガレを慌てさせたが、踏みとどまると、

「うん、大丈夫そう」

カリスはうんと頷いて見せた。

「意地っ張り」

「なに、なにか言った？」

「いいやなんにも」

登った斜面を下って、平らな部分に差し掛かってしばらく下草のなかを歩いて行くと、木立の向こうに細い道が見えるようになった。街の近くの街道とは違い石畳ではなく踏み固められているような農道のようなものだったが、草の下に気の根っこや石の凹凸が隠れている今より、歩きやすいことはまちがいない。カリスは嬉しそうに歩調を早めていた。

「あそこに出よう！」

「あ、待てよっ・・・」

このまま雑木林を歩いていた方が人がいないので安全だろうかとか考えていた最中のガレは驚いて引き止めようとしたが、気がつくのが遅れてカリスはもうどんどん先に行ってしまった。

「待てったら！」

「嫌だよ、待たないよ、うわあっ」

甲高い悲鳴が上がって、ガレの前でカリスがべたつと前方に倒れていった。

何度目だろうか。

カリスはよく転ぶ。またか、と苦笑しながら追いついて助け起こそうとしたガレに、カリスは別の者へと言葉だった。

「あの、ごめんなさいっ。こんなところに寝ていらっしやるなんて思いもしなかったの・・・」

「カリス!？」

太い一本の木立の陰で見えなかったが、そこには誰かがいるのだ

ろっ。

顔色を変えたガレが駆け寄って、カリスの身体をそいつから引き離すように抱き寄せた。

「ひでえなあ、踏んづけられてしまった・・・」

低い男の声だった。

「まあ、いいけど。・・・で、そっちこそこんなところに子どもが何してるんだ、お、二人連れか？」

「ガレ・・・この人の足をうつかり踏みつけてしまったの・・・」

カリスは申し訳なさそうにガレに説明したが、カリスとガレに疑わしげな目を向けているこの男の方こそ、怪しいとガレは緊張させられていた。

黒い衣類の上下に身を固める男は髪も黒だった。

黒のなかでも腰に巻かれるベルトとブーツの濃い革色が濃淡なアクセントになっている男は三十ぐらいの歳に見えた。

カリスが横断して行くこうとしていたその場所で一本の木の幹に身体を預け足を投げ出して眠っていたようで、その足を草の陰で見えなかったカリスは踏みつけてバランスを崩し、転がってしまったということだった。

「気にすることない」

どう考えても、ぼつりと眠っていたというこの男はガレにとって胡散臭かった。

カリスが気にする必要などないように思えたので、ガレは不機嫌に口にしてしまったが、当然だった。

当然のこと、不満の声だった。

「おいこら。おめえが言うことじゃあないだろうよ？」

ガレに文句を言いつつ、のそりと男は身体を起こして立ち上がった。

カリスの腕を持ったままでガレは一步退いていた。

男は長身だった。

今までは地面に腰を下ろしている男相手で見下ろしていたが、こ

れで立場が逆転した。

大柄な男はどんぐりの背比べなカリスとガレの前で抜きんでて大きかった。

分厚い身体をしていた。贅沢な生活でぶよぶよの肉の肥満したものではない。

鎧のように厚みがあり胸板は筋肉が覆い、隆起した頑丈に厚いだ。

バランスが良くとても引き締まって見える腹だつて腹筋で覆われて割れているのだらうと思った。

この手の奴ならガレはよく知っていた。

こんな感じの体付きをした者は、獣人にとってニンゲンのなかでも最悪な部類だつたらう。

気がついた事態に、総毛立つガレの想像を裏付けるように男は地面に置いてあつただらう幅広の剣の柄を握っている。

「ガレ？」

「・・・駄目だ、逃げっ・・・」

カリスの腕を引っばつて男から逃げようとしたのだ。

でも、ガレよりも男の方が早かった。

「ぎゃっ」

ガレが潰れた悲鳴をあげていた。

掴まって持ち上げられてしまったのだ。

「は、離せっー」

ガレは足をばたつかせて懸命に暴れていたが男はびくともしなかつた。

それでも必死になってガレの足は男の身体を蹴りつけていたが「うおっ・・・元気がいいねえ」

男からはそんなとぼけたような言葉が口にされただけだった。

さすがのカリスも事態に何かを感じたらしく笑顔を消していた。

「ガレを、離してください」

「ああ。離すが、でも悪いことをしたら謝る方が先でしょう？」

「謝る？・・・ガレは何もしていない」

「俺の足を踏んだ」

「踏んだのは僕だ！」

「ああ、そうだが。こいつは踏む以上に可愛くないことを言ったぞ」
確かに、男にも聞こえるようにカリスに気にしなくていいと言ったガレは可愛くはなかっただろうと、カリスは認めた。

「でも最初に悪かったのは、僕だよ、ごめんなさい、おじさん。許して、ガレを離して」

祈るようなカリスの訴えだった。

しかし男は、男らしく精悍な顔の口元を歪めただけだった。

「状況は悪化したな・・・」

「なぜ、どうして！」

「おまえも失言を犯した」

「そんなことないっ！」

カリスは力一杯否定していた。

「いや、あった」

ある、ないと繰り返す微妙なぬるい空気の口論になってゆき、吊り上げられたままになっている本人のガレは平常心を取り戻していた。

「・・・ごめんなさい、おにいさん。カリスの暴言もまとめて俺が謝るから・・・ごめんなさい。どうか、降ろしてください・・・」

「わかればいい」

すっと地面に戻されたガレに飛びつくようにカリスはくっついたがその頃には男の大きめな唇には何事もなかったような笑顔が刻まれていた。

「・・・おにいさん」・・・？」

確認するように呟いたカリスに、愛想の良い笑顔で

「じゃないと、おかしいだろう？」

おじさん、じゃないか。どこも自分は間違っていないじゃないか
とは、カリスの心の声だったが、賢明に口に出すことはしなかった。

ガレが小さく、首を横に振って言うなと合図を送っていたから従ったけれど、理不尽な不正を強要されたカリスの心はそれからしばらく曇ってしまった。

「ゾラ・エルド」

聞いてはいなかったけれど、自分から名乗った男は、気にせずゾラと呼び捨てていいぞと言った。

そのあと、二人に名前を聞いた。

仕方なく近くのいたカリスから、

「カリス・・・」

「ガレ」

続いて、ガレも同じようにぼそつと言った。

「おい。俺がフルネームで言っているのにおまえたちは、それかい」
大仰で非難の色に敏感にカリスが唇を尖らせていた。

「知らない人に不用意に名前を言ったらいけないんだよ！」

家出の最中で、こっそり家を出てきたというカリスは家名を明かす名字を告げたくないのだと言うことをガレも気がつけている。

ガレも、“カリス”としか聞いていないのだ。

でもそれで十分で、困ったこともなかったのだけれど、カリスがこっそりとガレの知らないところで抱えているものがはじめて、少し気になったときだった。

高そうな衣服を着ているカリス。しゃべり方も上品でお金持ちなだけでなく貴族のように階級が高いのだとは感じている。

だけど、こんな田舎で、告げただけでああ、とわかるほどの家柄なのだろうか、それはどんなものだというのか？

目を背けるように生きてきたガレが己の外の世界についての疑問を感じてしまっている横で、話は進んでいる。

「なんでこんなとこに、二人でいるんだい？」

「秘密だよ！そういうことも気安く他人には話してはいけないこと

なんだよ！」

カリスが、ゾラを良く思っていないことを隠さない態度で、棘を持って、ガレがそれまでに知ったカリスとは別人のような、ある意味さらに子どもっぽく受け答えをしていた。

「可愛くない餓鬼だな」

終いにはそんなことをゾラに言われてしまっていたが、カリスは平気なようだった。

「それでいいの。可愛いと攫われる可能性が高いから可愛くない方が良いんだよ！」

そのうちには穏やかそうにしゃべっている男も堪忍袋の緒を切つてしまわないかと不安になってきたのでガレが口を挟んでいた。

「俺が・・・おばさんのところを頼って行こうとしている。そうしたらカリスが一人じゃ危ないから一緒に付いてきてくれるって・・・」

「嘘だった。」

「おまえの親は？」

「死んだ。俺は一人だからおばさんのところへ」

ガレは普通にしゃべれた気がして安心した。

「じゃあ、おまえの親は？」

今度は再びカリスへの質問だった。

「一人いる。けど僕は愛されているからね。好きなことをして良いって送り出してくれたよ」

「旅着も荷物も無しでか？」

「・・・ガレが、優しくて僕の分少し、持っていてくれるよ。身軽が一番なの！！」

カリスの言葉には幾分無理がある。本当に室内着のような豪華な上着と、旅支度も調える暇がなかったと宝石を見せてくれたカリスは、ポケットの中に売ればお金になるという宝石を持っているけれど手元には乾し肉一枚持たないのだ。

旅慣れてそうな清潔に保たれているが草臥れた鞆や衣類のゾラに

納得できるはずがないとガレは肝を冷やす心地だったが、ゾラはあつさりとしてそれ以上の追求はしなかった。

「ふうん。最近の教育は俺達との頃とは違っただねえ」

感心するような揶揄するような言葉に、「やっぱり、おじさん発言」と小さく機嫌の悪いカリスは口に出したが幸い、ゾラまでは届かなかったようだ。

「で、ならそのおばさんはどこにいるんだ？」

ガレが尋ねられていた。

言うことないのだと、ずけずけと入り込んでくるゾラの態度に怒っているカリスが主張しているけれど、なんとか丸く収めたいと思っているガレは進路方向にある大きな街の名前を思いついていた。

「サザントーイに、いるって聞いている。昔の話だからよくわからないけど・・・」

「サザントーイね。まだ結構、遠いぜ」

「うん。けどなんとか・・・行けると思うし・・・」

「まあ、それぞれ事情があるからな、今が踏ん張りどころだと思っでがんばれよ」

頷いたガレは、これで上手くいったと思ったが、また駄目だった。また。

数日のうちでこれで二度目だ。

「暇だからついて行ってやる」

「えっ？」

性格はそれぞれ違っている二人が同じ顔になって、大きく見開いた目でゾラを見上げる。

「だから、二人じゃ心許ないだろう？今は仕事も区切りになって、フリーだから俺が護衛に付いてやるぞ」

「お金、無いから無理だよ！」

「ああ、心配するな。奉仕の精神だ」

「要らないっ！」

硬直しているガレの横でカリスが一人果敢に応戦していた。

「じゃあ、山賊に襲われてもおまえは無視しておいてやる。助けるのはこっちの坊主だけな」

「ガレっ、なんとか言ってよっ!!」

せっぱ詰まった表情に無言のガレをカリスは揺さぶったが、これ以上上手い言葉が自分に見つけられないことをガレは悟っていた。

ガレは、カリスに言いくるめられてしまうのだ。

そのカリスが太刀打ちできない相手なのだったら。

「ねえ、ガレっ!!」

それでもなんとか

「結構です・・・遠慮します・・・俺達、二人でうまく、出来ます、から・・・」

「子どもは遠慮なぞしないでいい。安心してどんと任せておけ!」
じゃあ、とゾラは。

さっさと行くぞとガレとカリスに背を向けて歩きだした。

「何してるんだ、置いて行くぞ」

カリスが走っていた方向である。

そっちの先にサザントーイがある。

それを無視して背後にある街を告げても、信じられないだろうと本当の方向にある適当な街をガレは口に出したのだ。

嘘の中には本当を織り込むことに信憑性が上がると言うのではないか。

でもこれは墓穴じゃないとガレは思った。

そう言ってしまったために、ゾラの背中を追う他、ガレに選択肢がなくなってしまうているのだから。

ぶつぶつ、聞こえないようにでも聞こえるようにゾラの文句を言い続けるカリスだったが、ガレは少し違った。

カリスは太刀打ちできないことが悔しくてたまらずに不平を収められないのだけど、ガレは無理なので、諦めた気持ちで大人しく歩

いていた。

でも、やはり溜息が出てきてしまう。

「おい、どうした？」

カリスの文句は聞こえていないように無視しているゾラが、ガレの様子に気づいて振り返ったきた。

「疲れたか、なら休むか？」

「疲れていない」

「そうか。じゃあそっちの元気な坊主は？」

まだ歩けるかと、優しい笑顔のゾラを嫌なにたにた笑いだと腹を立てるカリスが

「全然平気。まだ走れるよ！」

「おう、そうかい、そりゃ良かった、意地っ張り君！」

大きな剣を携えて、ハンターのような空気を持つ男でとても警戒していたガレだったが、危険な気配は薄れていた。出で立ちはそのいった類のものだったけれど、ゾラは口は悪いもののあまり警戒しなくても良い相手なのではと考えるようになっていた。

大人相手に、驚くような発言をするカリスの横でガレはビクついたものだが、本人のゾラの方は気にならないらしく平気で笑っている。そこが余計にカリスの癪に障っているのだろうけど、この調子ならそれほどこの先も険悪なことにならないだろうと少し安心してガレは聞いていられるようになっていた。

「意地っ張りじゃない。ほんとにまだ走れるんだからっ」

「はいはい。じゃあがんばって歩いてくれ。あとでよくやったよと頭撫でてやるから」

「子ども扱いするな！」

「子どもだろ？」

「でもっ、僕だけ！ガレにはぜんぜん言わないじゃないか！」

「そりゃあ、おまえの方が面白そうだからな！」

「差別だっ！」

「おまえの態度も差別してるだろうっ？」

顔を怒りに紅潮させて立ち止まってしまったカリスにすぐに気が付いて涼しい顔で振り返ったゾラが切り返していた。

「差別？」

「ああ。ガレにやあ、穏やかにしゃべるが俺だともう親の敵かなんそのように噛みついてくる。俺はおまえに嫌われるようなことなかやっただか？おまえの母ちゃんを、俺は殺して覚えはないけどね」

巫山戯た物言いで、存外に物騒なことをゾラは言った。

言葉の流れで実際に死や生が関係あるとはガレは思わなかったが、その先の言葉を見つけれなくなったカリスはただ息を呑んでいた。カリスもわかっていた。

八つ当たりしているのだ。

ゾラに悪いところはないけれど、ただ自分とガレの二人という予定の中に入ってきてしまった邪魔者だった。しかも大人。見下ろすような態度がカリスの父親と少し似ていると感じてしまったからむかむかと腹が立って、平静ではいらなかった。

もしかしてと、カリスも一つの不安をゾラに対して抱いたのだから。

ハンターではないかとガレは思ったけれど、カリスは父親の指示で自分を連れ戻しにやってきている手の者かと、だった。

まだなんとも言えないけれど、でも無理矢理連れ戻される様子ではなくてそこにはホッとしていたけれど腹立たい。

ガレと二人旅が良かったのに。

大人で剣も扱えそうなゾラがいれば危険度が減るかもしれないけれど、ガレはゾラを受け入れてしまったように反対していいところも腹立たい。

ガレにとって、自分だけだったのに入り込んでしまったゾラが。

ゾラは悪くなくても。

「おい。やっぱり歩けなくなったか？」

ズキズキと痛んでいたけれど、まだ歩ける。

「強がりをごめんなさいと、素直に謝ったら許してやるぞ？おんぶ

してやるぞ」

「全然、平気だよ。歩けるもの！絶対にそんなことしてくれなくていいっ！」

だけど口早に。

「ごめん。僕が間違っていた、かもしれない・・・」

先を黙々と歩いて行くガレの位置まで走って、追い越しざまに素っ気ない声でカリスはゾラに伝えた。

「ガレ、一人どんどん進んでいかないでよ。僕を置いて行くつもりなの？」

「・・・ああ。ごめん。ちょっと考え事していた・・・」

「もうっ、ガレったら酷いよ！考え事していたら置いてっちゃうわけなの？」

「そっいうわけじゃないよ」

「あたりまえだよ、そんなの酷いよ！」

「聞こえなかったかもしれないと思ったが、ちゃんとゾラに届いたのだろう。」

「謝りどころが違うんじゃないの？どうせならそっちにしておいた方が楽だろうに、まったく」

ふっと、後ろからゾラの大きなため息も聞こえてきたが、打ち消すような明るい陽気なカリスの声が鳥の声と木の葉の風唄の林に響いていた。

「こそこそ藪の中歩かなくても、俺がついていりゃあ山賊も物取りも大丈夫だろう」

と言うゾラが道連れにいる。

「他に山ん中を行かなければならない理由があるのか？」

不思議そうなゾラの一言に、二人とも口を閉ざして道を堂々と歩いていた。

カリスにとって草や木の根が這っている林の中や岩肌よりもとて

も歩きやすくて歓迎だったが、ガレはそのため緊張を隠せないでいる。

田舎の道は街の付近のように石畳でもなく、道と言ってもあたりに人の姿も気配もない鄙びたものだったが、いつ畑帰りの荷馬車が藪や山の間から出てくるかもしれないので気がかりだった。

ガレはオールドルから貰った、禿げた旦那の物だったという帽子を被ってフードを脱いでいた。

慣れない帽子なことあって、いつものようにフードを被ってしまった方が心が安心できるのだろうけれど、ゾラがいるためにこれ做不到にいた。

道に出て、脱いでいたフードを目深に被ってみせたら、何かがあるのだとわざわざ自分で教えているようなものだった。

今は笑っているゾラ。

だけどガレのしっぱと耳を知ったとき、どんな風が変わってしまったのかやはり警戒は消えなかった。

剣を持っている。

がっしりと背も高く大柄で身体を鍛えているハンターのようなタイプだった。

だけど、比較的穏やかそう。

自分にも優しい。と言うよりただ普通。お金持ちそうな格好をしていて、いろいろと面白そうなカリスを苛めて遊んでいるので、ガレには特別な感心もないという雰囲気だった。ガレにはそこまで子ども扱いをしてこなかったけれど、ガレより少し背は小さいもののそれほど大差はないはずのカリスをしつこくからかっている。

大人しくて女の子のような奴だと思っていたけれど結構、激しい性格をしていて気はあまり長くない。カリスはゾラに、今にも叫んで格気を起こしそうな危険な空気を纏わせるほどにもいったけれど、少しずつ落ち着いてきているようで、ガレはその点だけは安心してた。

でも、ガレはずっとはらはら、しどおしだと気がついた。

それはカリスに出会ってからだった。

カリスに出会って、カリスがいたからこそ、オードルの居間に招かれることになっていた。自分一人なら冷たい雨の中の方がマシだとニンゲンの臭いのある納屋に泊まることはしなかっただろうし、その結果に泣かされた悲しいこともなかっただろうけれど、ならこうして帽子を貰うこともなかったはずだ。

カリスの言葉を聞いてからガレは、もうそれほどオードルを悪く思う気持ちはなくなっていたのだ。

オードルは温かいスープをくれたのだ。

カリスが言ったとおり、最初から、そうではなかったとしても早い時点から自分に気がついていていたようにガレにも思えるのだ。

知っていたけど、普通にしていた。

オードルは平気な感じだった。

最後には平気すぎて、大事なことをすっかりと忘れてしまったくらいで。

食べたご飯のことを忘れてしまうことのように罪も悪意もなかったのかもしれないと。

カリスに出会って、自分のペースを失ってしまつて乱された中でドキドキと精神をすり減らしながら教えられたことは、大きいとガレは認めていた。

だから、このゾラと一緒に今いることも、どういう結果になるかわからないけどもう少し逃げずにいようと思っていた。

そんなことを一人考えるガレの横を一台の荷馬車が通り過ぎて行くこともあった。

ゴトゴトという車輪の音が挽きつぶされそうに大きく中年の夫婦が乗った馬車が近づいてきて、二人は自分を見ている気がした。

もうすぐ気が付いて鍬や斧を振りかざすかもしれないと腕も足も震えそうになったときだ。

「やあ、ご主人。今日は一日いい天気だったですねえ。仕事ははかどられましたか？」

ゾラの明るい声に、すると同じような脳天気な声だった。

「昨日の雨が嘘みたいで大助かりでしたかね、雨が多いと雑草の伸びも早くて追われますわい」

「でも、一雨降って欲しい頃だったんですけどね」

ほほほつと夫より恰幅の良い夫人が愛想よく続いた。

「しかし二人の子ども連れじゃあ楽ではないですなあ」

「いえいえ。生意気で困りもんですがそれが子どもの特権でしょうねえ」

やっぱりおやじトークだと感じるカリスと、ただ目を見張っているガレだった。

すると、本当に夫人が自分を見ていることに気が付いた。

「どうぞ、お気を付けてくださいね。バイバイ、坊やたち」

咄嗟に言葉が出なかったガレに向かって、少し小声になって「お父さんをあまり苛めないのよ」と笑った。

ガレに言ったのは、同じ黒髪だから似ているせいなのだろう。

「お父さんだつて」

小声で言つて、ぷつと吹き出したカリスだけでなく、ガレも一緒に夫人に手を振り返して馬車の二人連れを見送ることをしていた。

小さく遠ざかつて行く馬車を振り切れずいつまでも止まって見ていたガレにゾラが言う。

「おい、行くぞ」

頷くと、再びてくてくと歩き出したのだけど、ガレは自分の中味が空っぽになつていて感じるがしていた。

空っぽというと、悪いものに聞こえるかもしれないけれど、それは嫌な気分ではなかった。詰まっていた重い物が消えて、軽くすぽつと空いている。

空になつていてるせいか、力もあまり籠もらなくて今は少し前に一日中走り回ったときのように全力では走れそうになかったけれど。

ガレは逃げない。

ゾラから。

現実から、・・・だろうか。

ああ、もつとも。簡単に逃げると言っても、ガレほどには走れないカリスと二人でこの男の前から無事、追いつかれることなく逃げおおすことはとても大変そうなことで、必要がないならなるだけ避けたいけれどーなどと考えていたら急に可笑しくなっていた。

「ガレ、なに、何が面白いの？」

目敏く気が付いてカリスに聞かれて、べつに、と答えていた。

だって本当に、説明するほど面白いことなどなかったのだから他に言えなかったのだ。

ただどなぜだかとても可笑しくて笑い続けていると、カリスは自分に教えられないことを僻んだように「変なの！」と不満そうに言うものだから、余計にガレの笑いが止まらなくなったのだ。

夕ご飯は豪華になっていた。

オードルがこっそりガレの鞆に入れてくれた食料があった。

ハムを挟んだパンとパンケーキと、果物と茹でた卵だった。そして、その上、ゾラが気前よく、自分で持っていた物をカリスとガレにも分けてくれたからだ。二人のオードルがくれた物はちゃんとゾラにも分けるつもりでいたのだけれど、それだけでは足りんよなあと云ったゾラは慣れた手つきできばきと準備を始めた。

しかも荷物から小さな鍋も食料と一緒に取り出したゾラは、小川で水を汲んできて塩や香辛料を入れて乾燥物を煮込んで温かく水分のある食事に戻してくれて、カリスもこれには大喜びだった。

文句は言われていなかったが、ガレがカリスに分けていた、ただの乾し肉の食事には不服があったことがよくわかる出来事だった。こういう調理方法があることはガレも知っていたけど、鍋を持っていなかったし実行するのは面倒だったのだ。

だったら、はっきりそう言ってくればいいのに、と気分の悪いガレの隣で、美味しいとご機嫌にはしゃいでいたカリスだったが、

しばらくするうちに静かになっていた。見ると眠ってしまったのだ。身体の上に自分の持ち物から毛布を出して広げているとゾラが言う。

「おまえも寝ていいぞ。しばらく俺が夜番しているから」
道から少し離れて焚き火を起こして、野営だった。

晴れた青空の一日と入れ替わった夜の空は、満点の星が輝いていた。

カリスがいるせいが、不思議にガレも半日でゾラにすっかり慣れてしまつて緊張も薄れていて、昔からの知り合いに久しぶりに出会つたような気分になっていた。

だから、つい愚痴になっていた。

ゾラよりもつと長い時間一緒にいるけれど、カリスには言えない愚痴だった。

「こいつ・・・すぐ寝る。食べたあと、気が付いたときにはもう寝てるんだ」

昼間は動いているから、夜だとゆっくり話が出来ると思うのに。カリスの方はそうは思っていないのか朝までぐっすりで、ガレはつまらないのだ。

「そりゃあ、しかたないだろう」

笑つて同意してくれると思つたのに、ゾラの返事はガレの予想とは違つていてしまった。

ゾラは言う。

「そんな顔せずに、考えてみ。クタクタだろうよ」

「くたくた？」

繰り返した直後に、はつとしてガレは血相を変えた。

「そんな、無理させていない。こいつに合わせて歩いている、俺一人だつたらもつとフー」

「ん、なこと力説しても意味ないだろう？おまえはそう思っていないけども、こつちでは現にこういうことなんだから」

ゾラが木の枝を火にくべながら、顎で芋虫のように丸くなって眠

っているカリスを示していた。

眠っているカリスに配慮して特別に声をひそめてはいない。それでも目を覚ましそうにない様子だった。

長い睫の目は閉じられて白い頬に焚き火の陰が踊っている。頬にこぼれるさらさらの金色の髪。

黙っているとカリスは街のお店のガラスの奥に飾られている高そうな人形のような人形のような人形。意味なく高いそれは自分には一生、関係ない物だと目にしては鼻を鳴らしていた。

急に気になって、手を伸ばして指で頬を触ってみると途端に消えて無くなることなく、肉の感触にガレの指先はカリスの頬にめり込んだ。

満足して引つ込めたガレは、焚き火を挟んだもう一人の道連れゾラと色の目と目が合った。

居心地の悪い沈黙が広がっていった。

すると明るくからかうようにゾラが言った。

「なんだ、気が付かなかったか。・・・どう見ても、こいつこういう生活したことなさそうに見えねえか？」

「そう、だけど。・・・だけど、このくらい・・・単にこいつ、寝るのが好きなだけかもしれないし・・・」

「まあ、そういうこともあるかもな」

焦ったガレの言い訳だったが、ゾラはあっさりと納得したように頷いて、それきりこの話は終わってしまった。

「おまえもさつさと寝ろ。寝ておけるときに寝ておくもんだぞ」

ゾラに急かされて、ガレも横になっていた。

ガレはあまり疲れてなどいなかった。自分一人ならこの十倍も移動したことがあっただろう。だけどカリスがいるから最近はずりずりで、これぐらいなのだ。

だからこのくらいなら、カリスだってきっと大丈夫なはずではないか。

ゾラのせいで、ガレの心に一本の小さな棘が残ってしまった。

摘めないくらい細いの、それはちくちくとしばらく痛かった。

晴れた朝のように明るく元気なカリスに、やはりゾラの考えすぎだとガレは思った。

昨日一日しか、ゾラは自分たちのことを知らない。

だけど、ガレはカリスのことを、その三倍も一緒にいるのだから大人であろうと、ゾラの言うことがすべて正しいのだと思う必要などないのだと気がついたのだ。

だけど、すっきり心が晴れないのはまだガレもカリスのことをよく知らないからだろう。

気にはなった。

でも過去などどうでもいいことかもしれない。そう言うではないか。

家出をするほどの理由は、他人に言いたくないことに決まっているはずだ。

だから、拘らないで知らん顔をしている方が男らしいと気にはなつたけど聞けずにいたことだった。

午前中、意識してカリスに歩調に合わせてゆつくりと歩いた。

のんびりした道中になり、天気も良かった。

ゾラは相変わらずカリスをからかってしゃべっていたがガレは聞き流して、その間に荷馬車と徒歩の旅行者にもすれ違った。

ゾラが言葉を交わして、カリスとガレも後ろで軽く頭を下げた挨拶をした。

そうするうちに太陽は天辺に昇り、お昼ご飯と休憩になった。

お昼は乾燥物を簡単に食べる。

そのあとは荷物はゾラのところにおいて、カリスとガレは近くある湖を見に行くことにした。

「あまり遠くに行くなよ。何かあったらすぐ大声を出せよ」

ゾラに見送られて、木立の向こうできらきらと光る水面がずっと

気になっていたのだというカリスの希望だった。

湖に着くとカリスの歓声だった。

「きれいな水だね。冷たい！」

ガレにはそれほど珍しい物でもなく、岸でしゃがみ込んで水の中に手をつっ込んでいるカリスを後ろから眺めていたのだが、このとき意を決した。

「なあ。おまえって、ほんとに家に戻らなくていいのか？」

「ガレ。それ、なに？」

カリスの返事は、背中を向けたままだった。

「だってさ、家出って言ってたけど・・・」

「ゾラが来たから、僕が邪魔になってきたの？」

普段の声だったけれど、普段ならカリスはこっちを振り向いていると思ったからガレは焦る。

「そうじゃないよっ、だけど、気になったんだよ、家出の理由、なんにも俺聞いてないじゃん！」

「ぱしゃぱしゃ水をかき混ぜている音がしていたが、返事が返ってこない。」

「おい、カリス！」

「そんな話聞いてもつまらないよ」

涼しげな声だった。だからガレの声は逆に熱くなってくるのだ。

「気になるんだっ、俺には秘密で、話せないことなのかよ！」

勢いがよかった水音がぴたっと止まった。

ガレにとつて、カリスはどこか怖いところがあった。

小さくて女の子のようで、明るくておしゃべりだったけれど、こんな風にいったん空気が変わってしまうと、どうしていいのかわからなくなってしまう。

怒らせたのだろうか。

謝った方がいいのだろうか。

べつに謝るようなことなどしてはいないはずなのに、そうすべきだろうか。

だけど、ガレは謝らなくても済んだ。

カリスがガレを振り返って立ち上がった。笑顔だった。怒ってはいないようだった、ガレには、だ。

「あのね。僕の家族はね。みんな僕を嫌いな。みんな、僕がいないと良いと思っているの」

そのあたりの話なら一度聞いていた。

「そんなこと、ほんとにおまえ、言われたのかよ」

ガレには信じられなかったから、思い過ごしじゃないかと思ったのだ。

カリスは普通の人間で、しつぽも生えていないし、追われる必要もない。ガレとは比べものにならないほどいい物を着ている。

カリスが言っているほどの苦しみなどあるように思えなかったのだから、甘えてるいるのではないかと――。

「言わなくてもわかるよ」

「じゃあ実際に、言われていないんじゃないか」

「言われなくてもわかるよっ」

「なんだよ、それ」

「事実だもの！」

「はあ？」

もう少して馬鹿みたいだと言いつうになっていた。

でも言わなくてよかったと思った。

僕もみんな嫌いだからいいの、と頑なな前置きをした後でカリスは言っただ。

「みんな、ずっとグルになって僕をだましていたんだ」

欺すのは悪いこと。

カリス一人除け者にされて欺されていたのなら、カリスが家族を嫌いになって家出をしても当然かもしれないと思ったかもしれない。話してくれずひた隠しに隠し続けるカリスの態度に腹を立てていなかったら。

そして、続きの話を聞かなかったなら、ガレは単純にそう決めた

かもしれない。

「お母さまは、病弱でもなんでもなかったんだ！」

でもそのあとカリスから飛びだしてきてしまった内容は、簡単ではなかった。

「だけど僕を産んで死んでしまったんだよ」

カリスは激しく怒っていた。

「その日に、急に。僕を産んですぐ！僕が一歳の時まで生きていたなんて嘘だったんだ。僕を産んで死んだんだよ……それなのに、みんなして欺していた……」

カリスの声は最後には震えて聞き取れないほどに押しつぶされていた。

そうして再び繰り返されたのだ。

みんな僕を欺していた。

大きめな瞳はそのとき、ガレを見ていなかっただろう。

瞬きもなくただ見開かれて虚空を見つめていた。

「……お母さんは、僕が生まれてすぐに死んだのに……欺した、僕を。欺すなんて僕を嫌っている証拠だ……」

小さなつぶやき。

虚空にはガレには目に出来ない痛点があるのだ。

「そんな、……それは違う」

「違わないよ！」

「違うって」

カリスの言っていることは間違っているのだと、なんとか否定したいガレにカリスはさらに強く断言していた。

「そんなの嘘だよ！心の中ではちゃんとそう思っているくせに、みんなそう言うんだ。嘘ばかりだ。そんなはずないよ、みんな僕のこと嫌いなのに、愛してるってお母さまだって言ったわけじゃないのに、みんな、愛しているって嘘を言うっ……だいつ嫌いだった！」

気になっていたカリスの家出の理由を聞きはじめたのは自分、そして今度はガレは、はぐらかされずにちゃんと教えられた。望み通

りで喜んでいいはずだったのに。

だけど今、ガレは聞かなければよかったと思っていた。

叫んだ後、カリスは浅い息を繰り返していた。

カリスは苦しんでいるんだと知ったけれど、じゃあ自分は どうしてやればいいか、ガレにはわからなくてただ突っ立っているしかない。

違うと言っても、聞き入れられない。その他にどうやっていいの
か思いつかなかったから。

笑顔が消えたけれどカリスは泣いてはいなかった。

でもその代わり、ガレが泣きそうだった。

しかし、そんなガレの前で当の本人のカリスはにこっと笑ったの
だ。

「だから、聞いてもつまらない話だって言ったのに。・・・でも大
丈夫だよ。ガレ、そんな顔しないでよ、僕は平気なんだもの。嫌わ
れていても僕もみんなを嫌いだからおあいこだものね！」

ガレには返事が出来なかった。

昼下がりの日差しは明るくて温かだった。

光を弾いてカリスの髪は優しくきらきらと輝いていた。

ガレとカリスと、ソラの物語 4

カリスの小さな頃で、具体的に聞くと生まれて一年ぐらい。カリスが一歳になった頃にカリスのお母さんは神様のところにゆかれたのだと、カリスは家族から聞いていた。

小さすぎてカリスには、母の記憶は残っていないけれど、「わたしの赤ちゃん」といつもカリスを胸に抱いて話しかけていたと、父は話してくれた。

それなのに自分はそのひとのことをなにも覚えていなくて悲しかった。なんとか少しでも顔を、声を思い出せないかと父の部屋の肖像を見つめて過ごしていたものだ。

自分とは違って二人の少し年の離れた姉たちは、よく母のことを覚えていたようだった。カリスが聞くと、いつも弟のために繰り返し話をしてくれた。

「僕もいつしよに遊びに行ったことがあるの？」

「ええ。あるわ。四人でピクニックに行ったことがあるのよ」

「あなたはお母さまのお膝の上だったけれど、楽しそうに笑っていたわ。その様子にお母さまも楽しそうになされて、お歌を歌ってくださったわ」

「そうそう。みんなで歌を歌ったわね」

「嘘！僕は一歳だから歌えないよ」

口を尖らせるカリスに

「あら」

小さい姉が言って、大きい姉を振り返った。

「お姉さま、カリスったらあんなこと言ってる」

すると本を読んでいた姉が顔を上げた。

「あなた、知らないのね。言葉を覚えていないうちの赤ちゃんは、わたし達とは違う赤ちゃんの言葉を口にして歌うのよ」

「・・・へえ。そうなの？」

卑屈になりかけたところだったけれどカリスは知らなかった新事実にはつと明るくなった。

「・・・僕、ぜんぜん知らなかったよ。僕は聞いていただけかと思っただけ。けど赤ちゃんでもお歌を歌えるんだ。だったら、僕もお母さまと一緒に歌を歌っていたんだ！」

残念だなあ。そんな素敵なことさえ覚えていないなんて。思い出せたらいいのに。

壁の大きな絵の優しそうな女の人は、姉たちにそれぞれ似ていた。そしてカリスにも似ていると思った。

みんなもとても似ていると言うのを聞いて、とても嬉しかったのだ。

「お母さまは、あなたのことが大好きだったのよ」

「本当に？」

「信じないの？ 決まってるでしょ」

「わたし達、二人女の子でしょ。だから男の子のあなたが生まれて、お父さまもお母さまもとても嬉しかったのよ」

「わたし達、嫉妬するぐらいね。ほら、わかるでしょ」

うふふと、幼いカリスはそう言われるのが一番好きだった。

お姉さま二人がいて、そのあとに自分。

女の子、女の子で、きつと、次は男の子がいいなと思ったはずだ。そうしてカリスは生まれた。

期待通りの男の子だった。

「小さなあなたをお母さまはぎゅうぎゅうお胸に抱きしめていらしたわ」

「あなたは生まれて、お母さまを独占したの。あなたのベッドはお母さまだったの。ずっと一緒にいて、短い間だったけれどね、その間にあなたはわたし達と同じぐらい深い愛を与えられたのよ」

「そうだよ。カリス」

優しい父の声に、カリスは振り向くと

「私はリリーナを愛しているよ。でも同じぐらいおまえを愛してい

る。リリーナもおまえを愛していたんだよ」

「うん」

「いい子だ」

大きな手がカリスの頭を撫でてくれた。こんな風に母も自分を膝に抱いて慈しんでくれていたのだろうと思った。

「今、お母さんがいなくて寂しいかもしれないけれど、悲しんではいけないよ。そんなことをすれば神様の元で、おまえのお母さんは一緒になって悲しい気分になっていなくてはいけない。なぜって、ずっとおまえの様子を見ているのだから」

「わかってる。大丈夫だよ。僕、あまり寂しくないもの。僕は生まれてお母さまを独占したんだもの。僕より、お父さまやお姉さまの方が寂しい気分だね！」

すると父も姉も、一瞬表情を消していた。

「どうしたの？」

「いいや、なんでもないよ」

笑顔が戻っていたがどこか変な笑顔で、おかしいなとカリスは思ったのだ。

そのわけはそれからしばらくして知ることになった。

すべては作り話だったのだ。

カリスが聞いていた嬉しかった話は全部嘘。

父は、姉たちにもそう言うように言いくるめていたのだろう。

父に従って、姉たちは笑顔で、本当のことのように話をしてくれていた。

自分には記憶はないけれど母と遊んだ楽しい話を聞いた後には、記憶にない母親と遊んでいる光景の夢を見たことも何度があった。

母親の顔は肖像画の顔。

夢でカリスの頭を撫でながら、歌ってくれる歌も姉たちが歌っていた歌だったのだと今ならわかった。

そして、ぎゅうぎゅうと抱きしめる胸の感触は、夢の中でまさに夢見心地の感触は、ただのカリスの想像。

幻想だった。

父よりも柔らかくて、姉たちよりも広い居心地のよい、この世に生まれ落ちたカリスが独占した優しいベッドは、嘘だったのだから。「カリスさまは、リリーナさまに抱きしめられたことはないんだよ。おかわいそうにねえ」

前日、歴史の講師の先生と喧嘩をしてしまったから会いたくなくて、朝からずっと隠れていたのだ。

するとしばらくして、カリスの姿が見えないと気が付いた屋敷の者たちがばたばたと慌ただしく捜し始めた。

でもカリスはじつと隠れていた。その日は午後の歴史の勉強の間までずっと隠れ通すつもりでいたのだから。

一番狭い応接間のソファアの陰だった。そこが一番安全だと考えていた。

何度か人が出入りして捜していったけれど、カリスの思った通り見つけれなかったが、そのとき聞いた。

カリスは隠れていて、聞いてしまったのだ。

古参の使用人の女で、カリスもよく話をして知っているハンナという者だった。

でもカリスと話をするときとは別人のような顔と声だっただろう。「・・・だから、おまえも気をつけるんだよ。余所で話を聞いてもそんな風に口にはいけないからね」

一緒にカリスを探していたのは、新しく屋敷にやってきた若い女で、カリスはまだ話をしたことはなかった。

「だってどうしても聞いていた話とくいちがつてくるから気になって気になってしょうがなかったから・・・」

そうだったのか、と若い女は納得してでもその後、難しい顔になっていた。

カリスは首を傾げていた。どうやら自分の話をされているのだけど、カリスは納得がゆかなかったから。

「でも嘘は嘘だわ。よくないと思うな。そう言う隠し事って無理よ。」

いつかは坊つちやまにだつてバレてしまふと思うし」

「ええ……。そうだね、子どもはああ見えて敏感なもんだからねえ。案外、もう気が付いていらつしやるかもしれないけれど……。でもそれは私たちが悩むことではないでしょうよ」

「それって、どういう話!?」

カリスは自分から飛びだしていた。

「カリスさまっ……」

捜していたはずのカリスの姿に、二人の女たちは顔色を無くしていた。

それほど重大なことなのだとカリスは思った。

ハンナは、もう自分は知っているかもしれないと言ったことなのにカリスは何も気が付いていなかった。だから聞いていてもよくわからなかったから。

「いったい、なにの話をしているの？僕は、なにも気が付いていないよ？くわしく教えてよ、お母さまが僕を抱きしめていないってどうして!？」

二人にもつと聞きたくてせがんでいたけど話してくれなかった。

でも諦めずに追いかけていたら、執事のブラウニーがやってきて二人をカリスの前から連れて行ってしまった。

父が戻っていらつしやるのを待つようと、ブラウニーは厳しい命令じゃなく、丁寧をお願いされたからカリスは夜まで待っていた。歴史の先生とは隠れてはいなくても、この日会わずにすんだ。

カリスはひたすら、父が帰ってくるのを屋敷の入り口に座って待っていたのだ。

誰も何も、教えてくれないから。

姉たちもだ。

きつと知っているのだと思った。なぜなら聞くと揃って難しい顔をしたのだから。カリスの知らなかったことだけど、カリス以外の者はみんな知っていたのだ。

「お母さまは僕を抱きしめていないの？」

その答えは、長い長い言い訳があり、はっきりとしない聞いていない内容も続いてわかりにくくされていたけど、簡単にすると『はい』だった。

隠れていてこっそり聞いてしまった話は本当で、カリスが母の膝の上で一緒に歌を歌ったというものが嘘だったのだ。

なかなか思うような話が聞けなくて腹立たしいときに、口火を切ってくれたのは皮肉にも母だった。

カリスは一人で屋敷を抜け出してお墓に行ってみると、墓碑に亡くなられた日付が記してあったのだ。

それはカリスが生まれた日だった。

難産だったという。

ようやく産みの苦しみから解放されて、母は元気な産声を聞いた微笑んでいた――というけど、それも嘘かもしれない。カリスは母親の顔さえ覚えていないのだから。

男の子だと立ち会った屋敷の主治医は喜びの声をあげた。

父に報告が走る。

そのなかで母は目を閉じたのだ。

そのまま二度と瞳は開かれなかった。

それが、カリスが用心深く自分でも動いて調べて、突き止めた本当の話だった。

「人を欺すのはいけないことだっただけ僕に言っていたのに、自分たちは僕をずっと嘘を言っただけ欺し続けていたんだよ」

ほんとに酷いよね、とカリスは笑っていた。

「ガレもそう思うでしょ。最低だよ。お母さまは僕が生まれたときに死んでしまったのに、嘘を言っただけ。僕を抱きしめたんだとか、

『愛している』とか言っただけかも全部、嘘なの」

くすくすと、まるで面白いことがそこにはあるかのようにいつもの優しい、女みたいとガレに思わせるきれいな笑顔だった。

「嘘はついちゃいけないのに」

「・・・だけど、嘘かもしれないけど、それは・・・」

「それは“なに”だと言うつもり？良い嘘と、悪い嘘があつて僕を欺っていたのは良い嘘で、僕が駄目だつて言うつもり？」

笑顔がぱつと崩れて、きつい目がガレを睨んでいた。

「みんなは間違つていなくて、僕が悪いって言うの？僕が、悪い・・・どうして？良い嘘なのに怒っているから悪いの？お礼を言うべきなの、みんなに嘘をありがとうって？」

カリスは質問形式でガレにすべて尋ねていた。

でもどれ一つ、ガレには返事ができないことばかりだった。

良い嘘と悪い嘘。

その通りだと思っていた。

人を幸せにする嘘と、不幸せにする嘘があり全部、嘘だから悪いとは言えないはずだった。

だけど、それをカリスに向かって言うことはできなかった。

それを幸せにする良い嘘なら、カリスの現実が不幸せだと言っているようなものだった。そんなことを言えば、きっとカリスは怒り出すだろう。

そしてたぶん、カリスもそれをわかっていて言っているのだ。

悪い嘘ではないと。

わかっている上で、怒っているのだ。

悪い嘘ではなかうと嘘をつかれていたことに。

欺されていたことに。

・・・でも。

それだけ、だろうか？

ふと浮かんだことだった。

考えてしまったガレは、急に怖くなって考えるのをやめたのだ。

「・・・欺されていたってわかって・・・いつまでも根に持っているのは、駄目だと思う・・・子ども、だよ・・・そんなの・・・許してやらないと・・・」

ガレはしどろもどろになりながら、なんとかそんな言葉を見つけたのだ。

思っていることと違う気がしたが、いいのだ。
触れちゃいけないことだから、ずらさないといけないから。
すると。

「うん、そうだよね」

カリスは再び笑顔になっていた。

「でも駄目。僕、子どもだから許せないの。みんなだいつ嫌い。許さないの。しかたがないよ、僕はガレより背も低いし、子どもだもの！」

うふふふと、面白くてたまらないように笑う。

ガレにはちつとも面白くない。全く笑えなかった。

笑える話じゃないはずだ。カリス本人にだって。

カリスが生まれて、すぐお母さんが死んだのだ。

シヨツクな話のはずだ。

『死ぬなんてことは気安く言わないで』

そう言っただけで急に怒り出したカリスだったはずじゃないか。不謹慎なガレの冗談を、嫌がっていた。

じゃあ、お母さんの死だって笑えないはずなのだ。

でも笑っているカリス。

笑って許さないと訴えているのは、嘘をつかれていたという点だった。

もつと衝撃なことのはずのそつちのことにはあまり触れない、避けているように。

痛々しくてガレには直視できないことをカリスも、避けているのだと思った。

「ねえ、ガレ！」

「・・・なに・・・」

ガレの声は怖じ気付いたものだった。

「そろそろ行こうよ。ゾラおじさんが待っているよ」

「・・・あいつ、おじさんと言われるの嫌っているよ・・・」

「でも、おじさんだよ。ガレにとってお兄さんって感じるの?」
しかめっ面になったカリスにガレもつられるように顔を歪めていた。

「俺は、お兄さんって思わなくても、ああいうタイプには、お兄さんって言うよ」

「わっ、ガレ、卑屈。それ、恥ずかしいよ・・・男らしくない・・・」

「なっ、賢いって言ってくれっ」

沽券に関わることをしみじみと嘆かれたガレは息巻いて見せた。
子ども子ども、とカリスがガレを囁し立てて、空気は元に戻ったような感じになっていた。

明るい軽口で、何も聞いていなかったときのように、楽しいものに。

「行こうか」

「うん」

頷きあった二人はゾラと荷物が待っている場所に向かって駈けた。
した。

それで元通り。

戻るわけではない。戻ったかどうかだったではないのだ。

戻って欲しいというのがガレの希望だったのだ。

「待つてよっ、ガレ! 歩くの速すぎだよっ!」

「ああ、ごめん・・・」

「ごめんじゃないよ、もうっ」

小走りになつて必死に歩いてきたカリスが何度目かの苦情だった。

「さつきから、こんなのばかりだよ、すぐに速くなるんだから」

「ちよつと考え事しててぼんやりしていたから・・・悪い」

ぼんやりとしているという言葉通り、どこかうわの空の謝罪だった。

た。

「ぼんやり考え事なら、ゆっくりになってもいいと思うのにガレの場合、早足になるんだもの！信じられないよっ」

カリスは細い眉を吊り上げてガレを睨んでいる。

家族をだいつ嫌いと言っていたときのように、口答えもできないほど激しくではなかったが、何度も追いつけずに音を上げさせられ、待つてと言わなくてはならなかったことにカリスは、そこそこに腹を立てているようだった。

ぶつぶつと文句を続けるカリスだったが、その横でガレの心は冷めていた。

冷たい風が吹き回っていた。他でもないカリスのせいだった。

カリスの話を聞いてから、気分が晴れなくなっていて沈み込み、ついつい回りを忘れて歩いてしまう。自分のペースで、だ。

「・・・おまえが遅いんだよ・・・」

「むかつ」

「俺はただ普通に歩いているだけだ」

カリスの明るい茶化すようなしゃべりが、なんだか馬鹿にされているような気分になっていた。

激しい一面を見せて圧倒された後にはカリスのこんな明るさが空々しいと思ってしまう。

「なんだよ、文句があるのか？」

「いいや。ぜんぜん、ないよ。これっぽっちも文句なんてない。好きだけぼんやり歩いていればいいよ！」

つんとそっぽを向く愛らしい横顔はとても憎らしいものだった。

「なんだとっ！」

「そっちこそ、なんだ、その態度は！」

「喧嘩売っているのか!？」

「売っているのはそっちじゃないか、やれるもんならやってみる！」

勇ましく拳を握ってファイティングポーズを構えて見せるカリスに空気は一触即発の険悪なものに変わった。

それまで視界の下の方で繰り広げられる寸劇を黙って見守っていたが、これ以上無視していられなくなったのがゾラだった。

「おいおい。なにやってるんだ・・・見てられんぞ・・・」

「じゃあ、見てなきゃいいっ！」

すかさずカリスが介入に噛みついたが、倍ほどの歳のさすがに背丈は倍はないが、大男には通じなかった。

「おまえな。気が強いのはいいが、相手見て喧嘩売れよ。勝てんだろっ？」

「わからないよ、やってみなきゃ！」

「いや、わかるはずだぞ。そもそもおまえと、こいつでは・・・」
こいつとは、勿論、ガレだ。

顎でしゃくられて、そもそもなどと言われたガレも不機嫌な顔をゾラに向けていた。

しかし途中で不自然にゾラの説教は途切れてしまった。

二人の少年に分けて入ったゾラは、二人からそれぞれ胡散臭げだとばかりに凝視されて、ははははは、と笑っていた。

「・・・歳かな。何言っつもりだったか一瞬で忘れちゃったみたいだ」

がしがしと頭を掻いたゾラだ。

「嫌だなあ。ゾラお兄さんったらっ。気にしないでいいよ。だって僕、最初からちゃんと知ってるもの、そんなことは！」

すると途端ににこやかになったカリスが一見優しいそうだが棘にまみれる言葉を吐いた。

「なんだと、こら、チビ」

「チビでもいいもん。これから成長するもんね！するとゾラお兄さんもどんどん成長していくんだよね、ぶぶぶ」

「糞餓鬼っ」

逃げる子どもに大人げなく剥きになって腕を伸ばす大人という微笑ましい光景に、和むことなくガレはふっと前を向いて歩き出してしまう。

「ガレっ・・・」

すぐに気がついたカリスが足を止めて自分に向けられる背中に寂しげな目で見つめた。

「いじめっ子め。あいつもいびつたのか？」

「変なこと言うな！」

腹立たしいゾラを睨み付けて、けれど勢いは少し弱かった。

「・・・言いたくなかったのに。・・・だけど、ガレが聞きたがるから話したのに・・・」

「秘密を話してみたら、引かれたのか？」

「・・・違うよ。ただ少し驚いただけだよ、きつと！」

見上げる大きな瞳はうつすらと潤んでいた。

「油断大敵だねえ、捕まえた！」

「なにっ！」

「俺は口の悪い餓鬼を懲らしめてやるために捕まえる途中、だったはずだぞ」

「わあ、離せ、離せよ、馬鹿、変態、オヤジいつ！」

きゃあきゃあ、騒ぐカリスの腕を掴み取ったゾラは次いでカリスの胸に両腕を伸ばした。

「オヤジおやじ、降ろせ、降ろせよっ！」

拳骨で頭といわず肩、胸も腹も担ぎ上げられたカリスは蹴飛ばしていたが一切を無視でびくともしない頑丈な男は太股で、先を進むガレとの距離を詰めたのだ。

「こいつの秘密を聞いたのか？」

心がいつぱいいつぱいどうしていいかわからないガレは、大問題を軽口にしよとする巫山戯た男に不快感を剥き出しにしていた。「うるさいな、なんだよ。あんたには関係ないだろ」

「ああ、関係ないけど。せっかくだからもう一個、おまえの知らないことを教えてやろうかなあと思ってなあ」

肩の上で荷物のように運ばれるカリスは逃れようと暴れていたが、お構いなしの会話だった。

にまつくゾラの表情が、ガレの気分を逆撫でる。

「なんだよ、知らないことって・・・」

「まめ」

「マメ？」

「肉刺だよ、足の裏や掌にできる。知らないか？」

「そのぐらい俺だって知ってるよっ。だから肉刺がなんだって・・・」

「

「潰れちまって血が出てるよなあ。匂いがぶんぶんする。おまえは嗅覚鈍いのか？」

なじるわけではなく確認のように首を傾げるゾラに、はっとガレは目を向けた。

ゾラの肩でゾラの頭を最高に不機嫌な表情にぼかばかと殴っているカリスだった。

「いいかげん離せよ、馬鹿親爺っ！」

カリスの抵抗はゾラが肉刺の話をしてから一層激しくなっていた。
「カリス！」

ガレに名前を呼ばれてびくつと身体が一瞬止まったようだった。

「おまえ、足見せる！」

「嫌だよ、そんなの、なんで・・・うわあっ」

悲鳴に変わったのは乱暴に身体が強く引っぱられてゾラの肩の高みからずり落ちそうになったからだ。

「ガレっ、なにするんだっ・・・」

腕を伸ばしたガレにカリスの身体は危なげなく受け取られていた。いくらか小柄ととっても猫耳やしっぽのある獣人であるガレは楽々とカリスの体重を支えて、そして地面に座らせていた。

「嫌だ！」

「嫌じゃない、靴脱いで足見せるっ！」

「嫌だね、なんでだよ、ガレはゾラのおんな言葉を鵜呑みにして信じたの？そんなの馬鹿・・・嫌だってっ！！」

必死に足をばたつかせ、ガレを追い払おうとしていたが足はすで

に掴まっている。ガレの方が力が強くて振り払えずに、ブーツの紐が弛められていく。

「ガレっ、やめて、怒るよっ！」

「馬鹿、俺が怒りたいっ！ど阿呆！なんだよ、これはっ！！」

怒りに猫のように背中が膨れあがったように見えるガレに、足を取られたままのカリスは仏頂面でそっぽを向いた。

「なにつて・・・肉刺だよ。見てわからないの？」

「こっち向けよ、そう言うことじゃない・・・ってわかっていて言っているんだよな、おまえは！」

「僕にはどういう意味かぜんぜんわからないね」

ガレの激しい剣幕を浴びながらも、カリスは怖じ気付くことなくさらに油を注ぐありさまに顎をつんと上げたのだ。

またしてもまとともに答えようとしないカリスに、ガレは息を呑んで唸っていた。

けれど、それでは埒があかないと深呼吸をして気を静めてから、感情を抑えた丁寧な言葉を紡いだ。

「おまえ・・・こんなになるまで、どうして言わないんだよ」

「・・・べつに・・・わざわざ言うほどのことでもないよ・・・」

「おまえ、痛くないのかよ。鈍いのか？」

「うん、あまり痛くないよ・・・」

「鈍いのはおまえだろうよ」

ゾラだ。

「あんな、もたもた歩いているのに痛くないのかと聞くか、普通」

「二人で話しているのに入ってくるな！」

すぐにカリスは反応したけれど、ガレはしばらくの沈黙を必要とした。

「あんたは気が付いていたのかよ」

「まあね。血の臭いがするけどなんだろうねえと、ね」

「臭いなどそんなにしないよ、嘘をつくな！」

「・・・気づかなかったよ、俺・・・」

「ガレが普通だよ、こいつがおかしいんだよ、気にしなくてもっ――」

「だから、おまえは鈍いんだって。まあ、使わない機能なんて鋭くもならないしどんどん鈍ってゆくもんだろうけど」

話の中心だろうに、二人に黙殺されるカリスは不機嫌が募ってゆく。

「二人とも最低」

それきりむつりと押し黙った。

無視されてしまうので、カリスの方でも二人の話など聞こえていないように無視してやろうと思ったのだけど、ガレとゾラの話もそれで途切れてしまっていた。

「・・・だからさ。すました顔してるけど、おまえなんだよ、原因はっ！」

いきなり話を持ってこられたカリスは、腕を掴まれているガレに少々乱暴に揺さぶられた。

「僕は！そんな、こんなの平気なんだって言ってる！」

「平気なわけないだろ！」

「平気だよ！」

人通りのない山道をいいことに道の真ん中に座り込んでまた、意味のない押し問答を始めてしまったガレとカリスに、ゾラはため息だった。

まあゆっくりやってくれ。

呟いた男も諦めたように少し離れたところに腰を下ろしてしまっ

た。二人に背中を向けているのはいくらかの心遣いだろうか。

「潰れてこんな風に血が出ているのに平気じゃないっていても通じない。足だつて赤く腫れてるじゃないかっ」

ブーツを脱がされ血色に染まっていた靴下も両方とも地面に放り出されている。指先も足の裏も踵も擦れて無理をしすぎた肌は熱を持ち、水ぶくれもある。今まで見たこともないほど悲惨なありさま

だった。

「い、痛いよっ！」

悔しさについ指に力が入りすぎたガレに、はじめてカリスの苦痛の声だった。

「ごめん……。おまえ、爪が剥がれかけてる……」

目にしたガレも悲鳴をあげていた。

「……なんで、さ、一事、言わないんだよ……」

悲しくて腹が立つてくるだろう。

「俺には言っても無駄だとか、思っていたわけ。言っても聞かない奴だとか、そういうことかよ……」

「違うよ……」

「じゃあ、なんだよ、わかるように言ってみるよっ」

「だから……これくらい平気。まだ歩けたもの……。だいぶん楽になつてきていたし……」

「“だいぶん楽に”じゃない！どうしてその辛いときに言わなかったんだよっ」

激情にうつすらと緑色の瞳に涙を浮かべて怒るガレに、カリスもしょんぼりと肩を落としていた。

「……だつて」

「……だつて、なんだよ……」

「平気だったんだもの、これくらい、ほんとに……」

「まだ言うか！」

「だつて……こんなの見せたらガレは置いて行こうと考えるよ。」

ただでさえ、とろいとか思っているでしょ……。置いていこうと思いだすはずだよ。そうなるよりずっと平気だよ……」

ぼそぼそと説明したあと、カリスはぱつと顔を上げて力説だった。「言っておくけどね。これくらいぜんぜん、何ともないんだよ。まだ歩けるからね、普通に！だから、ここに残して別行動しようなんてことは」

「言わないよ」

聞き取れないほど低くガレは即答に答えた。

「本当だよな？」

「本当だよ」

「よかった・・・」

カリスが嬉しそうに微笑んでいた。まさに花が開くようなそんなきれいでうつとりと見とれるような優しい笑顔。

だけど、ちらりと見ただけでガレは不機嫌な空気のまま鞆の中を探り始めた。怪我の薬を取り出すためだった。

「ガレ・・・怒っているの？」

「怒っていないよ」

「嘘だ、怒ってるよ・・・」

「・・・ああそうかも。怒ってるかもしれないな・・・」

「ガレの薬、減っちゃったものね・・・。今度街に着いたら買って返すから・・・」

「そんなことじゃないよ！」

どうしてカリスはこんななのだろう、ガレは思わず声を荒げていた。

「・・・じゃあ、どういうこと。早く進めないから怒っているの？」

悲しそうに言うカリスに、更にガレの声は大きくなってしまった。

「違うよ！・・・俺にもよくわからないけど、凄く腹が立っているんだ！」

「・・・ごめん。だけど、これだけは。僕、薬も塗ってもらったしもうちゃんと歩けるから安心してよ」

ガレは息を呑む。怒鳴りそうになるのを抑えるためだった。

歩けるわけなんかないと思った。

しばらくまともに歩けないだろう。

だから、ぐずぐずすることになって自分は腹が立っているのか？自問が浮かんだが、すぐに否定だった。そういうわけではないの

だ。

本当に、カリスを足を引っばるから置いてゆこうなんてガレは思っ
てはいなかった。

そうじゃなくて。

もどかしい気持ちに追い立てられて、無言に立ち上がったガレを
まだ地面に座ったままのカリスが不安そうに見上げていた。

「・・・俺には話せないか？ーだからか？」

大きな溝があるのかと、聞きたかったのだ。

ゾラがいるため、ガレが口を動かすだけにとどめた部分は、“猫”
であり、音にされなくても正確に理解したカリスは、ううんと首
を横に振っていた。

「違うよ」

だけどその後に、でも、と続いた。

「それもあるかもしれないね。だってガレは僕のことなんて最初か
らあまり好きじゃないでしょ。僕が無理矢理くっついてきただけだ
ものね」

作り物の笑顔の間にそつと覗いた素朴な色だったのかもしれない。
カリスは無表情になると小さく囁くように言った。

「・・・知られたら置いてちゃうかもしれないものね・・・」

「そんなこと、しないよ」

ガレは考えての返事だった。

よく考えても、他の考えなどないと思ったから。

「ほんとに？」

「ほんとだよ」

嬉しそうに笑顔を見せたカリスに、ガレも照れくさそうにしながら
口元を綻ばせていた。

家出の理由を聞いて驚いて動揺してしまっていたが、それでもカ
リスが心配しているようなことは、ガレは欠片も考えてもいなかった
のだから。

そしてカリスも、猫・獣人だからとガレを嫌う様子はまったくな

いのだと気づいたから。

「・・・なんだあ。・・・ずっと我慢していたのに損しちゃった・・・」

カリスが言つて、ガレは、ははん、と笑っていた。

「やっぱり痛かったくせに、やせ我慢してらあ」

和解だった。

緊張感の末に、空気は和らいだ。それだけでなくもっと温かみを持っていただろう。

少年二人が、己の取っていた態度に照れて、恥ずかしそうに顔を背けあっていた。

そのなかでむくりと動きをみせたのか、ゾラだった。

「ー」ということで、話も一段落したところで行くか」

きやあ、と悲鳴をあげたのはカリスだった。

小柄な身体がむんずと後ろから捕まえて、ひょいと持ち上げられたのだ。

「なにするんだよ!」

「嫌なら、ガレ坊におんぶして貰うか?」

「べつに俺なら構わないけど・・・」

「それは絶対に、嫌だ!僕は歩けるよ!」

カリスにも誇りがある。さらに背格好のあまり変わらないガレに道中をずっと負ぶさしてもらうなんて考えられなかった。しかしするとガレが言う。

「それは無理。俺がさせられないからな」

笑顔だったはずのガレが再び不機嫌になって、即座にカリスに宣言した。

ガレは今回、折れなかった。

だから、しぶしぶ、だった。

カリスはゾラの首に腕を回してしがみつくことに甘んじることになる。

「だから・・・ちゃんとまだ歩けるのに・・・」

ぶつぶつ文句を言うのにも飽きた頃、ガレの機嫌もカリスの気分もすっかり回復していた。

平気だと言い張っていたけれど、痛みを知られないようにしないといけないという緊張感から解放されたカリスは、ゾラの背中の中のかさを感じていた。

青い空と、白く続く道。

ガレと、ゾラと、穏やかにゾラの背中で笑っているカリス。ずっと続けばいいと思った。

ガレに訪れたとても穏やかな時間になった。

ガレとカリスと、ゾラの物語 5

「ゾラのお兄さん・・・」

言って、うふふとカリスが意味ありげに可愛らしげに、笑いだしたのだ。

それまでのとりとめのない話題も尽きてしばらく黙っていたカリスが、何事かを見つけてしゃべり出したと思いきや、ゾラのことを“おじさん”ではなくこんな風に言っただけだ。

呼ばれた本人以上にその猫なで声に警戒したのは密かにガレの方だったかもしれない。

その後いつたい何が続くのだろうかとドキドキしながら横目で、隣を歩く黒い出で立ちの男とその背中に収まる青い上着の少年いう二人の様子をうかがっていた。

「お兄さん、僕、凄いの見つけちゃったよ！」

「なんだ、こら、てめえ。言いたいことがあるならさっさとええ」

ガラも悪くドスを聞かせたゾラは言うど、カリスは素直に頷いたのだ。

「うん、なら言うね」

ガレの心臓はとても高鳴っている。カリスは果たしてどんなことを言い出すのか。

「ゾラお兄さん、禿げてるんだね！」

「はあ、ハゲ？」

思わず口に出して驚いてしまったガレは一瞥を送られ慌てて視線を逸らした。

「禿ができてるよ。あ、二カ所もだ。お兄さんったらこれだとなんだか“おじさん”みたいだよな」

鬼の首を取ったようなカリスなのだと、ガレには断言できた。

知ってしまったカリスはこれから先、さぞかし心配している風に装いながらちくちくと脅かしていくのだろう。

しかし、展開はガレの予想と少し違ったものになっていた。

「・・・ああ、情けないなあ」

一つ大きなため息と共に嘆いてみせたゾラだった。

文句を言うではなくて、身構えていた二人の子どもはおやつと思っただろう。

要するに。ゾラはやはりカリスより上手だということだった。

「こういうとき、大人の知性を持つ者なら決して口に出すことはないだろうが、子どもは馬鹿だから。馬鹿で考え無しで無神経だから！ひとのハゲ見つけたぐらいで得意になるんだからな。ああ、本当に嫌だ嫌だ子どもは、恥ずかしくてっ！」

ゾラの態度も結構大人げないものだとかガレに思わせたが、カリスは反撃には走らずそれきり、ぶつっと口を閉ざしてしまった。

休憩になるまで一言も口をきかなくてガレはとても退屈だったのだ。

「ねえ、ガレ・・・」

ハゲ騒動の後、重たくなってしまった口をやっと開いたカリスだった。

「なんだよ」

それだけでなんだか嬉しく感じるガレの声は少し弾んでいたが、カリスはまだ沈み込んだままのようだった。

「・・・ハゲが、ね・・・」

ゾラのハゲに囚われてしまっているようだった。

「ああ、せっかくいい具合に証拠を見つけれられたのに残念だったよな。あんなふう子どもって決めつけられた言い方されちゃうともうハゲポイントはすっぱり諦めた方がいいだろうな・・・」

他の攻撃が跳ね返ってこないところを探した方がいいかも、と言うおうとしたガレを遮るように、違う、と首が横に振られていた。

夕方になり、野営の準備に入って二人で焚き火に使う枝を雑木林

に探している最中だった。ずっと背中にしたのでもう大丈夫と言うカリスに負けて、ガレとカリスは二人で探していた。

ゾラは水を汲みに行き、戻って夕食の準備をしているところだろう。

「あのね。ゾラね、ハゲが・・・右側と左側にあつたんだよ。普段髪で隠れていて見えなかったけど」

今まで知らなかったけれど、今日足を怪我でおんぶされて間近に頭を見ることになってはじめてカリスは気が付いたのだ。

カリスの話に、若そうなのにハゲてるのかとしんみり思ったもののガレにとってもゾラの頭は見下ろせる位置ではないので目にすることはできなかった。

「・・・へえ。二カ所つても派手だよな」

神経質そうな表情になっっているカリスに、ガレは正直よくわからなかった。

「だけどそんなに心配しなくても・・・うつるもんじゃないし、年とってみんな禿げるってわけじゃないよ、だから」

などと言いながら、ふと気が付いた。このところ妙に自分たちはハゲに縁があるのだ。

ガレの黒狐の帽子の下にも恥ずかしくて見せられないハゲがあることになっているのだから。

ハゲを隠すために貰ったガレの黒い帽子は、本当はハゲではなく二つの黒い猫耳をニンゲンに見られないようにするためのものだけだ。

嘘も方便のガレとは違って、ゾラには本当にハゲがあるわけだけど、によきつと突き出る耳ではなく生えていないハゲは、考え方を変えたときマシじゃないかとガレは思った。

猫耳がバレたとき身の危険に陥るけど、ハゲでは迫害はないはずだ。

「そんなハゲを気を病むなんて変だよ」
ところがカリスは激しく首を振った。

「違うもん！そもそも、僕の家系だとハゲじゃなく白髪になる方だよっ！そういうことじゃなくってっ」

「じゃあ、なに？」

もどかしそうに上目使いでなにかを訴えられているが、はつきりいつてくれないのでガレだってもどかしい。

「だから、ね・・・」

「だから？」

「・・・だから・・・。ガレはその、なんにも感じないの？」

「なにを？」

「ゾラについてだよ、ゾラについてなにか・・・」

「若ハゲ？可哀想だとは思っけど」

「もうっ・・・もう、いいよっ！」

「なにそれ？」

短気を起こして怒り出すカリスに、もう少しだけ気は長いと自覚するガレは首を捻るしかない。

「言ってくれないと、わからないって」

すると、うーん、とカリスはしばらく唸っていた。

「もう、いいよ。だって自分でもよくわからなくて上手く言えないことだし・・・それにこんなの僕の考えすぎだって笑われそうないとだから・・・」

「・・・なら、いいけど」

引っかかりが残っていたけど、二人の両腕いっぱい薪になる木の枝は集まったのでゾラが待つ今夜の野営地に戻ることにした。

空は夕焼けを通りこして藍色に暗くなりはじめていた。

獣人であり、夜目も効くガレだからこれまではあまり気にする必要のないことだったけれど、今は違うのだ。

ガレの共にカリスがいる。

ただのニンゲンのカリスはガレと同じにはならない。

このくらいで足に肉刺ができて、潰れて血が出るなんてガレには信じられない脆弱さけれど、焚き木採りは自分がやるから座ってい

るよと言っても聞かない意地っ張りさ。

ガレは用心深くなるうとしていた。

ゾラに言われて注意深く臭いを探って、革靴の臭いに混じる血も感じ取ることをしていた。

そのガレの前で、カリスはなにか考え事をしながらそぞろ歩きをしていて、ガレは気が気でもなかったのだ。

夜になりカリスにはあたりは見通せない。足は怪我をしている。足下には木の根や、石がゴロゴロしているというのに。

「カリス・・・ちゃんと真面目に歩けよ？」

「変なの。真面目に歩いているじゃん。逆立ちなんてしけないよ」

「逆立ちっ！おまえ、できるのかよ、そんなこと」

「できるよ！数歩だけど、ちゃんとできるよ、失礼だよ、ガレったら！」

「数歩なんて歩いてるに入らない、倒れるまでにふらついているだけじゃん」

「む。かなり失礼、じゃあガレはどれだけできるって言うんだよ」

「ははん。飽きるまでだ」

身のこなしには自信があるし、体力も同族の同世代で比べたとき優れていると自負するガレは胸を張っていた。

傲慢ができることはいいことだった。

良い服を着ていて、良い生まれのカリスに無意識に劣等感を持っていたのかもしれない。ガレに自信を持って誇れることは、こういうことだったから。

「俺は早く走れるし、長く走れる。垂直の崖もすいすい登るぞ、手も足も肉刺はできないぞ」

「・・・ガレ」

嫌なかんじ、と言ってカリスはそっぽを向いたが、すぐにまたガレの方を向いていた。それほど嫌な感じだとは思っていない証拠だった。

だから、ガレは続いていた。

「でもおまえは、別にいいじゃん。ニンゲンだし。肉刺ができたってゾラが、ゾラがいなくなったら俺が支えてやるし。気にすること無いんだ。俺は体はまだ小さいけどさ、おまえぐらい背負って歩けるんだよ。だから我慢してないで、こんどこんな風になったときはすぐ言えよ、いいな？」

ガレはカリスを振り返りながら後ろ向きで歩いている。言い聞かせたかったから、もう自分の前で無意味な我慢などカリスがしないように。

弱くて脆いくせに強がつてみせるカリスは自分が守らないといけないのだと強く思っているガレはここが大事な踏ん張りどころだと、言葉を重ねた。

「おまえ、ニンゲンなんだし獣人の俺に頼ったってぜんぜん恥ずかしくないんだから」

「わっ」っとカリスが悲鳴をあげた。

「危ないっ」

はっと思ったときには、ガレはバランスを崩していた。

地面があると思っていたところに踵を置いてしまったガレは慌てて腕をばたつかせたが掴まるところはなく、落とし穴のようにくぼんだ穴に後ろ向きに落ち込むことになったのだ。

たぶん、それだけでは問題はなかっただろうと思った。

だけどカリスがいて、優しいカリスが支えようとガレの身体に腕を伸ばして、でも自分も不安定で一緒になってなだれ込んでしまった。

穴にはまったガレの上に。

「い、痛ててっ……」

「……ガレ、大丈夫……？」

呻いたガレから慌てて離れたカリスが心配そうに窺っていた。

「どうしたの……？」

「信じられねえ……」

呆然と呟いたガレに、どうしたのかとカリスは顔色を変えていた。

「足を・・・挫いた・・・」

「・・・ねんざ・・・？」

一瞬生まれた沈黙はどういう意味だったのか。

ガレは慌ててカリスに言った。

「た、たいしたことねえよ！」

「本当に？」

カリスの性格はこういうところにかいま見ることができるのだ。

言葉を疑ったカリスは即座に動かされないで地面に置かればなしになっているガレの足を手にとつてぐいと足首を動かしたのだ。

「うぎいいいいつ」とカエルの潰れたような悲鳴がガレの口から飛びだしていた。転んだ上にカリスの体重が乗っかってしまつて強くな変な方向に捻つてしまつた足首に、加えられたカリスの暴力

愛情？

そんなことをされるなんて思つていなかったガレの目には涙が滲んでしまつたけれどカリスは

「ほら。嘘は駄目だよ、ガレったら、もうっ！」

ガレは、ゾラに気づかれないうなるだけ平気なふりで歩いた。

旅慣れている男に、転んで足首を捻つてねんざして、痛いなどと自分は許されないだろう。カリスの状態に気づかなかつたことだけでも呆れた目を向けられているのに、そのうえこんなことがバレると思ひ切り馬鹿にされるに決まつている。

ガレのプライドに関わることでないので必死だった。

足を置くとたびに痛みは走つたけれど、まあそれほど酷くもない。

ましてカリスのペースに合わせて歩くぐらいことだから普通にこなせるはずと考えたけれど、とても甘かつた。

「ガレ転んで、ねんざしたの！」

カリスはゾラの背で歩かないなどという話でなく、もっと単純に、カリスがゾラの待つ場所に着くやいなや、明るく暴露してくれたの

だから。

ガレはカリスに文句を言う余裕無く青ざめていた。聞いたゾラは、頬を引きつらせたガレを見てため息を吐いていた。そして再びカリスに顔を向けると、にかつと笑っていた。

「良かったなあ。負傷者が二人になって仲間ができたわけで嬉しいんだな！」

「うん！」

満面の笑顔で答えたカリスに、そういうことなのかとガレは複雑な気分になった。

その複雑さが祟ったわけでもないだろうに、その後ガレの具合はどんどん悪くなって、ゾラが作った夕ご飯を食べ終わった頃には身体を起こしているのが辛くなったほどだった。

「どうしたの？」

「・・・いや、べつに。ただちょっとだるい・・・」

「ねんざしたせい？」

「そんなことはないと思うけど・・・。なんか、寒気もする・・・」

「大変だ、足首から悪い菌が入ったんじゃないの!？」

半日ゾラの背中中、歩いていなくて疲れていないことに理由があるのだろう。食べてすぐ、眠り出さないカリスのかわりにガレがずるずると地面に横になってしまった。

「大変だよ、お医者さんに診せないと・・・」

とまで言ったが、ガレを気安く街の医者に見せられないと気が付いたカリスが、どうしようと思えば顔になつていた。

その横にしゃがみ込んだゾラが、ひよいと腕を伸ばしてガレの額に掌を当てていた。

「熱。鼻水も出ているようだし、おおかた風邪でもひいたんじゃないのか。普通な、足首から悪い菌と騒ぐ前に考えることじゃないのかね？」

「風邪？」

驚いたように繰り返したカリスはすぐさま同じようにガレの額に

触って、大きな声をあげた。

「わあ、本当だ、熱いよ、ガレ。熱があるよ！」

「・・・そんなはずない、俺、丈夫なのに」

「丈夫だと赤い顔をして口を尖らしても意味はねえな。まったく。そっちもこっちもお子様にはお兄さまは困っちゃうね」

「・・・」

呆れた口調のゾラに、ガレは小さく謝っていたがカリスはとても楽しくてしかたないと上機嫌だった。

「頭を冷やさないとね」

「こら待て」

首に巻いていたチーフを外して、そそくさと立ち上がったカリスをゾラが引き留めていた。

「どこいくつもりだ？」

「だから。小川に行つて水で濡らしてくるんだよ。ガレの熱、冷やさないと」

「暗くて見えないだろうが。危なっかしい。おまえもすっころぶのがオチだろ」

「でも・・・」

恨めしそうに言うカリスに、どっこらしよと腰を上げたゾラがカリスの手の中にあるチーフを取り上げた。

「大人しく待つてることぐらいはできるな？火があるから滅多なことにならないと思うが、そのくらいは動けるな？」

前半部分はカリスに、後半はガレに向けて言い二人はそれぞれ頷いていた。

黒い衣服を着るゾラの姿はすぐに木立の奥の闇にとけ込んでゆき見えなくなった。

カリスの横に再び腰を下ろしたカリスが、大丈夫、とガレの顔色を窺っていた。

「大丈夫だよ、こんなの。大げさなんだから・・・」

「おでこも、ほっぺもとても熱いよ」

遠慮無くカリスの細い指が自分の肌を触っていて、ガレは少し緊張したがあまりに普通なカリスの態度に身体にこもっていた力は抜けていった。

「おまえ。ほんとぜんぜん、気にしないんだな」
「なにを？」

めくれていた毛布をきちんとガレの身体の上に広げ直していたカリスは不思議そうにガレに灰青の瞳を戻した。

ゾラは今、小川に水を汲みに行つて、いなかった。

気持ちよいな風が吹く穏やかな夜だった。

「猫とか・・・そういうことだよ」
小さな声に、驚いたようだった。

「気にしてるよ、とても。でも、そんな風に言われちゃうところそり触れないじゃないか・・・しつぽ・・・」

看病していて、ガレが眠ったらこつそりしつぽ触るつもりでいたのに、と笑ったカリスに

「触りたいならさ触っていいよ」

「どうしたの急に、風邪引いて心が弱つたの？」

首を傾げられてガレは苦笑していた。

「おまえが俺と一緒にいる理由ってそういうことだろ」
しつぽが触りたいから一緒にいる。

少し思つたのだ。じゃあ、しつぽを触ってしまったらどうするんだろう。

ガレという意味はなくなってしまうのではないか。

家出の最中のカリス。

家に戻りたくないのだろうけど、ガレである必要はないのではない、たとえばもっと頼りになるゾラにくつついていてもいいはずだった。

「触らない」

カリスは首を横に振った。

「どうして」

ゾラが現れてから一言も口にはしていなかったけれど、触らせろと騒いでいたはずだ。

「だって、ガレ触って欲しくないって顔しているもの」

「そんなこと、ない」

「うつん。そういう顔してるよ。なら触らない」

汗を拭いてあげるよ、と返事を待たずにさつさとガレの襟を広げて拭い出すカリスの手にも、身体が重く、カリスの言うとおり風邪で心が弱ったガレはさせるままに地面に転がっていた。

ニンゲンなんかに触られるの嫌、などというのはもう違う気がした。

「だから見ているだけ」

ぱかっと頭から帽子を取り上げた。風が入って汗で濡れる黒い髪の上に猫の耳が二つ生えていた。

「ゾラがいないうちにちよっと通気しないとね」

耳の付け根が涼しくなっただけで気持ちよくて、無意識に耳が跳ねたようだった。

「わ、動いた！」

「・・・動くよ、そりゃあ・・・」

「でも、僕自分の耳、ぴくぴく動かせないよ。・・・動いても僕のだと、可愛くないけどね・・・」

顔を顰めてみせるカリスに、もう何度目に口にする言葉だろうか。

「おまえ、変な奴」

「そう？気のせいだよ」

「変だよ、絶対」

「そうかな・・・。でも別にいいでしょ？」

尋ねられたガレは、一瞬考えてから。

「ああ。ぜんぜんいいよ」

ガレの頭に帽子を戻した頃、茂みが揺れてゾラが帰ってきた。

ガレの頭の上に濡らした布を置いて、ゾラから貰った薬草を飲ませたあとカリスも寝息をたてはじめたガレの横で丸くなっていた。

今日は自分より先に眠ったガレを守るのだというように、カリスの片腕はガレの身体に伸ばされていた。

仲の良い、好ましい関係を築いていると知れる二人だった。

そんな様子をちらっと目を向けたゾラは、一つ静かにため息だった。

獣人の子どもとニンゲンの子どもがままごと遊びのように仲良く遊んでいた。

はじめは二人の間にあるものをまだ知らない、隠しているのかと思ったがそう言うわけではなかったようだ。

子どもだからなせるワザ。闇雲な勢いによる思い切りだったのか、事故だったのかは知らないが、カリスは知った上でガレと付き合っているのだとわかった。

ガレは典型的な獣人思考で、ニンゲンを恐れてビクつき怯えているのにカリスだけは側に置くことを良しとしているのだ。

いったい二人の間に何があったのだろうか。

ゾラには知り得なかったが、大人としてあることを教える役目にあるとは考えた。

“子どもたち、いつまでも遊んでいてはいけないよ。そろそろ家に帰る時間だ”。

楽しいからといっても、おまえの足下にはやるべきことが積みまれているだろう。

果たさず放置しすぎたら、重みで地面は抜け落ちてもうその場にいないことさえ出来なくなるのだから。

“坊やたち、遊びはそれまで。まっくら夜が来るまえに、さよならのキスを――”

昔聞いた童謡の一節を思い出したゾラは、小さく口ずさんでいた。珍しくもない唄だった。ニンゲンの母親が背中でごずる子どもに歌っているのをごく最近も聞いた。

古くは自分の母親が最後の一人になったしまった小さなゾラが眠りにつくとき歌ってくれたものだった。静かな夜の中、この唄を子守歌に聴きながら・・・あの夜がゾラが母親と過ごした最後だった。そのとき自分はこのガレよりも、幼かっただろう。

俺はよく、ちゃんと一人で生き延びられたものだ。

一瞬くつと男の口の端が笑ったようだったがそれだけだった。

怒りとも悲しみともつかない感情は消えてゆき、ただゾラは思い出した童謡を口ずさんでいた。

しかしその低い声も、傍らで眠る子どもの耳には届くことなくパチパチと爆ぜる焚き火に掻き消されていった。

朝起きたときには、もうすっかりとガレの身体は軽かった。

熱くも重くもなかった。

立ち上がってみると、痛みはほとんどない。足首のねんざもすっかり良くなっているようだった。

目覚めたときは少し重かったのだが、それは自分の肩の上にカリスの頭が乗っかっていて枕にされていたためだけであり、それはそおつと脇に置いてやれば解決できた。

けれど固い地面に置かれたカリスの方には不具合があったらしい。くしゃみをした。そして「・・・寒い・・・」と呟いて目を覚ますことになったのだ。

そういえば温かかったとガレは思い当たった。

身体を寄せ合わせて眠るなんて家族のようだとちらっと感じて、でもすぐに家族ではあり得ないのにとそんなことを考えた自分におかしくなっていた。

とにかくこうして普段より早く目を開けたカリスは、身体を曲げ伸ばしする朝の体操をしているガレに気が付いて驚いた顔になっていた。

「ガレ！もう起きていいの！？」

「ああ。もう平気みたい」

ほら、という וגレはその場でぽんぽんと跳ぶと勢いを付けて大きく、宙返りをして見せてカリスの目はまん丸になった。

「そう。すっかりいいみたいだね、とても早いね・・・」

そして少し不服そうに

「僕の足、まだぜんぜんなのにつ・・・」

小声でガレには聞こえないようにだった。

「狡いかもしれない・・・」

でも聞こえてしまったようだ。

「なにが？」

「ガレが。しつぽもあるし」

「・・・狡いつて、それつて、・・・そういうことか？」

「羨ましい。・・・見つからないようにするのは大変なんだろうけど・・・だけど僕にも生えてきてほしいつ、生える薬があるなら僕は絶対手に入れて飲む！」

冗談には聞こえないほど情熱がこもった言葉に、そんないいもんじゃないよ、と言いつつもガレは満更ではなくなつてきて不思議だった。

ゾラがどこか近くに散策に出ているので、二人だけだった。大人の目を盗んだ子供達の会話はだからとっても弾んだのだ。

これはゾラには内緒の二人だけの秘密の会話だった。

そのあとしばらくしてゾラが戻つてきて、簡単な朝食を食べて出発だった。

ガレは熱も下がり足首に走る痛みも回復してすっかり元気に歩いていたが、カリスの方は言い分も口に出す前から却下とされ、ゾラの背中だった。

昨日に引き続いてのことだったので、カリスも今日は「ええつ、またなの！」と口を尖らせた後は、比較的大人しく従つた。

歩くだけで必死にならなくてするので、道ばたには小さな花が咲いていたことや奥歯を噛みしめて歩かなくてもいいのでガレともお

しゃべりが出来ることに気が付いたためかもしれない。ひき替えとしてはとても恥ずかしい気持ちも味わっていたけれど。

「よう。なに人の尻見てんだよ」

「見、見てないよ！・・・し、失礼な僕があやしい者みたいじゃないかつ！」

ぼんやりと見ていたのは本当だったけれど、本当のことなので一層、ゾラに指摘されたカリスは真っ赤になっていた。

「触りたいなら、特別触らしてやらんでもないぞ、俺は心優しいお兄さんだからな」

「いつ、いらないよつ、変なことを言わないでよつ、ガレが僕のことを疑わしい目で見るじゃないか、違うんだからね、ガレ！」

ガレにはいまいち、性格が良く掴めないカリスが真剣になって目があった自分に言い訳をしているのだけれど、別にお尻を触りたい云々を、本気にして話を聞いていたわけではない。ただ、また何をゾラと遊んでいるのだろうかぐらいだったが、カリスは不名誉な誤解を解くべく躍起になっていた。

「別に、そんなに真剣にならなくても・・・それにもし、触りたいと思っけていても、俺怪しいとは思わないし」

「まあ、俺様の尻だけあって引き締まっけていい具合だから衝動に駆られても仕方がないことだわなあ」

「・・・小さい尻だよね・・・」

「だろう、おまえ良くわかってるなあ」

「ゾラって、全身無駄な肉なくてバネのようなかんじがするんだ」
「いい感じだろ」

「・・・敵にしたいくない感じ・・・」

すっかり苦汁を舐めてしまったようにガレは言い、ゾラはガレからカリスを振り返った。

「まあ、そういうイイ尻だ。触るか？」

「もう違うつ！」

カリスをフォローしたつもりだったが、ガレの言葉は逆効果になって話が弾んだ二人に、なんだかすっかりカリスは怒りを通りこして泣きそうになってしまった。

「信じられないよつ。どうして僕が人のお尻を触らなくちゃいけないんだ！」

ぶんぶん、と口で言って怒ってみせるカリスはやはりガレにはどこまで本気でやっているのよくわからないのだ。

だけど、カリスは実際触りたいなんてちらりとも思っていないかった。

ガレのお尻なら別として、想像していたことはそこまではつきりと確信あるものじゃないのだ。だけどちよつとよろけたふりをして掴まって引っぱってみたら、ずるつとズボンが脱げないかなあと考えていた・・・それだけなのだ。

思っただけで、さすがに実行を、とは考えていない。カリスだって守りたい体面があった。

そんなことを昼近くまで歩いたあと、道の脇に置かれている大石に腰を下ろしての休憩の最中に、おしゃべりと興じていたカリスだったが、ゾラがうーんと、背伸びをしていた。

そして「じゃあそろそろ行くか」と声をかけると、カリスの隣に座っていたガレが腰を上げた。

カリスも一緒に立ち上がったて少しよろけた。すっかり忘れていた痛みを思い出してそうして、ため息のあとはこれまでゾラにからかわれ、不服げに尖らせていた赤い唇をすうつと引っ込めていた。

「じゃあ、乗れや」

背中のだ。

ゾラがカリスの前にかがんで背を向けた。

「・・・よろしくお願いします・・・」

さっきまで軽口に文句を言っていた相手に向けての言葉は、とても小さな声だったがガレはカリスのこういうところが好きだと思っ

た。

意地っ張りだけれど、見ているのも不快な類の嫌な奴ではないからだ。

首に腕を回して、ゾラの背中に収まってゾラが立ち上がったときだった。

そいつらがこっちにやって来ようとしていることにガレが意識したのは。

緩やかに続く道が丘を越えたら街が視界に入ってくる場所まで来ていた。

人や荷馬車の往来も増していたが、非常事態ではないならガレも気にしないで普通にしていればいいことを学び、実行することにもそろそろ慣れてきたから、その男たち四人の集団にもあまり緊張感を感じてはいなかったのだ。けれど、気が付いたゾラの背中のカリスが強ばった声を出したのだ。

「ゾラ、走って！嫌な奴たちが来るっ！！」

「嫌な奴？」

驚いたガレがカリスの顔色を見てただごとではないと確認すると、その男たちの方向に目を向けた。

同じマントを着て似たような感じの男たちは徒歩ではなく、騎乗だった。

馬は距離を詰めることなくその場所で足を止めていた。

男たちはこちらを認めて、なにやら話がされているのだとわかった。

「早く早く、奴らに捕まっちゃうよっ」

反応の鈍い突っ立ったままにいるゾラの背中でカリスが暴れていた。

「おまえ、なんか悪さをしたのかい？」

「違うつ、僕を閉じこめようとするんだ、家の中につ、連れ帰ってまた鍵を掛けるつもりなんだ！」

「鍵とは、また物騒だねえ・・・」

「だから早くっ、じやなきや、降ろしてよっ!!」

藻掻いてゾラの背から降りようとカリスは躍起だった。しかし、危なげなくしつかりと支えて歩いていたゾラの腕は今はカリスの邪魔をしていた。

訳もわからず暴れ出すから、落っこしそうで力を込めたという雰囲気だったが、ゾラよりもいくらかはカリスの事情を知っているガレも男を説得しようと助け船に入った。

「ゾラ、カリスは捕まっちゃうんだ!」

「なんでだい、ははん。よくある、家出か?」

馬鹿にしたようなゾラ言葉にカリスはさらに声を荒げた。

「そうだよっ、あそこに僕はいるべきじゃないから出てきたんだ!」

「カリスには大きな事情があるんだ!無理矢理、連れ戻そうとするなんて、やっぱり奴らは横暴なんだ!!」

「無理矢理・・・横暴って、それは一概には・・・」

ゾラが少し困ったような声を出した。

降りられず、背中に繋がられているカリスが悲鳴をあげていた。

ガレもカリスが見たものを目にして慌てた。

「あいつら動き出した、ゾラ、駄目だ、早くしないと!」

「・・・わかったよ。――おまえ、ちゃんと付いてこいよ」

一言を傍らのガレに言い置いて、そのあとゾラは早かった。足下に置いてあった荷物を引っつかんで一蹴りで道から跳びだしたのだ。脇の手入れのない草地はその奥の雑木林に繋がっていた。山を開いた道だったから、少し逸れれば本来の手入れのない自然のままの横断の厳しい広がりだった。

そこに、ゾラは走り出したのだ。

ガレもすぐ続いた。

ゾラは身軽く、ガレが警戒心を抱いた通りの、いやそれ以上の身のこなしでカリスを背負って走って行く。

ゾラの走りには舌を巻く思いだったが、すぐに気分を切り変えて全力でガレも走って、遅れずにちゃんと続いた。

馬の走る速度に二足歩行者が勝てるわけがなかったが、狭くすり抜けなくてはならない足元も悪い山道は、馬ではなくガレの十八番だった。

こうゆう場所を上手く走り抜くガレだからこそ生き抜いてこられたのだから。

後ろで馬のいななきと踏みならされる馬蹄の音、男たちの怒声、叫び声が聞こえたがそれだけだった。

ガレと、ガレの前をカリスがしがみついているゾラが崖を飛び越え、岩面を這い上がって飛び降りて走り続けて、男たちが付いて来るなんていう心配な気持ちは熱くなった身体から滲みだした汗と一緒に次第にガレから消え去っていったのだ。

ガレが息切れをし始めたほどだった。

獣人の自分が。

ニンゲンで、大人であるけれどゾラに遅れないように走るだけでどれほど懸命にならなくてはいけなかったか。

これが自分を追いかける、ハンターだったら・・・。

考えずにいらなかったガレが、その結果、汗ばんだ背筋がぎゅっと凍りかせることになった。

ガレは不安で堪らなくなつて尋ねていた。

「・・・ゾラって、・・・どういう人？」

「こういう人だが、いきなりなんだ？」

「どういう職業・・・どうやって食べているのかなって思ってたさ」

黒い大柄の長身。

腰には幅の広い剣を吊している。

身軽すぎるほど身のこなしの良い男だった。

「誰かに、仕えているとか？」

探りだった。相手の素性、人柄は嫌いだとは思わなかったけれど、その人格が植わっている物があまりに優秀だから、恐怖感が生まれ

てしまうのだ。

本当に、無防備に自分は側にいてもいいものなのだろうか。

それまでは上手くやっていても、一転、なにかを切欠にして不仲になってしまうことは往々にしてあることだろう。

そうなってしまった場合、この男は危険すぎないだろうか？

「ガレ、どうかしたの、怖い顔をして」

「ちよつとさ。気になったただだよ・・・」

ガレと同じ黒い色の髪の毛のゾラの頭の横からひよこつと金色の一回りに小さい頭が覗いて心配そうな顔をしていた。

まだ背中に負ぶさりっぱなしでいたカリスが、ゾラに頼んで地面に降ろしてもらった。

走り続けて山の中腹で倒木のためにばかりと開いた場所でしたら休憩することになって、思わずその場に座り込んでしまっていたガレの横の下草の上にカリスもお尻を降ろした。

「ここにいろよ。俺はその辺でも見てくる」

うんと少年二人が頷くのを視界の縁に納めたあと、けろりとした顔で遠ざかって行く黒い背中。

声が十分届かないところまで見送ったあと、ガレが硬いままの表情で口を開いた。

「あいつ・・・凄いや」

「うん。僕もそう思った。どんどん走るの。僕を背負っているのにな」

「・・・俺、あいつ、怖いと思ったんだ」

ガレは吐露しながら、こんなことを誰かに口にしたことなどなかったことに気が付いていた。

「・・・うん・・・」

ニンゲンのカリスはガレに、静かに頷いた。

「最初、良い奴だと思ったけど・・・違う、今だって悪い奴とは思っていないんだ、だけど、さ・・・凄く怖い」

こんなことは言わない方がいいのかも、ちらっと思ったけれど

真剣な面持ちで自分の話を聞いてくれているカリスに対して甘えだつたのかもしれない。

ガレの恐怖感に負けた弱音だった。

「・・・俺、あいつの近くにいたくないって気がするんだ・・・」

「・・・そうなんだ。ガレはゾラのこと好きなんだろうと思つていた」

カリスは考え考え、そんなことを言った。

「どうして、そんな・・・」

驚いたガレに、よくわからないけどと、慌てて付け加えたあとに「なんとなく、そう思つていた。・・・やっぱり僕の気のせいだったのかな・・・。ガレとゾラは少し似てるかなって思つていたんだ」うーんとカリスも悩んだ顔になっていたが、ガレの不安そうな視線に気がついて明るく気分を変えた。

暗い表情のガレと二人、暗い顔を突き合わせていても良いことなんてあるわけがないだろう。

「じゃあ、ゾラを置いて二人で行っちゃおうか？」

くるくるとした大きな瞳を悪戯っ子ぽい光にきらめかしたカリスがなんでもないことのように、ガレが少し怯むようなことを提案した。

「・・・それは・・・酷くないか・・・？」

「でも、ガレ、嫌なんですよ？」

「嫌つてわけじゃないよ・・・怖いだけだ。怖いっていつても、俺の方の気分的な問題でさ、・・・俺が悪いだけであいつが悪いわけじゃないんだ・・・」

良いとか悪いとかではなく、嫌なら仕方ないのに、と思うカリスだつたけれどガレは同意はできないようだった。

「なら、平気？このままでいいの？」

確認すると

「ああ。平気さ」

ガレは頷いた。

ガレにとって、怖いけれど逃げ出す理由にはおかしいと思ったし、その他にはゾラはとにかくもう少し一緒にいた方がいいと考えた。なぜなら、ゾラだったらカリスは素直に背中に乗るようになったけれど、自分が背を向けても無理だろう。

まだカリスの足の肉刺が完治しているわけがなかった。そのうえ、ゾラと離れればカリスに一番負担が押し寄せるのだろうと思うから。「ほんとに、いいの？」

「いいよ」

繰り返して確認するカリスにガレはもう一度はつきりと、力強く頷いて見せた。

ゾラに対して、ガレの気持ち的な不安要素だけが問題ではないことに、すぐに気が付くことになっただろう。

それは、ゾラが夕食を食べている最中に言い出したからだ。

豆を発酵させて作られるという“味噌”という東方の貴重な調味料を味付けに使ったというゾラのシチューはとても美味しくて、ガレもカリスも言葉少なになって夢中に匙を運んでいるときだった。

「おまえは、いつまで家出をしているつもりなんだい？」

いきなりで、何気ないどちらかといえば、どこかおもしろがっているようなゾラの声だった。が、言われたカリスの手はぴたと止まっていた。

「関係ない」

普段の柔らかさも甘さも刮ぎ落ちた低い声だった。

「まあ、そう言えばそうだけど、あると言えばあるだろうよ。追っ手が現れて山の中走り回されることになったんだから」

「・・・それは・・・感謝してる・・・」

笑っていないときのカリスは別人のように体温の低い堅いしゃべり方をするのだ。

山野を走ることにに関して、カリスよりガレの方がゾラと対等に近

くあれだが、会話となったときはカリスだった。

きゃーきゃーはしゃいでいるときとはガレより小さな子どもでも、いったん気分を落としてしまい、大きな目を相手にすえて語り出すカリスには、ガレは一人幼い子どもとなってただ見守ることしかできなかった。

「感謝か。そりゃ、ありがたくもらつとくが、ことはそれだけじゃ済まんだろう？」

「・・・街に着いたら、道具屋に行つてお金を作つてちゃんとお礼をする」

そのあと、くるつとガレを向いて、ガレにあげるつて言ったものじゃないから安心してと、説明をした。

ガレは、そういえば自分に高級な指輪が、それを売つてお金をくれるのだとカリスに言われていたことを、言われてはじめて思い出したぐらいだったが、要するに他にも売る物を持っていて、それを売りゾラにお礼をするのだとカリスは言っているのだ。

「そりゃあ、さらに有り難い。楽しみにしてるぞーーということじゃないと、ちゃんと気が付いているよなあ？わかつていて誤魔化そうとするかわいげのない餓鬼だな、まったく」

ゾラは薄く笑っていた。

大人の顔だった。

何を考えているのかよくわからない、信用できない表情だと二人は思った。

カリスの警戒心がギリギリと寄り合わされて糸になったものは、さらに合わさつて強い太いものに変化してゆく様子が手に取るようにガレにわかった。どんどん、顔つきが強ばつていくのだ。

それ以上言つたら、駄目だ！ーというガレの祈るような気持ちには通じなくて、容赦ない言葉が続いていた。

「おまえ、体力ないよな。ガレにくつついて行くつて言つても実際、無理なんじゃないのか？」

ガレははじめて食べるシチューを膝の上に置たままになっている、

カリスに至っては地面の上にまだ中味が入っている器を置いて、もう食事どころではなくなってきた。

その焚き火を挟んだ前で、ゾラだけがズズッと音を立ててシチュ―を飲み干したようだった。

そのあと乱暴に手の甲で口元を拭いたあと、再び二人に目を向けた。

「家出。子どもっぱいわなあ。そんなもん、いったいいつまで続けるつもりだ。このまま逃げ続けるつもりか？」

そこでいったん言葉を切って

「このまま逃げ続けられると本当に思っているのか？」

冷静すぎる言葉だった。

的を得た言葉だった。

そして、ゾラの言っていることはこの場で正しいことだとガレは思った。だけど、それは聞きたくなかった言葉だった。

「逃げ切るんだ！！逃げ続けられなくても逃げ続けるよ、僕はあそこに帰らないっ！あそこには絶対戻らない！！」

ガレの横で、カリスの悲鳴のような叫びだった。

「絶対嫌だ！！絶対だっ！！」

「どうして、そんなに剥きになるんだ。なんかやつちまったんなら、素直にさっさと怒られてしまえ。一度怒られちまったらしばらくすれば嫌な思い出として、お互いがいずれは忘れてしまうさ」

「知らないからっ、ゾラは何も知らないから、そんなことが言えるんだよ！僕はそうはならないよ、わかるんだっ！！」

「ちびっ子が何を小賢しくわかってるって言うんだい」

「みんなは、・・・僕の家族は僕を嫌っているんだっ」

「さあ、どうだか」

ゾラは皮肉げな笑みを男らしい精悍な顔の口元に刻んでいた。

知らないだけでなくゾラはカリスを挑発しているのかと、一人ハラハラするガレは思った。

挑発とわかるうとも、決して無視できない事柄が人にはあるよう

に、普段冷静なカリスはゾラの言葉に激しく噛みついた。

「証拠があるんだ！」

「本当かね、どんな？」

「みんな、嘘を吐いていたんだ、僕にグルになって、嘘を言って欺していたんだっ！」

「欺すーなんて、よくあることだぜ。そのたびにおまえはこれからもいちいち逃げ回るってことかい。子どもだな」

「違う、そういうことじゃっ……」

カリスの目の縁には光るものが滲んでいた。見かねたガレだった。酷すぎて聞いていられなくて、カリスを助けに入ろうと思ったのだが、すぐにゾラがガレに視線を向けた。

巫山戯てカリスをからかっているようにも見えていたゾラだったのに、その一瞬の目はとても厳しい目だった。

ガレに口を出すなど、無言の命令だった。

ガレはその目の眼光に圧倒されて口をつぐんだ。

「カリス坊やは、甘ったれな子どもだという証明になってしまったな」

再びカリスに、ニヤニヤと笑いながらゾラは言い、カリスはがっ
と大地を踏みしめて立ち上がった。いた。

握られた拳がぶるぶると小刻みに震えているのをガレは横目で見
ていた。

ゾラはカリスを怒らせようとしていることはもはや明らかだった。

「子どもじゃない……僕の言っていることは正しいんだっ……」

「自分だって嘘ぐらい吐くだろうに、おまえは他人を許してやれな
い心の狭い子どもってことだろう？」

「違う」

「どこが？」

「そっいつ、ことじゃないんだ……」

「ないが違っんだ、言ってみろ」

「……」

カリスは深呼吸を繰り返して気持ちを落ち着かせようとしていた。それを言ってしまったように。

ガレも心の中で恐れているその点、だろう。

覆い隠して見ないようにしているこのことを、挑発に叫んでしまわないように気を静めようとしているのだとわかった。

けれどゾラが。

「言えないことは正当性に欠けるってことだわなあ」

「お、お母さまはっ！！」

「・・・カリス・・・」

カリスの瞳に涙が膨れあがってガレも泣きそうな気分だった。

「僕が小さな頃に死んだけど、僕にいつも『愛してる』って。僕を胸に抱いてお歌を歌ったって・・・全部嘘だったんだ。全部、嘘、作り上げた物語だったんだ、それを僕にみんなで聞かせてっ・・・僕・・・」

立ちつくしたカリスの目からぼとぼと涙が流れていた。

「一つだけは本当があったね。それは僕が生まれてお母さまを独り占めにしたってことだ・・・その通りだ、僕はお母さまを独り占めにして姉様たちから奪ったんだ、僕が生まれて・・・」

飲みこもうとされる嗚咽にカリスの細い肩が震えていた。

「僕が生まれて、お母さまは死んだんだから。お母さまは僕のせいで死んだ、僕が生まれたせいで死んでしまったんだっ、『愛してる』なんてみんな嘘だ、そんな風に思っているわけないんだ。お母さまだって、姉様だって、お父さまだってっ、許せないって思っているはずだよ」

僕なんか、生まれなければよかったってー！

耳を塞ぎたい絶叫だった。

一番恐れた言葉だった。

「僕なんか生まれなければ良かったって、みんな思っているよっ！それまでみんな楽しかったんだ、お母さまと遊びに行ったりピクニックに行ったり、だけどっ・・・僕が生まれたあとはっ・・・。本

当は僕のことなんて嫌いなんだ、大っ嫌いなんだよっ！」

「カリス、そんなことないよ・・・」

「そうだよ、ガレ・・・だって・・・大っ嫌いで許せないよこんなの・・・僕は僕が大っ嫌いだ・・・僕が死んだらお母さまが戻ればいいのに・・・戻らないのに僕が死ぬことは僕のせいで死んだお母さまにもっと酷いことをすることになるんだっ・・・」

両手で目を覆ってが指の間から雫はあふれ出して地面に落ちて染みを作っていた。

横に立ってガレはカリスを慰めたくて、涙を止めてあげたくて仕方なかったのに欠けてあげられる言い言葉も見つけられなくて、おろろするだけだった。心の中でこんな酷い仕打ちをしたゾラを恨みながら。

「自殺なんかすることは、悪いことだ。母親に対する最大の冒瀆だろう」

「もうやめろよっ！」

「こいつは中途半端に向き合っているからいかんのだよ」

怒りを込めらガレに、腹立たしいほど冷血なゾラだった。

「おまえ、言ってやればいい。そいつとそいつの母親、二人いたらおまえはどちらを選ぶかを」

「えっ」

ガレは驚いて息を呑んだ。でもすぐ意図を理解した。

同じくカリスもゾラが言わんとしていることに気が付くと、硬直していた。

「・・・そんなの変だよ・・・そんな選択を言うのなんて意味がないよっ・・・」

「でもおまえは、意味がないことを悔やんで自分を呪っているんだろうが」

「カリス・・・」

俯いて嫌々をするように首を振るカリスの顔をガレはそっと起こして覗き込んでいた。

「意味はないかも知れないけど、俺はおまえとおまえの母ちゃんどつちか一人だったら、おまえはいいよ」

「それはっ、ガレがお母さまを知らないから、でもお父さまや姉様たちはお母さまを知っていてあとで生まれた僕のことよりずっと大事だったはずだよっ・・・」

「・・・かもしれないけど。時間が短いし、俺だと駄目か？俺がカリスが好きで大事だって言っても、会ったばかりで時間短いし家族じゃないし、そのうえーっだし・・・。おまえにとって俺の気持ちなんて価値ないか？」

カリスが言うとおり、ガレはカリスの母親を知らない。だけどそういうことではなくて、もっと単純でガレはカリスのことが好きだと思うから。

カリスを産む女の人に会うことがあったなら、きっと言うだろうと思った。カリスを産んでねと。たとえそのあとその人が死んでしまふと知っていても。

「俺の言葉なんて、いらない？」

「・・・そんなことは・・・」

辛抱強く待っているカリスは返事をくれたのだ。

「ないっ・・・」

小さく言ったあと、わあっとなんて大声を出した。

目を覆っていた手が外れるとガレにしがみついていた。

ガレに縋り付くようにしてカリスは夜中までずっと泣いていた。

これまで気が付いてしまったあと、ずっと一人で口にも出せずに我慢してきた思いだったのだろう。

深い悲しみだった。自分が生まれた直後に母親が死んだのだと聞かされたら、衝撃はとても大きいものだろう。

そんなものは簡単に忘れたり消せるわけがないし、どんないい言葉でくるんであげてもすんなり納得などできないことだとガレも思った。

だけど、心の中で石のように固まってしまつて、カリスは触れる

ことも恐れ泣くことだってできないできたとを感じるから、こんな風に心の底から引つ張り出して口に出して大泣きできたことは悪いことではないのではと考え直していた。

ゾラがやったことは、カリスの背中をなで続けているうちガレにもいくらかは理解できたのだ。

ただし、もう少し優しい方法はなかったのだろうか・・・。

ガレとカリスと、ゾラの物語 6

「お母さまは、僕を憎んで死んだと思う？」

カリスは珍しい虫を見つけて、きゃあきゃあ騒ぎながら追いかけてつついていたと思ったら、いきなり顔も上げず、そんなことをガレに聞いた。

この虫はなんていう名前なの？と聞くような何気ない声だった。ガレは、という絶句だ。

鞆の中味を整頓していた手を止めて、カリスを見る。カリスはガレを見ていなかった。ガレは横顔を見つめながらじつくり考えなくてはならなかった。

よく考えて、見つけた答えだった。

カリスのための慰めとか、きれいごとではなくて、率直にそう思ったことだった。

「そんなこと、なんにも考えていなかったんじゃないのか？・・・よくわからないけどお産って、大変で苦しんだろ。死んじゃうお母さんの話、他にも聞いたことあるし・・・。だからさ、そのときは生まれてよかった、大変なこと乗り越えて良かった・・・ってホッとしていたんじゃないのかな・・・」

「それだけ、かなあ。・・・きつと・・・そうだよな。僕もちよつとそうかなって思ったんだ。まだ僕のこと、産まなきゃよかったとか、嫌な子とか考える余裕なんてきつとなかったよね・・・」

カリスはゾラに口出しされて、気持ちをしやべって、怒って泣いたことによってどこが変わったとガレは思った。

翌朝、泣いた影響で目が腫れていた笑える顔になってしまっていたがカリスも笑っていた。元々カリスのイメージは、笑顔だったけれどそれまでとはまた違って力が抜けた笑顔だったような気がしたのは、考えすぎだろうか。

でもやはりどこが変わって、肩の力が抜けたのだろう。

今までは自分のことを積極的にしゃべろうとはしなかったのに、ましてやカリスの悩みの核となるような母親の話は触れるのも嫌がつていたはずなのだ。

それを自分から口にした。

少々、ガレが返事に困る難しい内容だったが・・・。

無神経にならないように、無責任にならないように。

そしてカリスが拘っている、嘘にもならないように慎重に考えてみてガレは口にする。

「すぐだったんだろ・・・だったら、さ。やっぱり、元気に生まれてよかった、ってそれだけだったと思う」

「うん。そうだね！ガレもそう思うんだし、きっとそうだよね！」
虫を草むらに追いやったカリスが立ち上がって振り向いた。

お姉様やお父さまの気持ちは無理でも、と前置きをしたあと
「でもお母さまは、僕のこと、ぜんぜん時間がなかったんだもの、まだきつと嫌いじゃなかったよね！」

嬉しそうな笑顔で言うカリスが、ガレにはとても眩しかった。
眩しすぎて、少し切なかった。

そして、そのあとはさらに返事に窮することになった。

「ね、ガレ。ゾラってさ、結局、僕に家に帰れとは言わなかったんだよね・・・」

ゾラは今、出発前の準備で近くの小川に水を汲みに行っている。

だからガレは、カリスと二人待ちながら荷物の整頓をしていたわけだが、着の身着のままポケットには高価な宝石がいくつか入っているとのことだが身軽なカリスは出発寸前のアクセント、目の前に現れた虫も無事、踏まれないような草むらの奥に救助しおえた。準備は終わったとばかりに、ガレの前に戻って踏み固められて土が剥き出しになっている地面にぺたんと腰を下ろしている。

「・・・それは、おまえが怒って泣き出したからだろ？」

「・・・うん。もつといろいろ言われると思ったの。帰って、家出は駄目なことだ、さっさと帰れ、子どものくせに・・・とか。でもそういうのとちよつと違ったね・・・」

「そうだな・・・。まだよくわからないけど、いつまで続けるつもりだとは言ったけど戻った方がいいと言っただけだよ・・・」

「じゃあ、ゾラはそのまま放っておいてくれるかなあ！」

「・・・おまえさ」

ガレは、思い切って今までだったら決して聞けなかったことを口に出していた。

今のカリスなら、聞いても大丈夫だと感じる、ガレにとってもとっても重要なことだった。

「おまえはこのままでいいのか。・・・こういう生活、辛いんじゃないのか？」

「ゾラがいて言っても、ガレが反対するんだ」

カリスは薄い苦笑だった。

「違うよ、そういうことじゃないだろうっ！」

静かな笑みを皮肉げに口元に浮かべたカリスにゾラは大慌てだ。

「実際、血が出るほど肉刺ができてるんだ。それにいままでは食べ物だって、おまえぜんぜん違うんだろ、ベッドだってないんだし・・・。そういう生活をずっと続けるんだぞ、俺と一緒に来るってことはずっとだぞっ、おまえはそんなんでさ・・・。いいのかよ・・・」

言いながらだんだんガレの声の勢いがなくなっていくたのは、理性が薄まりガレの気持ちが入りこんでいったせいだった。

いいのかよ、とカリスに尋ねながらガレは、それでいい、このままがいいと思っているのだから。

肉刺だろうと、ニンゲンで体力のないカリスで毎日くたくたになるうとも、ガレはカリスに戻った方がいいとは言えなかった。

戻れと言いたくてこんな話をしているわけではなくて、戻らないとはつきり聞きたいから言っているのだと自分でもわかっただろう。

カリスはすぐに返事ができないようだった。

静かに何かを考えている。

即答が欲しかったのに。

ガレはどんどん不安になっていく。

言い出しながら先に堪えられなくなったのは、ガレだった。

「……このまま、一緒にいればいい」

「……ガレ。でも……」

「……ベッドも家もなくなつて生きてゆける。食べ物ならこれからは少し多目に俺が二人分を調達すればいいことだし」

「……でも、一番の問題は、僕と一緒にいるとガレみたいに早く走れないもの。ガレの足を引っぱると言うことだよ」

「慣れたら走れるようになるさ」

「ならなかったら？」

カリスは水を差すようなことを淡々と言うのだ。

「僕のせいで、ガレが楽園にたどり着けなくなるってことにもなるかもしれないよ」

「じゃあ、おまえはやっぱ、帰りたいと思っているのかよっ！」

欲しい結論がカリスからぜんぜん出てこなくてガレは、腹立たしかった。

「だったら、はっきりとそう言えいいだろ！」

怒って立ち上がったガレの前で、カリスはそのまま座ってただガレの顔を見上げていた。

「……帰りたいくない。ガレとこうしていたい」

それはガレの欲しかった返事だ！

しかし、でも、と続きがあった。

「こうしていて本当にいいのか……は、よくわからない……。僕が足を引っぱり続けたら、ガレはそのうち僕のことを嫌いになるね。それだけじゃなくて僕のせいで悪いことになるかもしれないよね。……だったら、僕は我慢して帰った方がいいのかもしれない。……」

「そんなことないっ！」

「・・・でも。ガレは追われたりするでしょ。そのとき、僕はお荷物だよ」

「だったら、カリスがゾラのと看みたいに、俺の背中に素直に乗ればいいんだ！」

「・・・」

「俺はニンゲンじゃないから、カリスと同じぐらの背だつてもぜんぜん違ふんだ、強いんだ。それに俺は獣人の中でも優秀な方だぞ、力は強いし走るのも速いし体力もある！だからカリスぐらい背負つたつて、俺は平気なんだ、ゾラじゃなくたつて！！」

「・・・ガレだとちよつと恥ずかしい・・・」

「そんなん氣にすんなよつ、いいじゃんかそれぐらい！」

強く力説したガレは、大きく肩で呼吸していた。

「・・・恥ずかしいかもしれないけどさ、少しだけ我慢してさ・・・俺と一緒にいようよ。・・・いろよ・・・」

カリスはすぐに返事をしなかつた。

しばらくガレから目を逸らして下を向いていたあとに、ガレと同じぐらい小さい声だつた。

「考えてみるね・・・」

「今日は大人しいんだなあ」

ゾラが歩きながら静かな背中をからかつていた。

「大泣きしすぎて疲れが残っているのか？」

「うるさい」

と今日も、だいぶん良くなつてはきたものの足の肉刺はまだ痛々しい状態というガレとゾラの揃つた意見によつて背負われているカリスは低く文句を言つたあと、その生意氣を吹き散らすように明るい声になつた。

「僕も少し反省していたの。ハゲの人にハゲハゲと、本当だつても

言っちゃあいけないんだなって。ううん、実際ハゲは本当だから、余計にハゲハゲハゲと言われることはハゲのゾラにはとっても辛いんだなって凄く反省していたの。ゾラ、ごめんね。素直にハゲをハゲって言って・・・ごめんなさい！」

それは、泣いたことは触れられたくないことであり、そういう嫌な点を突かれたカリスの逆襲だろう。

いったい今、何度、ハゲと笑顔のうちに言ったのか。

カリスの性格はとても怖いとガレはしみじみと思った。

ゾラは。

「おまえ、ほんといい性格しているなあ」
感心していたが、

「でも今、ガレが引いたな。今のおまえの性悪さに確実に一步嫌いになっておまえから心が離れていった。・・・ああ、考え無しは今、とてつもなく大きな後悔だな、可哀想に・・・」

厳かに言われて、カリスははっとした顔になって隣を歩いているガレの方を見た。

ガレはぶんぶん顔と顔を横に振って、真顔になってしまっているカリスに心配ないのだと伝えたが、やはりと思った。

ゾラの方が上手だ。

そのあとカリスは落ち込んだのか黙り込んで、一行はザクザクと歩いて行く。

三人、いや歩いているのはガレとゾラの二人で、カリスはゾラの背中だった。

足の長さのため、同じ一歩でもガレよりも先に進むゾラのため、進行はゾラ先に歩き、ガレが付いて歩くというかたちになっていた。確かな歩みだった。

子どもだけど獣人なのでそのくらいガレも平気だったが、見方を変えたとき、大人だけとただのニンゲンのゾラの体力もたいしたもの、ほとんど疲れ知らずで歩くのだ。

ニンゲンに、こんなレベルがゴロゴロいるとなるとかなり怖い、

とガレは再び考えざるをえない。

そうして、これからどうなるのだろうかと思きながら考えていた。ゾラはガレの敵のハンターではないにしても、カリスにとってどういう存在になるのだろうか。

いつまで家出を続けているのだと昨夜、言い出したゾラ。

結論まで問いつめなかったけれど、今の状態を好ましくは思っていないのだろうと思った。

客観的に言えば、良くないとガレも思う。

黙って家を抜け出てきたと、失踪中のカリスなのだ。

家族は必死になって探していて、だから搜索の手は二人の元まで伸びてきているのだ。

だけど、ガレは思うのだ。

カリスと一緒にいたいと。

このまま一緒にいたいと。

カリスだって戻りたくないって言っているのだから、悪いことじゃないと思った。

無理矢理、自分が引きずり回しているわけじゃないのだから。

このまま一緒に旅をする生活だって、カリスにとっても悪いことではないはず、だって絶対、そんな風に母親が死んだことを誤魔化してきて明らかになってしまったのなら、いい気分はずはないのだから。

カリスだって。

そう。カリスが言うとおり、カリスの家族もだ。本気で少しは母親を失う引き金になったカリスのことを疎ましく思っているかもしれない。

きつと・・・そうだ。

「おい、そつちもえらく静かだな」

ゾラに声をかけられたガレは、ビクツと背筋を震わしてしまった。

「俺も少し考え事・・・」

「おまえもハゲか？」

渋面な顔を作って言ったゾラにガレは、違っ、と首を横に振る。
短い否定のあとは沈黙だった。
すると

「・・・面白みのない奴だなあ」

言われて何となく傷ついたガレのために、「ガレを苛めるな、ハゲ」とカリスが援護に出たものだから、また急に一行は賑やかになった。

カリスと一緒に楽園を目指そうとガレは思った。

ガレは決めたのだ。

カリスと一緒に、行くのだ。

最初に決めたとおりだ。最初からカリスは自分で、ついて行くと言ったではないか。

だから、これははじめの予定通りのことだ。

自分はカリスと一緒に楽園に行く！とー！。

「カリス、服を脱げよ！」

「え？」

カリスはとても驚いた顔をしてガレの方を見たが、ガレは真剣でだからカリスは余計に戸惑ってしまったようだ。

「きゅ・・・急にガレったら、何を言い出すんだよう・・・」

お昼ご飯の休憩で、日差しが高く一番高温の時間は少し道ばたの木立の木陰で休むことにした、そのときだった。

「だから、その着ている服を脱ぐんだよ！」

「こらこら。昼間の明るい往来で同性不純交流はお兄さんとしては認められんぞ」

「違っよっ、何言っただよ、ゾラは！」

ごろんと根っこを枕に寝ころんでいたゾラが顔から腕をのかせて

じろつとガレを睨んだが、ガレもぎろつと睨み返していた。

馬鹿じゃないのかと、と言わんばかりの口調で言ったガレは、それでも一人先走っていることを反省して説明をはじめた。

「だから、カリスの高そうな服は目立つんだよ。俺はゾラと親子と何度も見られたのにカリスは一度も言われなかった。このなかで一人、なにかが違うつて思われるんだ。まずその服だよ。高そうでこんな野山に行く旅行服じゃないんだよ、だからおかしいと思われるんだよ」

下着や肌着は何度か手で洗って清潔にしていたけれど、カリスは着替えを持たないままの状態だった。ここしばらくで、青い上着は少し草臥れてきたようだったが、光沢の良い上質な空気は仕事の行き帰りの農夫や、マントを着る旅行者の目には場にそぐわない奇異と映るだろう。

今更だった、気が付いたガレは躍起になって改善させようとしていた。

「目立つんだよ！駄目だ、それは脱いで代えた方がいい！！」

「でも、着替えを持ってないよ？」

「俺のを貸してやるよ。靴もどつかの街にいったらもつと楽なのを買ってやるから。そうすればカリスも普通の感じになって変だと思われない。目立って人の記憶に残るのは一番駄目なんだ、情報になつて追いかけてこられることになるんだから！」

「そっか。・・・そうだね・・・わかった」

頷いたカリスが上着のボタンを外しに掛かり、ガレは自分の鞆をあさった。

今、着ている物とよく似た黒色の質素の衣服だった。

「ちゃんと洗ってあるから、大丈夫だ」

手渡したガレ、カリスは素直にそれを受け取ったのだ。

しかしそのとき、ゾラから“待った”が入った。

「こらこらこら」

「不純同性行為じゃないぞ」

ガレが真面目な顔つきで言ったが、ゾラは納得はしなかった。

起きあがってゾラも普段のにやけ顔ではないため精悍な顔つきは怖いような野性意味を際立たせていた。

「目立たない物を着せて、どうする気だい、おまえ」

「行くんだよ、おばさんのところに」

ゾラには内緒があるため、楽園ではなくおばさんのところだと話してあった。

「カリスを連れて？」

「そうだよ。最初からそう言っているじゃん」

カリスは神妙な顔で黙っている。

だからガレはカリスの保護者のようにゾラに対峙していた。

「おまえも、本気でガレにくっついて遠いおばさんの家まで行くつもりか？」

尋ねられたカリスは。

「わからない。行きたいと思っていただけ、どうせそのうちガレに置いて行かれるんだと思っていたよ。・・・でも連れてってくれるなら僕は・・・」

「無断の家出のまま、もう家族に会わないつもりなのか？」

「そうだよ、カリスはそう決めたんだっ！」

「おまえは黙ってるよ。おまえとは今、話はしとらん」

ぴしゃりと男に言われて、ガレは不満そうにだったが口を閉じた。
「・・・駄目なの？」

カリスは反対に、ゾラに質問だった。

「だって、きつと僕のこと、みんな嫌いだよ。口ではそう言わなくても心の中では嫌いだよ。嫌いじゃなきゃおかしいよ・・・。僕はお母さまとお話したかったし、どうして僕にはいないんだろう、僕にもいて欲しいとずっと思っていたもの。でもそれは僕のせいだったんだ。僕が生まれたことで、みんなからもお母さまを奪ったんだものね」

今のカリスは泣いてはいなかった。

泣かずに冷静に、痛々しいほど静かな言葉が紡がれるのだ。

「きつと、僕はあの家にはいない方がいいんだよ。僕を見ればお母さまを思い出すだろうから。僕はあそこにはいない方がいいんだ。大人で良識もあるし、体面だってあるから口に出しては言えないけど、きつとそう」

ガレはカリスの代わりのように苦しそうな表情になってそれを聞いていた。

ゾラは、唸る。

「言っていることは間違っているとは言わんさ！」

「僕は、ガレが好きだ。ガレも僕のこと好きだって言ってくれる。邪魔じゃないって言うてくれるなら、僕はガレと行く。たぶん、それが一番いいことだ」

「間違っではないないが、おまえは最大の重要ポイントを見落としている」

ガレとカリスが同時に不思議そうにゾラを見つめた。

ゾラは頭ごなしに反対だと怒鳴りつけようとしなから、聞く耳がもてるのだ。

「それは」

「なに？」

「不可能、ってことだ」

での、その言葉にはがっかりだったガレが失望もあらわな声で、
「なんだよ、それ。・・・だけど、今だってさっ――」

「まあ、聞けよ」

ゾラは気色ばむガレを遮った。

「本気で追っ手から逃げ延びるつもりなら、バラバラに別れるべきだろうよ」

「別れる？」

カリスが驚いたように目を大きく見開いた。

「そうだろう。追っ手に捕まらずに自由に生きたいなら、お互いを連れることは不自由だ」

自分は追われながら、そのうえ連れも別に追われているなら二重に警戒していなくてはならない。

助けになることもあるだろうが、逆に足を引っぱることにだってなりかねない。

「足の引つ張り合いになるだけだろうて。本気で、逃げ延びることを考えるならそれぞれ一人ずつになるべきだ。お互いの危険性をも、ひつかぶるなるて馬鹿げたことだぜ」

「そんなんつ、そういうのはガレには当てはまるけど、僕には無理じゃないか！」

「ただ家出を完遂したいということなら、その方が安全だと言っているんだよ」

顔色を変えたカリスに、ゾラは冷徹だ。

「おまえはこういった生活が苦手だと踏まえてもだ、ガレと一緒に行動するよりは可能性は大きく膨らむだろうさ」

ガレは口を堅く引き結んで無言に憤っていた。

ゾラの言葉は正しいと思ったから、口答えはできなかったのだ。

獣人であり、ハンターに追われる自分が一緒にいることで巻き込んでカリスのみに及ぶ危険は増えるだろう。

刃物、流血沙汰になることにもなる日常をガレと行動すればカリスも体験することになってしまうだろうから。

早く走れないカリスを連れることはまた、ガレにとってもカリスを庇わないとならない負担がかかり、旅の安全はぐんと下がってしまうだろう。

わかつている。

言われなくても、わかつていた。

だけど、それでもガレはカリスを連れて行きたいと思ったのだ。気づかないならさいわいに、カリスにその危険性を隠しても、だ。

だけど、またしてもゾラが、暴いてしまった。

ゾラによって知ってしまったカリスは――。

ガレはじつとカリスの言葉を持っていた。

やめると言い出さないだろうかと怯えながら。

「ねえ・・・」

カリスは口を開いた。ガレはぎゅっと身を強ばらせた。

「ガレと一緒にだと、どうして危険なの？」

カリスは不思議そうに小首を傾げたのだ。

「ゾラのお兄さんは、何のことを言っているの？」

わからないと。

頭の回転が良くて、実際に可愛くて、その上性格も普段、可愛くぶっている様子だけどガレには、カリスが話がわかっていないとは思えなかった。

が、カリスは大きな瞳をしばたたせるだけなのだ。

「どうしてガレと行くのは危険なの？ガレは僕の家出を連れ戻そうとやってくるお家の人たちに一緒に追われてしまうことになるから、駄目だよねえ・・・と思っていたけど、ガレは、どうして。僕が危険なの？」

カリスの質問の前でゾラは、男らしい大きめの唇の端を吊り上げていた。

「・・・ガレは・・・」

ゾラの言葉はこれまでとは違って澀んでいた。

ガレは、獣人だから危険だからだー！。

ゾラは口もっているが、カリスの中でくつきりはっきりと与えられなくてもわかっていている返答はこれだろう。

だけど、これは、ゾラには秘密のものだったはず。

言っていない。自分もガレも。

それをゾラは知ってしまっているって言うことだろうか？

だったら、どうして、いつ、気が付いてしまったのか。

カリスの疑問はここだった。

ゾラはいつたい、どういう人なのだろうか・・・。

どういつつもりで自分たちに関わっているのだろうか、この人と一緒にいて大丈夫なのか。

体力が無くてガレに守られるだろう自分。だけど、できることとちゃんと自分だってガレを守るのだ。

真偽を見極めようとするカリスの直視にゾラは言った。

誤魔化したのだ。

「ガレはぬくぬくなおまえとは違って野良に生きてきた部類だろう。善良ばかりな振る舞いでやってこれたと思うか？」

「ガレは悪くないもん！そういう風にしないと生きていけないっていうなら僕も同じようにできるようになるもん！！」

言って、ふんとカリスは男から顔を背けた。

言わないつもりならこっちだって、それなりにするものね。とは、カリスの内心だった。

「ゾラ、ムカついた！ガレ、向こうで二人で休憩しよう！！」

ガレの手を引いて、カリスは歩き出す。

「おい、こら」

「まだ休憩時間あるものね。いいでしょっ！！」

ふくれっ面を隠そうとしないカリスに、あまり遠くに行くなよと、ゾラは諦めのため息だった。

カリスに手を引かれて少しガレは歩いた。

クヌギの古木と茂みを迂回してゾラの姿は全く見えなくなつて、ここなら普通にしゃべる会話なら聞こえないだろうという場所までやってきて、カリスは草の上に、よっこらしよと年寄りのように言つて座った。そして持ってきていた着替えを地面に置いた。

ほらとその横の位置を手で示されたので、ガレは、カリスのかけ声を真似することなく無言で座った。

「あのね、ガレ」

甘く澄んで優しい女の子のような声でカリスは言う。

「・・・なんだよ」

ガレはゾラが言い出した不穏な内容のために暗い気分になっていた。

聞いたカリスはどう思っているか、想像が付かなかったからだ。カリスはガレにはよくわからない。

だからこの時だって結果はやはり、悪い想像すらも軽やかにぽんと超えた驚くことだったのだから。

「ゾラ。お別れ、しちゃう？」

平然とした顔でカリスはガレに言った。

そして返事を求めるのだ。

「ゾラ・・・。ちよつと嫌な感じ。意地悪を言う・・・」

「・・・でも、意地悪じゃなかったら？」

カリスの提案に飛びついて頷けばよかったのに、ガレにはそれができなかった。

自分でも馬鹿なことをいっていると思いつながら重い口を無理矢理のように動かしたのだ。

「ゾラが言うことは本当だったらどうする？・・・きつとき、大変だよ、俺と来るのは・・・」

「ガレは、嫌なの？」

カリスは驚いたような高い声だった。

「俺はっ・・・」

「ガレは大変だから、僕なんかと一緒にいるのは嫌？」

「俺は違うつ、けどっ、おまえが大変だって言ってるのっ、今だって足の裏、肉刺だらけになってきついんじゃないか！」

「僕は、きついって思っていないよ。ガレは優しいし自分のことみたいにきついって感じているだろうなって心配してるけど・・・。こういうことだって本当は言わないでおこうと思っていたのに、ゾラのせいでバレちゃったね。・・・そうになると、やっぱりゾラってとっても迷惑だね・・・」

嫌そうに顔を顰めたカリスに、ガレは話が、またズレてるって怒

りたい。

カリスは話をすり替えるのが上手いのだ。

「でもさ、おまえがこだわっているとおり、嘘はついていないよつ。あいつの言うとおり、おまえだってそのうち旅に慣れてくだろうし今よりかいりう上手くできるようになる。そうなたおまえは一人で、俺とは一緒にいない方が安全なんだよ！ハンターの怖さだつておまえは何も知らないんだ、逃げ延びたあとだつて何度も何度も夢に見るんだぞ、それだけじゃないっ—」

一緒に来るなどガレは説得したいわけではないのに、心は悲鳴をあげながら、でも言わずにはいられなくて、それはただカリスを望む自分の首を絞めることなのに！

すると、カリスはガレを遮った。

「だって・・・一人は嫌なんだもの」

溢れるように言いたいことはまだ山ほどあつたはずだつたけど、ひっそりと紡がれたカリスの言葉にガレは止まった。

「僕はガレと一緒にいいんだもの。ガレにとって迷惑かもしれないけど・・・」

「どうして・・・」

信じられなかった。

なぜ、そんなことをカリスは言うのか。

どうして、そんなことまで自分は言つて貰えるのか、ガレにはわからなかった。

「・・・なんで・・・」

すると何でもないことのように、カリスは柔らかく笑つて、だつて、と言つた。

「だって、僕はガレが好き。ガレも僕のこと好きでしょ。だから」
しかし、そのあとでカリスは不安を滲ませた顔になつて

「違うの?・・・ガレも本当は僕のこと嫌いなのか?」

ガレは首を横に振つていた。

声はあとからになった。

「・・・違うよ、好きだよ・・・凄く好きだよ・・・好きだから
こういうのに巻き込んだじゃいけないだろうって、俺は・・・好きだ
ったら駄目だって・・・」

「ガレ。・・・泣かないでよ。ガレが泣くと僕も悲しくて嫌な気分
になっちゃうよ。泣かないで・・・」

カリスは腰を浮かして自分より大きなガレの身体を引き寄せて抱き
しめていた。

優しく大事な家族のように。

黒い帽子からこぼれる黒い髪を指で梳いて小さく丸めて込み上げ
る嗚咽を必死に噛みしめている背中を撫でてやる。

「ねえ、ガレ。二人でゆこう。ゾラとはお別れしよう。いいよね？」
うん、とガレは手の甲で止まらない涙を拭いながら言葉なく頷い
た。

ゾラも良い奴かもしれないけど、ゾラはカリスを引き離そうとす
るなら、三人は望めないなら、カリスだけでいい。

カリスがいればいいと思った。

カリスと二人で。

ガレと二人で。

自分のことを好きだと言ってくれるガレと一緒に。

ガレにとって良くない選択かもしれないけど、優しいガレに甘え
てしまっただ。

カリスはそう決心した。

二人は。

二人で行こうと決めたのだ。

決心のあとは、呆気ないほど簡単に進んだ。

すぐ実行したわけではなかった。

一行が進んでいた道が小さな湖に差し掛かったときだった。

「絶対に覗かないでよね。いくら僕が、可愛いつて言っただって、僕

は二つ以上年上はお断りなんだからっ！」

「なにを、お断りだという、糞餓鬼がっ！」

「ガレと一緒に水浴びするんだから平気なんだから、ちょっとでも覗いたら二度と口聞いてあげないからねっ！」

眉を吊り上げて威嚇するカリスに、ガレは本当に、以前そういう怪しいことを体験したことがあるんだろうかと心配になったほどだった。

鬼気迫る雰囲気の前で、ゾラの方もカリスの言うとおり、水浴びの光景を決して覗かなかったようだ。

だから。

成功したのだ。

心の中でカリスとガレの二人は、ゾラの優しさに感謝して、そして、ごめんなさいとそれぞれ謝っていた。

余分にある上着をゾラから見える木の枝に残したままで、二人はそおつと足音も忍ばせて湖を後にしたのだ。

カリスはガレの背中に乗っかっていた。

ガレの言葉通り、ガレはほとんど変わらない背丈があるカリスを背負っても平気な様子で山の斜面を駆け上がって、滑り降りて走り続けた。目指していた街からも大きく離れることになってもガレはゾラから離れるために走った。

藪を飛び抜け、木の根を蹴って無言で走っていた。背中で弾んでいるカリスの身体は、迂闊に口を開けるなら舌を噛んでしまうことともう一つは、黙って置き去りにしたゾラへの罪悪感が彼らをしゃべらせなかったのだろう。

それでもまだまだ軽やかに、しばらく動き続けそうな足運びがぴたりと止められたとき、ガレとカリスは元通り二人になって、木立の果てに沈もうとするオレンジ色の夕日を静かに眺めていた。

こうしてゾラから離れて、元通りに二人になったとき、大きな危

険を回避し た気持ちになっていた。

安心感を重視して、存在に心を乱されるゾラから自分たちで離れることによってもうすべてが平気になるはずという気分になっていた。

そのあとは穏やかに、カリスとガレだけのペースでやってゆけるだろうという予定はその晩すぐに、第三者から崩されることになってしまった。

最悪の展開と言ってもいい。

二人の決断が裏目に出たのだ。

強くて油断できないと感じたゾラだ。彼を遠ざけたとき、彼の力を心から求めるといふ皮肉な結果が二人を待っていた。

夕方になって、野宿の準備に取りかかった。

ガレに出会うまで、屋敷の外で夜を明かしたことなどなかったカリスも、すっかり慣れて覚え、てきぱきと枯れ枝を集めて焚き火の支度ができるようになってその様子を、感慨深げに見つめるガレだった。

「なに、ガレ？」

「いや・・・べつに、用事はないけど・・・」

「用事はないけど、なに？」

誤魔化すべく慌てて手に持っていた火打ち石を打っていたが、小枝の山を作って手の砂埃を払って立ち上がったカリスはにっこりと笑顔だった。

笑顔で逃さない。

「・・・だからさ。・・・凄いなと思って・・・」

「なにが？」

カリスにはわからずに首を傾げている。

「だから、何にもできなかったのに・・・全然違う、変わった・・・」

「でもそんなこと言っても、ガレは普通にやっていたことだもの。驚くことじゃないよ」

「わかんないかな、その変わったことが驚くんじゃないか！」
「そうなの？」

赤い少女のような唇を不服そうに歪めていたが、言いたいことはちゃんと通じているようで頬のあたりが嬉しそうに持ち上がったように感じられて、ガレも満足な気分だった。

とにかく、ガレはカリスに対して、凄いと思っていてそんな相手と一緒にいられることが嬉しいのだ。

ゾラに対する後ろめたさ忘れるために、ずっと楽しく陽気に笑っていた夜だった。

だから少しはしゃいでいた。

ふとすると伏せ目がちに頬に長い睫の影を落としてしまうカリスも明るくあるように言葉を途切れさせることを避けて、取り留めもないことをずっと考え、言葉に紡いでいた。

今日は良い天気だったね、星が綺麗だよ。食べ物が少なくなっただから、もう少し少なくなったら町か村に――その前に、狩りをしなくては。

うん、そうだね。そうだね、とカリスは頷いて夜が更けていくうちに、うつらうつらと身体が揺れるようになってきた。

穏やかな星の光がにぎやかな夜で、膝を抱えた姿勢で穏やかに舟を漕ぐカリスの肩を優しく押してやって身体を横たえさせると、ガレも意識も薄れるようになっていた。目を何度かしばたかせたけれど眠気を追い返すことはできなかった。昼間にカリスを背負って走り続けた疲れと緊張が溢れてきたようだった。

そのときだ。

一瞬、ガレも眠ったのかもしれない。

一瞬じゃなかったのかもしれない。

酷く近くで物が動く気配がした。

座って膝を抱いた腕の上に伏せていた顔を上げたとき、音は一拳

に数倍に膨れあがった。

痛みだった。腕を掴まれて引っぱられた。

逆の肩は強い力で地面に押さえられるように、身体が二つに裂けるのかと。

ニンゲンの臭いだった。

急に、風下から現れただけでなく臭い消しが使われていた。

今の時期にはあちらこちらで咲く山の木の花の独特の強い香りが、木の根元にいるように。

いくつものにやけた男の顔だった。ひげ面の凶暴そうなニンゲンの――。

頭に大きく響くの嫌な音は鋼が擦れてたてる不穏な音だった。

「ガレっ―――」

眠っていたカリスも目を覚ました。せっぱ詰まった悲鳴だった。

カリスを助けなさいといけないとガレは思った。

カリスはただのニンゲンで、弱いんだから。

「ガレに、触るな！」

衣擦れの音、地面を踏みしめる荒々しい音を、けれどガレは土に顔を押しさえつけられて耳に聞くことしかできなかった。

「このっ、おまえは関係ない、大人しくしてろっ！」

暴れているのだ、カリスに向けられる苛立った怒声だった。

「やつ、離せ、馬鹿っ――！」

カリスの悲鳴と怒声、荒い息づかい。カリスは必死に彼の自由を妨害しようとする男達に応戦しているがわかった。

カリスを相手しているのは、地べたのガレは下半分ぐらいしか見えなかったが大柄で鈍重そうな男一人だった。

男にとって少年はか細く強く握ったら壊れそうで、だから強く掴めずそのためすばしこく手足を男の手から取り戻し巧みに逃げようとする子供に大男は手を焼いていた。

一方、ガレを押しさえつけていた男はもう少し俊敏で鋭い雰囲気を纏った三人だった。大柄な男より手強そうな者たちで、なぜなら本

命はガレなのだから、そういう力配分だった。

ハンターが追っているのはガレ。

獣人の珍しいガレは市場に売れるのだから。旅芸人の物見小屋、お金持ちの愛玩動物、はたまた最近では珍しくなった学問材料、特殊な処置を施した骨は万病に効く高価な薬の原料とも聞かされていた。

もっともガレには、自分がそんな薬になるなんて信じられなかったが、信じているニンゲンがたくさんいるからこうした目に遭わされるのだとは思った。

どこからか情報が漏れるか、うっかり街で見つけられてしまったのかガレを目的に、この男達が二人の元にやってきたことは今や明らかだった。

強く体を押さえられた拍子に、ガレの猫耳を隠していたおばあさんから貰った帽子が跳ばされて地面の上に転がって、男達の足にぶつかってさらに遠くに蹴飛ばされていった。

頭わになった黒い髪のなかに聳える二つの耳を乱暴に引っばってガレに悲鳴を上げさせた男は、ぐひ、と押さえ損ねたような、でも満足そうな声だった。ガレにとってはこの上なく不快な笑い声を漏らしていた。

頭に来た。

目の前がくらむほど頭にきたが、ガレにできそうなことはこれだけだった。

「そいつ、そいつはっ、関係ないだろ！汚い手で、乱暴に触る――」

必死で身体を起こすように力を込めながら、でも触るなどは、最後までガレには言うこともできなかった。何本もの手に押さえ込まれたままで、さらに離れていたもう一本の手がガレを目指した。首根っこに棍棒を痛烈な一撃を食らったガレの意識は煮え湯に流されたように爛れて途切れて、ガレの身体は地面の上に沈んだきり、ぴくりとも動かなくなった。

「ガレ、ガレ――」

暗い山の中で、少年の悲痛な叫び声が響いていた。

「ガレ……、返事、してよ――」

星が出ている晴れた夜で、そのうえ、いったん引き返したカリスは焚き火から炎を一本の枝木に移して捧げ持つて、道ない夜の山野を一人きりで歩いていった。

嵐のようなひとときだったのだ。

カリスは眠っていた。

それでも痛い、呻いて目が覚めた。

きつと男の足が偶然、カリスの身体を蹴つ飛ばしたのだろう。

普段寝起きの悪いカリスだったが、ぼんやり目を開いたときに目の前に繰り広げられていた光景は、カリスに“普段”を許さなかった。

飛び起きて、ガレを助けようと思った。

ガレから引き離そうと思った。

ガレの黒い帽子が跳んでいて、男達の間にはガレの頭の黒い猫のような耳が見えて、それはカリスでさえまだ触らせてもらっていない大事な耳だった。それなのにいきなり現れた男達は無理矢理に、ガレの耳を引っぱってガレは悲鳴をあげた。

「ガレ……どこだろう……」

大男が太い手でカリスの手を掴んでいて、そして意識を失ったガレが大きな麻袋に入れられたのだ。そうして袋の口は縛られて、小柄で太めの男に背に荷物のように担ぎ上げられた。

ガレが連れて行かれてしまうと慌てたカリスが決死の勢いで大男の腕を振り切って駆け寄ろうとしたが、逃れてもすぐに捕まえられていた。

「こいつはっ！」

怒りがこもった声と同時に、強い力がカリスを後ろに投げ飛ばしていた。

軽い丸太のようにと空を切った小柄な身体は、すぐに一本の木の幹にぶつかかり、肩をしたたかに打って根元に落ちていったカリスの視界は涙が滲んだ。襲われた痛みには呻き声も満足あげられなかった。

蹲って痛みが薄まるのをじっと待ってから、カリスがのそりと木につかまって立ち上がったときにはもうあたりには静かさが戻って、パチパチと焚き火が燃えているだけだった。

カリスの前から四人の男達も、ガレの姿も消えてしまっていたのだ。

カリスは、ガレを探していた。

最初は走っていたけれど、転んでから足首が痛くなって上手く動けなくなってしまうていた。灯りで足下を照らしながら足を引きずるように歩きながら、ガレを追っていた。

どっちに行つたのかもわからなかったけれど、じっとしてられないなら、とにかくカリスは進むしかないのだ。

最初は呼ぶ以外はじっと奥歯を噛みしめていた。

けれど今では呼吸をするためにわずかに開いた口からはすすり泣きが止まらなくなっていた。

「ガレ……どこだよ……返事、してよっ、じゃないとわからないよおっ……」

嗚咽の間に、声を張り上げてガレを呼ぶ叫び声だった。

見つけられない八つ当たりなのだ。怒りの色と、そして聞くものの心を潰すような強い悲しみが交互に居り混ざった声だったが、夜の中からカリスに返事を返してくれる求める声が聞こえることはいいなかった。

ガレとカリスと、ゾラの物語 7

ガレ。

ガレ、ガレ。

「ガレ・・・」

足首が痛い。足の先が焼けるように痛い。

歩けなくなったカリスは一本の古い大木の太い根っこに根っこの間にできたへこみに足を取られて転んだまま、座り込んでいた。

何度も転んだせいで土に汚れた手の平や甲で涙が伝う頬を拭うので顔まで泥まみれになっていた。金色の髪には枯れ葉が絡まっていた。半分視界の縁に見えていたけれど、カリスには取り除く気力もなかった。

ガレがいなくなってしまった。

一緒に楽園に行こうと決めていたのに。

ガレがいれば平気だと思ったのに、そのガレが急に、こんな乱暴なかたちで自分から奪われてしまったのだ。

ガレと、二人で一緒にゆく。

そのために危険な、ゾラを置き去りにしてきてこれでもう安心だと思っていたのに違ってしまった。

ガレを目の前で奪われてしまったカリスは、このときはじめて強い後悔を感じていた。

ゾラは強かったのに。

ゾラは強くて、もしあんな悪いことをせずにまだ三人でいたならあの三人など撃退してくれたかもしれないのに。

そのまえに、ゾラがいたら襲われなかったのかもしれない。

もしかしたらずっと自分たちを見ていたけれど、ゾラがいたから、ゾラがいなくなったから、今夜襲われたのかもしれないとカリスは思った。

考えているうちに、そうとしか思えなくなってしまうていた。

ゾラを追い払ったから、その罰がわりに自分たちは襲われたのだとー。

「・・・ごめんなさい・・・」

ガレ以外の名前だった。

「ごめん、なさい・・・ゾラ・・・ゾラっ・・・」

カリスはぼろぼろと涙を流して繰り返してゾラに謝っていた。今ごろ遅いとわかっていているし、自分勝手だとも。

黒い山の夜。遠くで梟の声が聞こえた。虫の声も、木々や草の葉が擦れる音がカリスの鳴き声を圧しつつぶさんとしているように押し寄せていて、カリスは声を出して泣くこともできなくなってきた。

一人ぼっちがとても恐い。不安で苦しくて、それが嫌でカリスは自分の部屋を飛びだしてきたのだ。

あそこの家では、母を殺したカリスは誰にも愛されていない、家族に嫌われているのだから。

それはカリスの優しさとまっすぐさ、そして寂しさのなかで生み出された心の闇だった。闇の中で、有りもしないものの気配を想像して怯えているのだ。

でももうそんな思いも、もうおしまいになるはずだった。

なぜって、もう家には帰らないのだから。家族がカリスを憎んでいても関係ない。カリスはガレと生きてゆくんだから！

「・・・ゾラ、ごめんなさい・・・ガレ、ごめんなさい・・・」

欺して置き去りにして。

助けてあげられなくて。

そうして。

「ごめんなさい・・・お母さま・・・ごめんなさい・・・」

僕のせいだ。

生まれてごめんなさい、だった。

「・・・ごめんなさい・・・」

小さく消えそうな声でもう一度言ったカリスも、その声と同じよ

うに闇に溶けて消えてしまふのではと思われる様子だった。
カリスは小柄な身体をさらに小さく丸めて蹲っていた。

「よしよし。よく反省したな。じゃあ、もう一度」

それはそんな空気にそぐわない明るい声だった。

耳に飛び込んできて、カリスは顔を上げていた。

涙でぐちゃぐちゃになった顔だったが、暗がりの中に立つて存在に腕を組んでいる男の姿を認めると驚き大きく目を見開き、次いでゆっくり頬の緊張が緩んでいった。

「『ゾラのお兄さん、ごめんなさい』だ。謝ったら、心の広いお兄さんはほつぺたつねるくらいで、許してやるぞ」

「ゾラ・・・ガレが・・・」

「最初に言うことは？」

「ごめんなさい、ゾラ！ごめん、謝るから、お願い、ガレを助けて！」

「ああ、酷いなあ。鼻が真っ赤だぞ？・・・ガレが見たら驚くぞ・・・」

「ガレが連れて行かれちゃったのっ！」

「そうみたいだな。向こうさんも、ちゃんと好機は逃がさないってことだ」

ゾラにとって、油断して二人の子供を見失ってしまい、すぐに追いかけてみたものの探し出すには少々時間がかかってしまった。その間にまんまとしてやられてしまったということだった。

冷やかな苦笑を浮かべていたが、それはゾラ本人に向けられた自嘲であり、ゾラの大きな手は優しくカリスの頭を撫でていた。

ゾラの筋肉に固い男らしい胴にしがみついてカリスは泣きながら訴えていた。

「ガレを袋に入れて連れていったの、殴ってガレは動かなくなってしまったの、ガレ、殺されちゃう、死んじゃうっ」

自分の紡いだ言葉に怯えたカリスの悲嘆がさらに深まっていた。

「死んじゃうよ、死んじゃう、ガレも死んじゃうよっ」

泣きじゃくり、じつとりと男の服を濡らすカリスにゾラは、今までになかったほどとても冷めていると感じられた。

「大丈夫だ」

ぽんと言った。

一瞬嬉しかったけれど、何もわかっていない気楽な言葉だとカリスは思ったから、腹が立った。

「だから、大丈夫だ。あの小僧が自分で悲観したりせずに大人しくていれば、すぐに殺されることはないだろうから落ち着けて」

「・・・本当に?・・・なんで、わかるの・・・」

嗚咽を堪えて、顔を上げたカリスはゾラを見上げるとそう聞いた。

「ゾラは、わかるの、そんなこと・・・どうして・・・」

「おまえ、疑ってるんだろ?」

悪戯っぽく笑ったゾラに、カリスは不安そうな顔になっていた。

「・・・でも、ガレは何も言わなかったし・・・僕の気のせいだと・・・。お尻もぼこっとしていないし・・・」

ゾラはびつちりとした下衣だった。

ゾラの身につける衣類が顕わにする身体のラインは、普通の筋肉の流れか、カリスと変わらない肉のつくるものだ。そこに余分な、ニンゲンにはない物が隠されているようには見えなかった。

「尻尾は根本から切った」

これも信じられないほど、ぽんと言われた。

「・・・き、切った・・・?」

「耳はもつと不自由だからな、これも切った」

肉の部分を切っただけだから、聴覚には差し障りがないのだとゾラはカリスに説明した。

カリスは絶句して、泣くことも忘れてしみじみと男を見つめていた。

「ニンゲンの体臭の香水をつけているんだよ。・・・というか、あの小僧がドジ過ぎている気がするがな。・・・ここまで、あいつに

気づかれないとは思わなかったな・・・」

たぶん、他事に気を取られすぎていたせいだとゾラは思っている。全力で、カリスに意識を向けているから注意力を欠いているのだ。端から見ていてハラハラするほどに。そうしてその結果としては、ニンゲンに夜襲を許して狩られてしまった。獣人特有の鋭敏な感覚を備えているというのに、不注意で・・・。

「その人間の耳は・・・？」

「これか？」

笑ったゾラは黒い髪を掻き上げてほとんど隠れていた人間の組織らしいものをカリスの目に晒してやる。

「当然、作り物だ。ごてごて大きめの飾り物をつけていたり、髪を長めに被せていると気づかれないものだな」

「・・・耳も尻尾も切っちゃったの・・・ゾラは、切っちゃったの？」

「ああ。生きづらいと思ったからな」

精一杯冷静を務めたけれどカリスの声は引きつっていた。

反対に、さすがに今は明るすぎるほど陽気ではなかったが、やはり薄く笑っているゾラはとても自然体だとカリスは思った。

「・・・痛いっ・・・痛すぎる・・・」

「ああ、痛かった。かなり痛かったが、切ったときは満足だったな。けれど最近は少しだけ後悔するようになったな。何年経っても寒い冬の朝に切り口が傷んだりするんだと知って、ずっと続くのかと憂鬱になるときもあるが、それだけだな。普段はほとんど痛みはないぞ」

カリスは身体を離して、目の前の不思議な男を見つめていた。

人間でもなく、自分で獣人の特徴である耳と尻尾を切り落として、獣人でもなくなった男だった。

そのうえ、後悔もしていないのだという。

カリスとガレは、強い男と恐れていたのだ。

そんな辛さを抱えてきた男だとはちらりとも思わなかっただろう。

「・・・悲しくないの・・・？」

「なにが」

「耳と、しつぽ・・・」

「寒くなつてくるとずきずきとしもやけみたいに痛みだして、そうするとー」

「違うよ！そうじゃなくて、切ってしまったことだよ。なんで、切らなくちゃいけなかったかって、どうしてこうなんだって！」

「そんなこと、わかってるじゃないか。生きていくためだ。俺が、これから、より良く。そのためにできることをしたんだ。そんなこと今更考えても意味がない、と俺は思っている。そんなことを悩みならこれからのことを考えるぞ」

言われたカリスはじつと考える顔になっていたが、そのあとに続いたゾラの言葉を聞いてさっぱりと悩むことを止めてしまったようだ。

「俺が、尻尾がないから悲しいかもしれないと考え出すとする。よく考えるために座り込むだろう。これは簡単に答えは出ないだろうので数日掛けて、じっくり考えるかもしれない」

にやつと猫の耳を切り落としたゾラは虎のように笑っていた。

「そうしている間に、ガレの小僧はいつたいどこまで運ばれて行くのやら！」

「わっ、駄目、ゾラ、考えないでっ！」

弾かれるように叫んだカリスは自分がとつても、勝手だと思った。

カリスとくつついて寝ることが最近多かった。

思い出のなかにいるお母さんとは全然違って、小さくて頼りなかったけど温かだった。

同じように温かで気持ちよかったのだ。

お母さんではなく、仲間でもなく、ニンゲンなのに。
信じられない、ニンゲンなのにだ。

弱くてまともに走れもしないカリスで、いても戦力にもならない

とはわかつていいるけれど、ガレが暗い鉄の格子の檻のなかで求めるものは、強い力でも武器でもなくなっていた。

弱くて温かいカリスだった。

カリスに会いたいと思った。

もう一度でいいから会いたいと思った。でも無理なのだとわかつていた。

それどころか、カリスは無事にいるのだろうかと考えると心が凍りそうになってくる。

カリスは気絶させられ運ばれた自分と違い、あの場所にそのまま置き去りにされたのだと聞かされたのだから。

「連れの、人間の餓鬼だろ？ どうしろっていうんだい。ちょっとばかり造作は良かったが、そんなもん！ だからって捕まえて売ったりしたら俺達は犯罪者になるだろうがよ」

俺達は歴としたハンターだ、と四人のハンターのなかで一番大きな男が胸を張って答えていた。

真っ暗な檻の中で目を覚ましたガレが騒いで暴れて、檻は壊すことはできなかったが、覆い被されていた分厚い布が捲られたのだ。

気を失う前に見た凶暴な男達の顔が揃ってあった。武器を振り上げてもおらず、檻は大きめなので残った狭い馬車の隙間に身体を窮屈そうに曲げて座っている様子は狂気もなくまるで別人の様に感じさせたが、間違いなく同じ顔で、同じ臭いだった。

「カリスを置き去りにしてきたのか、山の中に！ あいつはお屋敷育ちで弱いのに！！」

「元氣だったぞ、噛みつきやがった！」

「おまえよりも骨があった」

「戻って、あいつもっ！」

「何を言っただ、あいつもおまえと檻に入れろってか？ できるわけないだろうが」

「走っていたからな。そのうち道に辿り着くさ、運が良ければ腹が空く前に」

一番細身の男が鼻を鳴らして言い、それきり、ガレの叫びは無視された。

さんざん騒いでいるうち、遠くで鳥の鳴き声がしたのが聞こえた。夜は明けて朝が着たことをガレに教えていた。

「もうすぐ町だ。暴れるならまた殴って気絶させるぞ」

低く脅されるまでもなく、ガレにはもう暴れる気力が残っていなかった。

ガレを入れた檻を乗せる馬車はゴトゴトと走り続けていた。

覆い布を被されて、太陽が昇ろうともガレのところまでは差し込むことはなく真っ暗だった。

息苦しい風も入らない闇の中でガレは膝を抱えていた。もう眠ることもできずに、考えても何も手助けしてあげられないカリスのことを考えて、鼻をすすり上げていた。

「ごめんよ・・・楽園に一緒に行こうなんて言わなきゃよかった・・・そうすれば、カリスは助かったのにな・・・」

山の中で、足にも肉刺ができているカリスは歩けなくなって動けなくなるのだ。

一人つきりでお腹も空かして、雨だつて降り出すかもしれない。

出会ったあの街に、置いてこれば良かったのだ。

でもカリスは自分で、ついて行くといいだして実際に一緒にいっぱい歩いてきた。

ガレが今まで、自分の正体を知っているニンゲンとこれだけ一緒にいたことなどないのだ。

当然だった。そもそもニンゲンと一緒にいたことなどなかったのだから。

はじめてのカリス。

はじめて会った、ニンゲンのカリス。

体力もなくて、きれいで女の子みたいで、少し歩いただけで足の裏中肉刺を作ってしまうような奴だった。

あのまま街に置いてこれば良かったと思ったけれど、でも同じよ

うなことでも出会わなければ良かったとは、全く自分は思っていないことにガレは気が付いていた。

必要だと思ったから。

カリスはガレにとって、出会わなければ決定的に足りない要素だと疑わないのだ。だから、自分たちは会わないといけなかった、ガレにとってはそんな大きな存在、たとえそれによってカリスの人生が崩れる要因になったとしても。

なぜって、現に自分が連れ回したことにより山の中でカリスが孤独に運命を閉じようとしているのかもしれないのに。

「酷いな・・・俺・・・ごめん、カリス・・・」

小さな、ガレの懺悔の声だった。

ガレにとって今、世界は真っ暗だった。檻の中で光も差さない暗がりになっていた。

再び太陽の下に引きずり出されたとき、そこはどこなのだろうか。どんな目的に立たされるのだろうか。

ガレには想像がつかなかった。そんなことなど考えたくはなかった。

「・・・今度があったら・・・今度のもっと注意して守るから、絶対・・・」

乾いていながらどこか夢見るように甘い響きを帯びたガレの声は、しかし檻の外にいるハンターの耳にも届くことはなかった。

ガレは獣人だ。

おまえはニンゲンだ。

違うんだよ、一緒にはならない。

腹が立つ言い方だった。でも唇を尖らせてただけで文句を言えないのは、その声がとても穏やかだったから。

穏やかで、少し嘲っているように冷たくも聞こえて、悲しそうに

笑っている目をしているから。

淀みない言葉は、すぐにこう続いていったから。

「おまえはニンゲンで、お屋敷のぼっちゃんだ。ならおまえにはガレを救う力がある」

力なんてないよ、とすぐにカリスは首を横に振っていた。

自分は、そんな良いものではありえないと思ったから。

すると静かに訂正されたのだ。

「いいや。おまえは俺達には持つことができない力を持っているよ。――いや、言い直す。持つことのできる可能性のあるところに生まれたということだな。今は持つてない。ひ弱な子供だ。家出をしてもまともに歩くこともできないんだからな」

優しい声音でも、言葉はとっても辛辣だった。

そして、カリスには内容は本当のことだったので言い返すこともできなかったのだ。

「でもガレを助けることができるだろう。合法的に、この先の穏やかな人生を与えてやれる可能性だって持っているんだよ」

「・・・嘘だ・・・」

「嘘じゃないさ。おまえはどんな家に生まれたか、考えてみる。おまえの家名はなんだ、言ってみるといい」

「そついうの嫌い。・・・そんなの、だって僕のじゃないもの」

家出中の息子は堪らず俯くような話だった。

けれどゾラの話はまだ終わらなかった。

「ああ。今はまだな。ガザウィン家の当主は、ハーザード氏だ。そのハーザード氏はおまえの父親だ」

「僕のことを嫌っている！」

母親の死を自分のせいであり、家族みんなが母を好きだったのだから自分を許すわけないのだという苦悩を抱えているカリスは、傷口を触れられそうになって顔色を変えて否定していた。

その様子を見たゾラはその先にはもう立ち入ろうとはしなかった。ただし、代わりにこんなことを口に出した。

「俺はハーザードに頼まれて、その手に負えないドラ息子の様子を見てきたよ。息子に出す金は惜しまなかった。他には適任が見つけれないのだと俺に頭を下げたぞ。そういう親ばかなら、息子が家に戻って頭を下げて求めたとき、どれほどの協力をしてくれるだろうね」

意味深げに、ゾラの言葉は途切れていた。

彼は結論までは言ってくれなかったから、カリスは考えないといけなかった。

考えて末、

「……協力？」

考えつかなかった発想だった。

「相互関係、助け合いさ」

教えられて、カリスは一瞬目眩がした。

けれど、ぐらつきが消えて再び目を開いたときには自分が今すべきことを悟っていただろう。

そうして、ここまでだった。

過去の時間に戻って繰り返す夢は今日はここで途切れていた。

カリスが夢から目を覚ましたときにはもう朝日は高く地上を離れて、明るい光が世界を包んでいる。

大きなベッドのなかに沈んでいた小柄だけれどしなやかな少年の身体が気だるそうに起きあがった。

まだ目はまだ閉じられたままだ。

場所はガザウィン家のとりわけ豪華ななかの一室だった。

部屋の主である金色の髪の少年はベッドで上質のレースも恥じるような白い肌をした優しい少女のような顔立ちで、まるで広い部屋を華美になることなく上質に装う厳選された上等な調度の一部、美しい陶磁の人形のようにも見えた。

「まだ眠いの……」

ただしこの人形は口を開き、家出さえを企てたことがあるいわく付きだった。

不満を唱えた声は、高く澄んでいても少女でも人形でもなく、彼が生きる少年であることをうかがわせる何かがあった。

「おはようございます、カリスさま。遅くまで本を読んでいられるからですよ」

「一昨日は一晩中起きていたけど、昨日は普通に寝たよ・・・」

朝を告げに現れた屋敷で働く侍女に文句を言ったが、こんなことは毎日だった。女の方も明るく聞き流して、まだ眠りのなかに漂っていたいと目を開けないカリスの身体の上から掛布を剥いでしまった。

こうしてしぶしぶと、カリスの遅い朝がはじまっていた。

いつもと同じような朝だった。

晴れてはいるけれど、だからといってそれだけのこと。退屈で、明るすぎてしまいカリスが少し憂鬱になるような朝だったけれど、カリスの予想と違って決してつまらない日にはならなかった。

それは午前中の勉強の時間をつつがなく終えて、お昼ご飯を食べ、午後の予定がはじまるまでを自室のソファアの上で豪華な彩りのクッションを抱き、しどけなく過ごしていたときだった。

「僕にお客？うん、会うよ」

相手が誰なのか要領の得ないのは、この使用人が屋敷に来たばかりで仕事に慣れていないから、だとカリスは思い、お客とはたぶん本屋だろうと自分で予想をつけていた。

見つからないのは覚悟するから、探すだけでも良いから探してよと出入りの商人になんとか頼み込んでいた。父の古い友人だという老人は渋りながらも最後には骨董市に行ったときにでも探してみようと言ってくれたのだ。その古い本の結果がやってきたのだろう。

たぶん、無理だったんだろうな、と考えるカリスの応接間に向かう足取りは重かった。

「お待ちせしました」

カリスは社交的な笑顔を浮かべて部屋に入っていた。

奥の窓際に立っていた人影が驚いたように勢いよく振り返ってい

た。

一瞬、カリスの息が止まった。

カリスを見つめていた。カリスは見つめた。

カリスはあんまり驚きすぎて、すべての言葉を忘れてしまったのだ。

最初は、そのうち偶然に会うことがあるかもしれないと考えていた。再会を夢想して、何度も会話の練習を頭の中でやっていたのだ。幾通りのパターンを想定して、どんな言葉が聞かされても上手く答えられるように。

でもそれはカリスにとってとても昔のことになっていた。

偶然なんてそんなに簡単にあるものじゃないと考えだし、もうこんな虚しいことは考えまいと思うようになってしまっていたから。そんなタイミングだったのだから。

古い練習した言葉の一切がカリスに戻らなかったのだ。

無言のままで立ちつくすカリスにガレは記憶のままの低い声は彼らしく不機嫌そうに

「・・・おい、なんだよ、それ・・・もう俺のことなんか忘れた、とか言うのか？」

自分の沈黙など余所に置いて、ガレに最初に出てきたのはこんな文句だった。

どこからも喜びの聲があがらなかったことが腹立たしかったのだ。そうして睨むようにしてガレは、部屋に入っても帽子を脱ごうとしない聞かれても名乗りもしなかった獣人の少年・ガレは屋敷の一人息子たるカリスを見つめて顔を顰めて見せた。

それがカリスの呪縛を解くことになった。

「半年、だよ！」

カリスの感極まった高い声だ。

「忘れるわけないよ！半年だよ、半年も経っているのにつ！もうガレには会うことはないのかと思った。ガレは冷たい、会いにも来てくれないんだって、もうこんなの、信じられないよってっ！——」

カリスは一息に叫ぶとガレに駆け寄っていた。

「遅いよ、ガレ！」

「それは、さ。・・・だってさ・・・」

訴えられたガレは少し戸惑って何かを言おうとしたが結局言葉に上手くまとまらずに「ごめん」と小さく謝った。

カリスは腕を伸ばして外套ごとガレを抱きしめていた。

ガレだった。まさにこれはガレだ。外套の下で動いているその気配はガレの艶やかなしつぽだ。カリスの会いたかったガレなのだ。

「遅いんだって、もうっ・・・」

ぎゅうぎゅう抱きしめてその間、カリスの好きなようにさせていたガレがそっとカリスの力が弱まった頃合いを見計らって腕をカリスから引き抜いていた。

そして、今度はガレの番だった。

「おまえ、少し、背、伸びたんだな・・・」

ぐっと力を込めて抱きしめた身体は、一緒に旅した時と比べて大きくなっていると感じた。

「信じられないよな・・・本当にニンゲンで、カリスの臭いだ・・・」

それが自分の腕に収まっているのだ。

ガレの感激に震えた声に、カリスは涙ぐんでしまった灰青色の目を優しく細めていた。

「信じてよ。僕は信じているよ、夢じゃない、本当にガレだと、ね」
そういうカリスだったけれど、本当に信じてても良いのか不安になるような大きな素晴らしい喜びだっただろう。

午後からの予定は古典を学ぶものだったが、講師の先生ももう屋敷にお見えになっているため、カリスは休まなかった。

休みたかったけれど、でもそのかわりにガレが、その間も側にいると言いだしてくれたためにカリスは承知したのだ。

つまり、ガレも一緒に講義に出てくれたのだ。カリスから少し離

れてぼつんと座っている少年。旅支度のままで部屋の中でも帽子をかぶりっぱなしだった。大人しく無言でカリスが講義を受けている様子をじつと眺めていたが、これには老講師の方がとても気になったのだろう。落ち着かない様子で何度かガレを横目で見ていたが、最後には「今日は特別です」と授業を少し早めに切り上げてくれて、カリスはこの老人が急に好きになったほどだ。

そのあと、カリスとガレはカリスの部屋でやっと二人で落ち着ける時間を持てることができた。

ガレも最初はカリスの部屋の中を珍しそうにキョロキョロしていたが、しばらくすると絨毯の上にどっかりと腰を下ろして、外套と帽子も脱いでいた。

待っていた時間のはずだったけれど、いざ目の前に広がると沈黙が生まれていた。

ガレは元々、無口で言葉が少ない。

ここはカリスの家なので、カリスは自分が気を利かせないといけないと考えた。

「・・・ガレ、僕の家、話していなかったけれどよく・・・わかったね・・・」

するとただの沈黙だったのに、不機嫌さが加わったような空気に変わってカリスは焦っていたが、ガレは大人で、カリスが恐れた冷戦状況にはならなくてホッとしたのも一瞬だった。

「わからなかった」

「・・・うん」

「ああ、なにもわからなかったぞ、最初。俺はどうして檻から出られたのか。出るときは市場の競りかなんかだと思っていたけどそうじゃなかったんだよな。俺が出たときは夜中で、そのあとすぐに水場に連れて行かれて洗われて、きれいな服まで着せ替えられた。そのあとどうなるのかと思ったら、どうもならなかった。気取った帽子を被った男が俺の前にやってきて、首に飾りを付けた」

ガレは自分に起こった出来事を、丁寧にカリスに話して聞かせた。

暴れないで、危害を加えないから。と、丁寧な言葉でニンゲンはガレに言い、ガレは従ったからではなくただ気力が湧かなかったのだと言う。食べ物投げ込まれていたけれど、十日ほどを檻の中で過ごしたあとだった。檻から出されたと言ってもこの時、壁に囲まれた部屋の中であり腰や手に武器を持った男達は何人もガレを取り囲んでいた。

ガレが暴れたら鎮めるために厳つい男達ばかりだったのだろう。

そのなかで一番ひ弱そうだったのは、帽子の男であり、けれど一番部屋で強い立場にあるのもこの男だったのだ。

「怪我はしていないと言っていないかったかね？これから先、彼を殴る場合はこちらの許可を得てからにしていたらこう。かれはもうこちらの物だ」

ガレを目にして最初にまわりの男達に言った言葉がこれだったのだから。

ガレには初めての場所で、全員がはじめて目にする顔であり、ニンゲンだった。

あの夜にガレを襲った四人組のハンターはもういなかった。

「ガレくんだね」

と改まって聞かれて、ガレは頷いた。

否定する理由も思いつかなかったから。

そのあとガレを持っていた展開は、奇天烈だった。

ガレはそのときを思い出して頬を歪めていた。

「紙をもらったんだよな。そうして、それは強い武器になるから大事に持っているように。何か困ったことになったら取り出して見せれば上手くゆくこともあるだろうから。俺を助ける物だって言ったんだ。そのあとはどうなったと思う？」

「・・・さあ、わからない・・・」

尋ねられて小さな声で答えたカリスは、笑顔が消えて困ったような顔になっているとガレは思った。

「じゃあ、さよならって言われたんだ。全然わけわからないよな。」

その紙に書かれている文字だって、俺が読めるもんじゃなかったし。で、読める奴、仲間を探してやっと書かれている内容を知って、この場所も知った」

不機嫌な調子でガレの言葉が終わって、再び沈黙が訪れていた。

「なんか言えよ」

今度はガレが静寂を破った。

ガレの前で、同じように絨毯に直に座っているカリスはとても縮こまっている。表情も緊張を隠せないでいた。

「・・・ガレ、怒ってるの・・・？」

やっと紡がれた言葉は怯えているようだった。

「大事にしろって言われたものがさ、所有書なんだもんな。俺はガザウイン家の正式な所有物だって書いてあつてさ、なんだこれ、ってかんじ。俺は俺のものじゃないか。それなのにいつの間にか、ガザウイン家のハーザードって奴の所有財産で、その所有証明書を俺は大事に持たされていたんだよな。ハーザードて奴をこっそり覗いてやろうと思ったら、おまえがいた」

「・・・ガレ・・・ごめん。他にどうしていいか、わからなかったから・・・」

「あのあとおまえ、どうしたんだよ。・・・こうしているんだから、ちゃんと家に帰れたんだよな？」

心配そうな声音になったガレに、泣き出しそうな弱い笑顔をカリスは浮かべた。

「迷っていたら、ゾラが来てくれた。ゾラが僕を家に運んでくれた」

「ゾラ、ゾラー!!」

叫ぶように言ったガレはこれ以上ないほどの仏頂面になっていた。「化け猫のゾラ、っていう有名な奴だった、俺達のなかでは！でも俺はそんな奴、知らなかったって言ったらさんざん笑われたぞっ。腹が立つ、そうならそうって一言言えばいいのにさ！」

ゾラの悪口に言葉を荒立てて行くガレの前でカリスはますます背を丸めていた。

「ゾラが化け猫なら、おまえは猫かぶりだよな！」

「えっ？」

いきなり自分に話を振られたカリスは驚いた。

「そうじゃん。分厚い皮被ってるよな！」

唇をにつと吊り上げると、ガレは断言していた。

でもその口調にカリスは笑顔になれたのだ。

明るい笑顔だった。

「ガレは野良猫だ！じゃあ、みんな猫だったんだね！」

「猫、猫、猫。野良猫、化け猫、猫かぶり！」

言ってガレが笑いだしたのは、ガレの言いつぶりにカリスが吹き出したのと同じだった。

「でも俺は、もう飼い猫」

「怒ってるよね、やっぱり」

大きな緊張は解けたけれど、カリス自身がされて気持ちがいこ
とではないと感じているから苦笑が浮かんでいる。自嘲かもしれない。
い。

「よくわからない。これから俺はどうなるんだ？」

しばらく前までは、考えられなかった。

ニンゲンに囚われて家畜のように所有物にされるなどありえない
と思っていたけれど現実はいわってしまった。でもその相手がカリス
だと考えたとき、自分はどうかあればいいのかわからないのだ。

「同じだよ。このまま同じ……。でもガレの持ち物には紙と首の
輪の荷物が増えてしまったけど」

それから、カリスは低い固い声になって伝えた。

「獣人を所有する所有書は有効期間があったの、三年。三年後にも
父に頼んで更新してもらうつもりでいる。ガレは嫌かもしれないけ
ど。ガザウインに一目置いてくれる者だったら、父の報復処置を恐
れてガレにあまり迂闊に触れないと思うから」

「おまえ、ほんと、なんか旅の時とは別人みたいな感じだよな」

「それはきつと家の中にいるからだよ。ここは父の家で僕はその息子だから。旅の時は僕はただのカリスでいられたけど、それはもう終わり。家出もおしまい・・・家出はもうしないと約束したんだ」

「それは俺が捕まって、俺のことをおまえの親父に頼んだからか？」
ガレの想像は正しいと、カリスは頷いた。

「うん」

薄い笑顔で困ったようにでも、見た者が心を傷めるような悲しげな色は見あたらなかったのだ。

「でね、だから・・・僕はガレと楽園に行くことは出来なくなっちゃった。ごめんね」

躊躇ったあとに、気になっていたことを尋ねていた。

「ガレはこれから予定通り楽園目指して行くんだよね？・・・するともう会えないのかな・・・でも行っただきりとかじゃないよね、たぶん。ときどきは帰ってくる予定は・・・あるよね？」

「楽園ってさ。おまえ、本とかいっぱい読んでそうだよな。あると思うか？」

ガレはカリスの部屋の壁を占める大きな本棚を眺めながら言った。分厚い本や、ガレには読めない文字が並んだものもぎっしりと並んでいるのだ。

「え、それは・・・わからないよ・・・」

「素直に言えよ、思っていること」

「・・・あるとしても簡単には見つからないと思う。簡単に見つけられるものならもうみんなに知れわたっているかもしれない」

「・・・うん。そうなんだよな、口々に唱えて目指すようなことをみんな言っていたけどさ、俺もきつと夢話でありはしなと思う」

他人事のように淡々としゃべるガレを励ます言葉をカリスは上手くは見つけられなかった。

「なあ」

ガレが、再び書架からくるとカリスに向き直っていった。

「広いよな、おまえの部屋。明日まで隅っこにでも泊まっていいか

？」

「えっ」

カリスはガレから跳びだした想像もしていなかった言葉に目を丸くしていた。

「だから、嫌なら別にいいけどさ。俺急いで行くところなくなっちゃったんだから。だから・・・」

だから時間あるし・・・。ガレの決死の言葉に、カリスが首を横に振るなどありえなかった。

「おまえって、俺の飼い主なんだ」

「ち、違うよ。僕じゃないよ、僕の父だよ、僕には実際、そんなお金なかったもん！」

ガレを買い取るほどの金額は実際、カリスには簡単に出世なるものじゃなかったのだから。

それに飼い主などという言葉は悪人と同じ響きを感じるカリスは懸命に否定していたが、ガレは言った。

「俺は、どうせなら、顔も知らない奴よりかおまえの方がいいけどな」

「・・・そのうち僕に代わる・・・」

ガレの割りきりの良さに反して、カリスは釈然としない表情で現実を認めて告げていた。

「よくわからないけどさ、俺、結構嬉しいかもと思う」

「・・・なにが？」

「一緒に笑っていられること。だったらさ、あとはいろいろ我慢できると思った」

ガレは怒ってもいけないけれど笑ってもいけない、真面目な顔になっていた。

「きつと、全部は無理だよな。全部嬉しいことってあり得ないよな・・・なら俺、これで満足かもしれない」

これが半年の間にガレが見つけたものだった。

一人で山ほど考えて、自問自答ももう飽きてしまったのだ。

だからカリスを前にしても、ガレの予想以上にすんなりと言えた。カリスは目を見張ってガレの言葉を聞いていたけれど、そのあとくすぐったそうになってうつむいていた。

「そうだね。僕もそう思う。きつとこれで平気かもしれない」

家出をしたカリスにとつて、戻ることになった家において心にある不満も問題も一切がそのままで解決されたわけではなかった。

けれど、カリスを好きだと言ってくれるガレが一人でも確かに、贅沢を言うなら自分の側にいれば平気、とカリスも思ったのだ。なら寂しくはないと。

カリスはもう家出はしない。

父親の条件だったから。ガレの所有書を更新してゆくことの。

そのためには少くない費用が必要となるけれど、その金額がガレの自尊心を傷つけていても、ガレの身の安全を守る働きにもなるのだから。

ガレもカリスも、よくわからなかったけれど他には思いつかなかったなら。

首輪をつけたガレは、カリスの家にときどき出入りすることになる。

カリスは友人として愛想の乏しい黒い帽子の者をいつも歓迎し、新しい使用人などは眉根を潜めたけれど。

そこはカリスが逃げ出した家だった。

しかしガレが探していた楽園でもあったのだ。

旅のはじめに目指した場所とは違ったけれど、二人の楽園になったのだから。

ガレとカリスト、ソラの物語 7（後書き）

二人は楽園に辿り着きましたー！。

どこが、楽園かと言う人がいるかもしれない。

けれど二人が辿り着いたところだって、ある意味、ささやかで現実的な楽園なのだと思います。

長めのお話に、最後までお付き合いくださりどうもありがとうございます！
いました！

評価頂けると、書き続ける励みになります！よろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4384c/>

野良猫物語

2010年10月8日14時23分発行